神戸からの発信

シルバーハウジング報告書

KOBE Life Support Adviser

白い花を咲かせる大丸前のハナモクレン

発刊にあたって

神戸市社会福祉協議会　理事長　今井　鎮雄

阪神・淡路大震災において、民生委員・児童委員やボランティアの方々が、地域の要援護者への安否確認をはじめ、避難所や仮設住宅の入居者への支援を献身的にされました。また、高齢者と障害者等を対象として建設された地域型仮設住宅には生活支援員を派遣し、入居者の見守りや入居者同士の助け合い、入居者と地域の交流を深めることに重点を置き、地域コミュニティの重要性について、その活動を通して課題を提起してきました。神戸市における高齢者向公営住宅（シルバーハウジング）生活援助員派遣事業の源はこれらの経験に基づいています。

この事業は、平成10年度から神戸市の委託を受けた㈶こうべ市民福祉振興協会が事業を実施してまいりましたが、平成16年度より神戸市社会福祉協議会が受託し実施することとなり現在に至ります。

昨今、地域のコミュニティが希薄化するなかで、当会では、シルバーハウジングに入居されている高齢者の立場に立って、全ての方々が安心して、自分らしく生きいきと暮らせる豊かな地域社会づくりのために、入居者の生活支援の他にコミュニティづくりを促進することにも力を入れております。また地域住民の皆様をはじめ関係機関の方々から信頼されるよう、生活援助員（Life Support Adviser=LSA）とともに今後も努力して参りたいと考えております。

この報告書は、平成16年度から積極的に取り組んできたコミュニティづくりの支援について、LSA からの事例をまとめております。神戸市でのこの経験が、今後の地域コミュニティにおける「神戸からの発信」として受け止めていただけると幸いです。

最後になりましたが、本書作成のためにご協力いただきました関係者の皆様に深く感謝を申し上げますとともに、本書が今後、シルバーハウジング生活援助員派遣事業またLSA業務の一助となることを願いまして、発刊のご挨拶とさせていただきます。

平成19年12月

Silver Housing | Contents

発刊にあたって …… 3
神戸市社会福祉協議会　理事長　今井　鎮雄

神戸市のシルバーハウジング

神戸市のシルバーハウジング …… 8
神戸市保健福祉局介護保険課
被災地型 LSA 活動とコミュニティづくり：社会調査・アドボカシー活動を通じて　10
同志社大学社会学部教授　立木　茂雄
神戸市のシルバーハウジング・LSA の先駆性 …… 17
㈶高齢者住宅財団開発調査部　開発情報課長　落合　明美
「シルバーハウジング長田北」について …… 20
社会福祉法人神戸福生会　理事長　中辻　直行
LSA 業務について …… 22
神戸岩屋北町住宅　LSA　清水　英子
LSA 業務の果たす役割と意義 …… 25
シルバーハイツ西神井吹台住宅　LSA　川端　由美
一人暮らし高齢者の生活と命を支える試み
神戸市シルバーハウジング事業からの報告 …… 29
神戸親和女子大学福祉臨床学科講師 神戸市社会福祉協議会 LSA 事業 アドバイザー　重野　妙実

特　集

Ⅰ コミュニティサポート育成事業

神戸市のシルバーハウジングにおけるコミュニティ支援事業の取り組み …… 40
神戸市社会福祉協議会
コミュニティサポート育成支援事業への取り組み …… 48
社会福祉法人やすらぎ福祉会　脇の浜高齢者介護支援センター　センター長　濵田　福治
地域との協力行事「七夕まつり」 …… 50
神戸魚崎南住宅　LSA　生和　房雄
手話コーラスグループ設立 ～住民メンバーが主役の会～ …… 52
HAT神戸灘の浜（市営）住宅　LSA　柏原　静津子
住民同士の集いの場「大倉山シネマ」 …… 54
神戸大倉山住宅　LSA　朝日 治子・石田 幸子・玉田 和子・田村 雄吉・平井 ひろみ
世代間交流 ～幼稚園児との定期交流会を実施して～ …… 56
シルバーハイツひよどり台　LSA　壷井　信二郎
小旅行を企画して ～ LSA 奮闘記～ …… 58
シルバーハイツ舞子山手住宅　LSA　石﨑 優実・戎谷 真里・國分 良政
手をたずさえたコミュニティ支援 …… 60
シルバーハイツ筒井　LSA　坂本　由紀子

Ⅱ 入居者の声 …… 65

ひとつ屋根の下で　神戸片山コレクティブの10年
神戸片山コレクティブ住宅　会長　近江　弘子
コレクティブでの暮らし
神戸大倉山住宅コレクティブハウジング　代表　岩崎　洋三
シルバーハイツでの安心した暮らし
シルバーハイツフレール浜山　フレール浜山自治会　副会長　梅谷　香苗

Ⅲ うちの住宅自慢…… 68

東灘区 …… 68
自分らしい暮らし方
シルバーハイツ六甲アイランド LSA 佐藤 厚子
自治会長を応援しながら
神戸魚崎南住宅 LSA 生和 房雄
屋上は、井戸端会議場
シルバーハイツ北青木 LSA 的場 美隆
健康で安心できる生活を願って
シルバーハイツフレール魚崎中町 LSA 佐藤 恒夫

灘区…… 70
あったかい住宅、あったかい入居者
シルバーハイツ大石東 LSA 岡田 章代
言わせ上手、聞き上手な人…ハルさん
シルバーハイツ灘北 LSA 中塚 美代子・今西 純
神戸らしい雰囲気のある住宅
神戸岩屋北町住宅 LSA 清水 英子
意欲満々の入居者とともに
ＨＡＴ神戸灘の浜市営住宅 LSA 柏原 静津子
自慢の行事「ＨＡＴ劇場」
ＨＡＴ神戸灘の浜県営住宅 LSA 井上 かすみ

中央区 …… 72
かがやく助け合いの心がうちの住宅自慢
シルバーハイツ日暮 LSA 石橋 公子
緑のパワーでいきいきと
シルバーハイツ筒井 LSA 坂本 由紀子
笑いあふれる住宅を目指して
神戸南本町住宅 LSA 川上 栄子
楽しいことがある毎日
神戸大倉山住宅 LSA
田村 雄吉・朝日 治子・平井 ひろみ・玉田 和子
環境にやさしく、入居者にやさしいリサイクルの輪
ＨＡＴ神戸脇の浜県営住宅 LSA 木倉 いつ子
安心して暮らせる街
ＨＡＴ神戸脇の浜市営住宅 LSA 春日 杏奈・三浦 順子

兵庫区 …… 75
全国第１号のシルバーハウジング
シルバーハイツ菊水 LSA 大竹 憲司
いつもありがとうございます
神戸明和住宅 LSA 村岡 政子
歌の教室
シルバーハイツルゼフィール中道 LSA 岩本 貴博
施設の壁を彩る作品
シルバーハイツフレール浜山 LSA 市川 政子

北区…… 77
自然と文化に恵まれた住宅
シルバーハイツ鈴蘭台 LSA 新免 繁美
結束力の強さが自慢
シルバーハイツひよどり台 LSA 仲木 直子
大切なのは、おもいやりの心
シルバーハイツ西大池 LSA 佐竹 廣哉

長田区 …… 79
長田の町で、力強く
シルバーハイツ長田北 LSA 青柳 孝
日本初のコレクティブハウジング
神戸片山住宅コレクティブハウジング LSA 青柳 孝
ゆるやかな結びあいが心地いい
シルバーハイツ東尻池・浜添 LSA 山内 宣宏
LSA の願い
神戸西尻池住宅 LSA 冨田 信子・野橋 悦子

須磨区 …… 81
みなさん、元気はつらつです
シルバーハイツフレール離宮西町 LSA 伊藤 高志
季節の行事をとり入れて
シルバーハイツ松風・松風第２
LSA 松島 幸彦・木下 圭子
ペットと暮らす ～癒し～
神戸白川台住宅 LSA 植田 公裕

垂水区 …… 82
明るく元気なみなさん
神戸小東山住宅 LSA 遠藤 智恵美
美しい花々に囲まれて
シルバーハイツベルデ名谷
LSA 山口 婦美子・水田 幸江
元気の源　ここにあり
シルバーハイツ舞子山手２号棟・３号棟
LSA 石﨑 優実・國分 良政・戎谷 真里

西区 …… 84
ワンちゃんと一緒
シルバーハイツベルデ玉津
LSA 田村 政治・滝田 紀恵子
自然体でいこう
神戸玉津今津住宅 LSA 佐古 満・前田 武廣
ふれあい喫茶は交流の場
神戸伊川谷第二高層住宅
LSA 荒井 秀幸・門前 三枝子
住民同士の見守りと気配り
シルバーハイツ西神井吹台
LSA 川端 由美・山下 千恵

シルバーハウジングの未来像

「シルバーハウジングの今後のあり方に関する研究会」を振り返って …… 88
神戸市保健福祉局介護保険課
LSA 事業、今まで・・・これから …… 92
社会福祉法人 博由社 特別養護老人ホーム ハピータウン KOBE 施設長　稲松　真人
震災復興公営コレクティブ住宅の事業推進を応援して …… 94
石東・都市環境研究室／コレクティブ ハウジング事業推進応援団　石東　直子
「在宅最前線住宅」としてのシルバーハウジング―デンマークの高齢者住宅と比較して― … 103
関西学院大学大学院研究員　松岡　洋子

資　料

シルバーハウジング入居者調査 …… 110
神戸市保健福祉局・神戸市社会福祉協議会・神戸親和女子大学福祉臨床学科 講師　重野　妙実
シルバーハウジングの入居世帯状況と生活援助員（LSA）の業務内容 …… 114
神戸市保健福祉局・神戸市社会福祉協議会
平成 18・19 年度シルバーハウジング生活援助員会議・研修 …… 116
シルバーハウジングと LSA 室 …… 119

神戸市のシルバーハウジング

神戸市のシルバーハウジング

神戸市保健福祉局介護保険課

神戸市内には、生活援助員（LSA）を派遣している公営の高齢者向け住宅（シルバーハウジング）が39団地あり、神戸市営住宅が26団地、兵庫県営住宅が13団地、住戸数は2,378戸となっています。

シルバーハウジングの制度は、住宅施策と福祉施策が連携し、ハード・ソフト両面にわたり高齢者の方の生活特性に配慮した住宅の供給を推進することにより、居住の安定と社会福祉の増進に役立てることが目的とされています。特徴は、①バリアフリー設計（段差解消、手すりの設置、大型浴槽、レバーハンドル等）、②緊急通報システムの設置（リズムオンシステム・ナースコール）、③LSA による支援（安否確認、生活相談、緊急対応、一時的な家事援助等）となっています。

神戸市内のシルバーハウジングの建設は、阪神・淡路大震災の前後で大きく変わります。

まず、神戸市営住宅については、平成元年に第１号の「シルバーハイツ菊水」が、特別養護老人ホームとの合築型で建設されました。その後も特別養護老人ホームなどの福祉施設との合築型や隣接型シルバーハウジングが８団地建設されました。次に、平成７年の阪神・淡路大震災以後は、被災者のための災害復興住宅の建設が市営住宅・県営住宅ともに進み、神戸市営住宅17団地、兵庫県営住宅13団地が災害復興住宅シルバーハウジングとして建設されました。

●

震災後のシルバーハウジングは大規模に、そして多様な形態になっています。震災前は１団地も無かった単独型のシルバーハウジングは、平成13年に出来た「シルバーハイツ西大池」（以後、神戸市内にシルバーハウジングは建設されていません。）を含めて23団地（1,630戸）となりました。住戸数は、市営住宅では震災前は１団地20戸から40戸程度でしたが、多いところは100戸前後となっています。県営住宅は全て単独型で、神戸市中央区（市街地）にある大倉山高層住宅が最大で222戸（団地全体は510戸）となっています。形態は、例えば、市営住宅は特別養護老人ホームとシルバーハウジングに加えグループホームも一体となった団地が２団地あります。コレクティブハウジングと呼ばれる共同スペースのある団地やペットの飼育ができる団地も出来ました。

このように、神戸市内には多様な形態のシルバーハウジングがあり、コレクティブハウジング、シルバーハウジング、車椅子対応型、そしてシルバーハウジングではないのですが、高齢者の方がお住まいになる特定目的住戸が混ざり合う団地もあります。そして、設置されている緊急通報システムも、リズムオンシステムは、水、熱、トイレ扉の開閉タイプと何種類かあり多様となっています。

●

39団地のシルバーハウジングには、現在2,655人（平成19年８月末現在）の高齢者の方がお住まいになっておられます。シルバーハウジングは60歳から入居することが出来ます。例えば平成４年に60歳で入居された方は、当時はまだお仕事をされていたかもしれませんが、今は75歳を迎えます。そして、70歳で入居された方は、85歳を迎えます。この間に夫や妻を亡くされお一人暮らしになられた方も多くいらっしゃいます。そして、平成７年の震災により以前暮らし

ていた地域を離れ仮設住宅に入居し、更に震災復興住宅に入居された方も数多くいらっしゃいます。

神戸市保健福祉局では、市内に第１号のシルバーハウジングが出来た時から、概ね50戸に１名の割合でLSAを近隣の福祉施設から派遣していただき、シルバーハウジングの高齢者の方への支援事業を18年間続けてきました。LSAの滞在は月曜日から金曜日の午前９時から午後５時としており、夜間や休日の緊急対応はLSAの派遣施設や警備会社が行っています。

神戸市のLSAの支援の特徴は、安否確認（お元気確認）や生活相談に加え、震災の影響により復興住宅で新たな生活を始めた高齢者の方々へ、ご近所同士の声かけなどを呼びかけたりお茶会等を開いたりして住民同士のコミュニティづくりにも積極的に取り組んできたことです。そして、長年取り組んできたことを基に平成16年度からは、進む高齢化に不安になっておられる方々への一つの手立てとして、住民同士で見守りが出来るよう「コミュニティサポートグループ育成支援事業」を始めました。身近にいる住民の方々同士の見守りは、緊急時は一番速い気づきとなります。LSAは、お一人でも、お二人でも、お知り合いになる方が増え、輪がつながり広がるよう支援を進めているところです。

また、合築型シルバーハウジングを生かした取り組みとして、LSAや福祉施設の栄養士、看護師が巡回訪問により介護保険サービスには無い在宅サービスを提供しています。この取り組みは、介護が必要となっても住み慣れた住宅で長く生活していただけるよう、平成13年11月に「シルバーハウジング介護機能強化事業」として開始し、現在７施設で実施しています。具体的なサービスは、栄養士や看護師が巡回訪問等による支援を行うほか、LSAによる緊急的な受診や入院の付き添いや入院中の支援、また、介護予防等のため各種教室や会食・配食サービスも行っています。

●

平成18年度の介護保険制度改正により　①高齢者向け優良賃貸住宅やシルバーハウジング等の高齢者専用賃貸住宅は「外部サービス利用型特定施設入居者生活介護」の対象住宅と規定されました。また、②生活援助員派遣事業は地域支援事業の任意事業の地域自立生活支援事業の位置づけとなりました。

このように、シルバーハウジングの制度が変わるなか、神戸市のシルバーハウジングやLSAの支援の取り組みが今後の超高齢化社会の対策の一つとなるよう、今後も高齢者の方々の支援に取り組んでいきたいと思います。

被災地型LSA活動とコミュニティづくり：社会調査・アドボカシー活動を通じて

同志社大学社会学部教授　立木　茂雄

筆者は2002年度に兵庫県から委託を受け復興公営住宅入居者全員を対象とするコミュニティ調査の企画・実施・分析と、それに基づくコミュニティ施策の提言に関わった。また、被災者復興支援会議Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、および復興フォローアップ委員会のメンバーとしても10年近くコミュニティワークとしての被災地型LSA（Life Support Adviser）活動の重要性と一般復興公営住宅へのコミュニティワークの拡大を施策提言してきた。

本稿は、シルバーハウジングで展開された被災地型LSA活動に代表されるコミュニティワークは、総体として被災者のコミュニティづくりにどのような効果を発揮したのか。また、その成果はその後の復興公営住宅を中心としたコミュニティづくり施策にどのように生かされていったのかについてまとめたものである。本稿は兵庫県が実施した震災復興10年検証のために拙者が担当した報告書本文（検証テーマ「コミュニティづくりの推進」の成果と課題及び提言）のうち、特にLSA活動の評価に関する部分を再録し、大幅に改稿したものである。

1 2002年復興公営住宅団地コミュニティ調査：団地の規模・公的支援者とコミュニティ意識の関係の検証 (1)

兵庫県は、2002年度に、人と防災未来センターに委託し、災害復興公営住宅323団地、27,348戸を対象に入居者が近隣や地域とどのような人間関係（コミュニティ関係）を結び、それが日常性の回復とどのように関連しているのかを明らかにする社会調査を実施した。調査票の配布は2002年10月から翌年１月までの期間に行われた。実際に配布された調査票は26,399票であり、そのうち17,079票の有効回答を得た（有効回答率64.7％）。このうち、本章で検討するコミュニティ関係に関する検証では、団地単位で分析を行うため、回答者数が調査対象戸数の30％未満のもの（10団地）を除いた311団地を対象とした。

分析にあたっては、団地別の「コミュニティ関係指標」を作成し、団地の規模・公的支援者との関連性などについて検証した。コミュニティ関係の項目としては、近所づきあいに関する４項目、自治会の認知１項目、および地域活動への参加に関する３項目を用いた。これら８項目について団地単位での素点平均を求め、これを団地素点とした。調査対象となった311団地について、これら８種類の団地素点間の関連性を因子分析を用いて検討したところ、「団地づきあい度」と「団地活動度」という２種類の因子が得られた。

団地規模とコミュニティ関係：調査対象団地を、その戸数に従って、小規模（20戸未満）、中規模（20戸以上200戸未満）、大規模団地（200戸以上）と分類した上で、団地活動度や団地づきあい度との関係を分析したところ、統計的に有意な差が認められた。この結果を見ると、団地活動度については団地規模が大きいほど活発で、また団地づきあい度については、小規模団地で低い値になることがわかった。これは、小規模団地であるほど、地域活動や自治会活動の仕掛け人的な人員が相対的に少なくなるためであると考えられた。

公的支援者の有無とコミュニティ関係：団地単位での公的支援者の活動の有無と団地活動度、団地づきあい度について分析したところ、団地活動度に統計的に有意な差が認められ、公的支援者の存在が、居住者全体の自治会活動や地域活動参加度を高めていることが確認された。

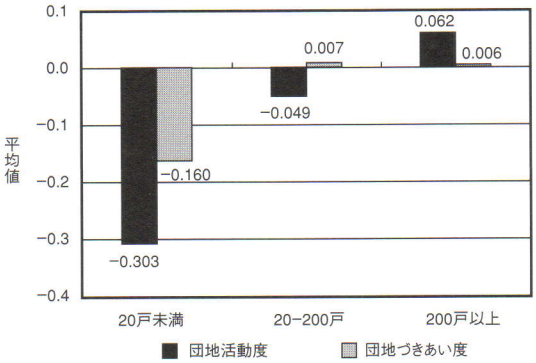


図１　「団地規模」と団地活動度・団地づきあい度（平均値の比較）

さらに詳しく見るために、LSA・いきいき県住推進員・ＳＣＳのそれぞれの有無と団地活動度についても分析したところ、統計的に有意な差が認められた。公的支援者の存在は、居住棟全体のコミュニティ活動を高めることが確認された。しかし、2002年の時点においては、ＳＣＳについては大きな効果は認められなかった。これはLSA活動との重複を避け被災高齢者への見守りを主な活動内容とし、しかも巡回型であることなどから、活動実績も長く常駐が中心のLSAや、コミュニティ支援に専念した活動を当初から行ってきたいきいき県住推進員ほどに有効な支援策ではなかったためであると考える（図2）。

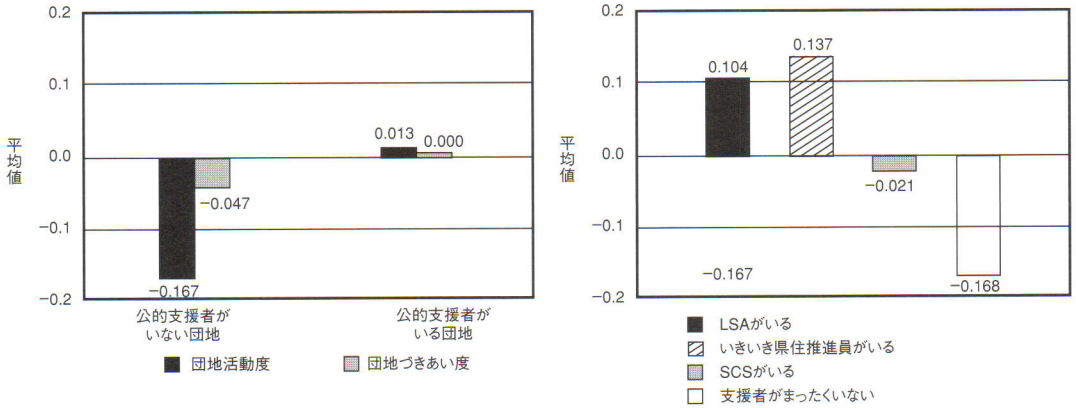


図２

「公的支援者の有無」と団地活動度・団地づきあい度（平均値の比較）

「団地活動度」と公的支援者（LSA・いきいき県住・SCS）の存在（平均値の比較）

平均世帯人数とコミュニティ関係：居住棟の平均世帯人数と団地活動度、団地づきあい度について分析したところ、いずれも統計的に有意な差が認められた。この結果は、居住棟の平均世帯人数が1.5人未満と単身者の多い団地ほどコミュニティ活動が低調となることを示した。逆に2.5人以上の世帯ではコミュニティにおける近所づきあいや自治会活動への参加が高くなることがわかった（図３参照）。

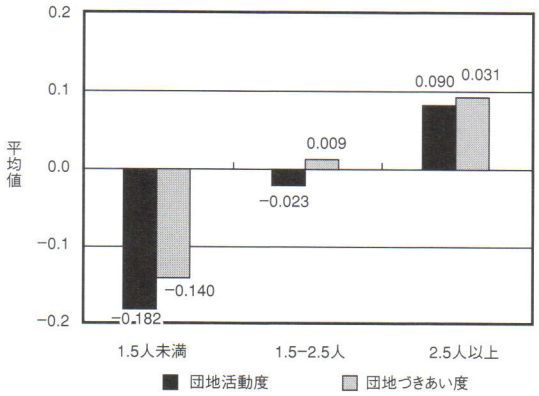


図３「平均世帯人数」と団地活動度・団地づきあい度（平均値の比較）

団地の規模・公的支援者とコミュニティ意識の関係の検証から見えてきたもの：本節では、調査対象とした復興公営住宅団地を１単位として、団地内のコミュニティ関係に影響を及ぼす要因について検討を行った。その結果をまとめると、団地内の近所づきあいや団地自治会活動への参加の程度に影響を及ぼす要因としては、団地規模・公的支援者の有無・単身者か家族中心の団地かといった要因が浮かび上がった。これらの要因がそれぞれ独立にコミュニティ関係に影響を及ぼすと見なすべきなのか、あるいは、これらの要因間相互に関連性が存在しているのかについて、以下に詳しく検討を行う。

図４は、今回の分析の対象とした311団地について、立地と規模についての関係を調べたものである。これを見ると、小・中規模団地では立地にそれほどの差はみられないが、大規模団地についてはあきらかに郊外型が都心型の約２倍の割合になっていることがわかる。しかも、大規模で郊外に立地する団地では、団地単位のコミュニティ関係（団地づきあい度・団地活動度）が活発になる傾向があった（図５参照）。

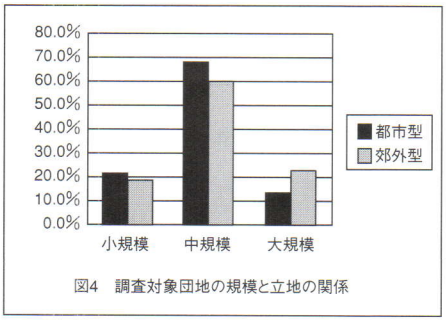


図４　調査対象団地の規模と立地の関係

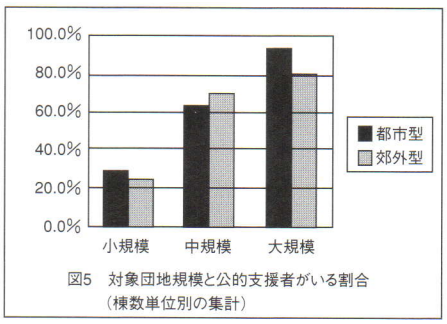


図５　対象団地規模と公的支援者がいる割合（棟数単位別の集計）

それでは、なぜ大規模・郊外型団地でコミュニティ関係がむしろ相対的に形成されやすかったのだろうか。一つの理由は、大規模型団地であるほど、LSA が配置されているシルバーハウンジング住宅の併設割合が高かった。そして LSA が配置されている団地では、巡回見回りとならんで自治会づくり支援（シルバーハウジング・一般住宅の別を問わない）などのコミュニティワーク（いわゆる被災地型LSA活動）が強調された。一方、一部の自治体の市営住宅では、市街地居住に高い優先度を置き、その結果として民間の小規模住宅（当初からシルバーハウジング仕様のものは皆無であった）の借り上げに力点を置いた。その結果LSA の配置される住

宅の割合が相対的に低くなったことが考えられる。

さらに県営住宅の場合には、団地自治会・コミュニティ活動の支援を目的としたいきいき県住推進員の活動が規模の別なく展開された。図２からも明らかなように、コミュニティづくりを視野に入れた公的支援者の有無が、団地づきあい度・団地活動度をマイナスにさせない要因となっていたが、その背景には、住宅立地や住宅規模に関する政策的決定の影響があった。

2 復興公営住宅における独居死とコミュニティ要因の関連性の検討 (2)

震災後、ゼロからコミュニティを作らねばならなかった仮設住宅や災害復興公営住宅での「独居死」が社会問題化した。ここで言う「独居死」とは、誰にも看取られずに自宅で死亡し、その死が家族や関係者、あるいは近隣住民にも気づかれずに一定程度の時間が経過した死亡事案をさすことにする。「独居死」は、一部のメディアでは「孤独死」とも呼ばれ、仮設住宅や復興公営住宅における希薄な人間関係を象徴する言葉となった。たしかに死亡から発見までに半年や１年もの長期が経過したような事案は、「都会の砂漠」・「近隣との隔絶」といった深刻な現象を連想させる「孤独死」とでも形容せざるを得ない事例があったことも事実である。

本章では、「独居死」あるいは一部メディアでは「孤独死」と報道される現象が、被災地全体でどの程度発生しているのか、このうち復興公営住宅とそれ以外の地域では顕著な差異があるのか、について実証的な検証を行った。一般に、独居死が発見されると監察医による検案が行われる。そこで兵庫県監察医務室が2001年から2003年の３年間で検案した神戸市内（西区、北区を除く）の全事案のうち、65歳以上の高齢者を抽出した。その結果、高齢の独居死者は、2001年が236人（うち復興公営住宅28人）、2002年が255人（同48人）、2003年が252人（同41人）だった。これらの事案について、死亡発見までに要した時間の中央値を復興公営住宅とその他の地域で比較すると、復興住宅では、2001年が３日、2002年は2.5日、2003年は２日と、年を経るごとに半日ずつ短くなっていた。一方、復興住宅以外では、2001年から2003年を通じて２日であった（図６参照）。この結果は、復興公営住宅でも、入居早々には人間関係が希薄で、お隣同士といった意識や行動が起こりにくかったが、「お隣に何かありそうなら声をかける」ほどのつきあいが入居後急速に広まったことを示している。こうした近所づきあいは、近隣者による緊急事態の発見や通報によって一命を取り留めた住民の数も増加させていたに違いない。

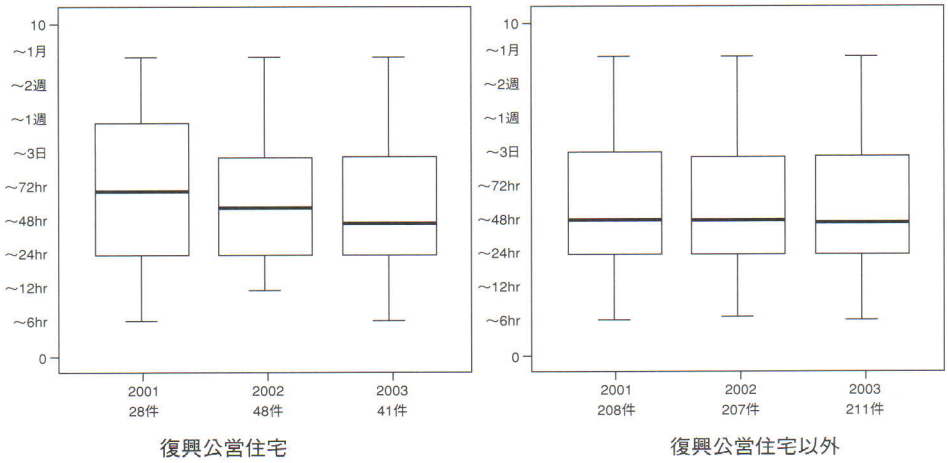


図６　推定死亡時刻から発見までの経過時間の比較：復興公営住宅とそれ以外（01年～03年の神戸市内（北区・西区を除く）7区の65歳以上高齢者の検死結果より）

次に、独居死者の死亡発見時刻が何によって左右されるのかを調べるために、災害復興公営住宅コミュニティ調査結果から団地単位ごとに、①公的支援者の配置の有無、②近隣関係、③地域活動の熱心さを指標化した。これらの指標と、復興公営住宅における独居死事案について、その死亡推定時刻から発見までに要した時間との間の因果関係についてパス分析を行った。図7がその結果である。

図7から明らかなように、高齢者の生活やコミュニティづくりを支援するLSAなどの配置と近所づきあいの程度が、発見時間を短縮させる傾向（マイナスの係数）があるのに対して、当該団地の総戸数や家への閉じこもり傾向は死亡発見時間を遅らせる方向に働く（プラスの係数）ことがわかった。この点をより詳しく見るために、死亡発見までの中央値に注目すると、LSAの配置の有無では、常駐している復興住宅では独居死発見の中央値は1日となっていた。また「近所づきあい度」が高い（中央値以上）復興住宅では1日以内、低い（中央値以下）住宅では3日以内だった。

以上、復興公営住宅での独居死発見までの時間が短くなってきたこと、その要因として人間関係（近所づきあい度）が発見短縮要因となっていることを鑑みると、見知らぬ被災者同士が入居した復興住宅だが、住民やLSAなどの支援者らの努力で震災10年を前に徐々にコミュニティが培われ、他の住宅とほとんど変わらない近所づきあいが行われるようになった、と評価することができる。

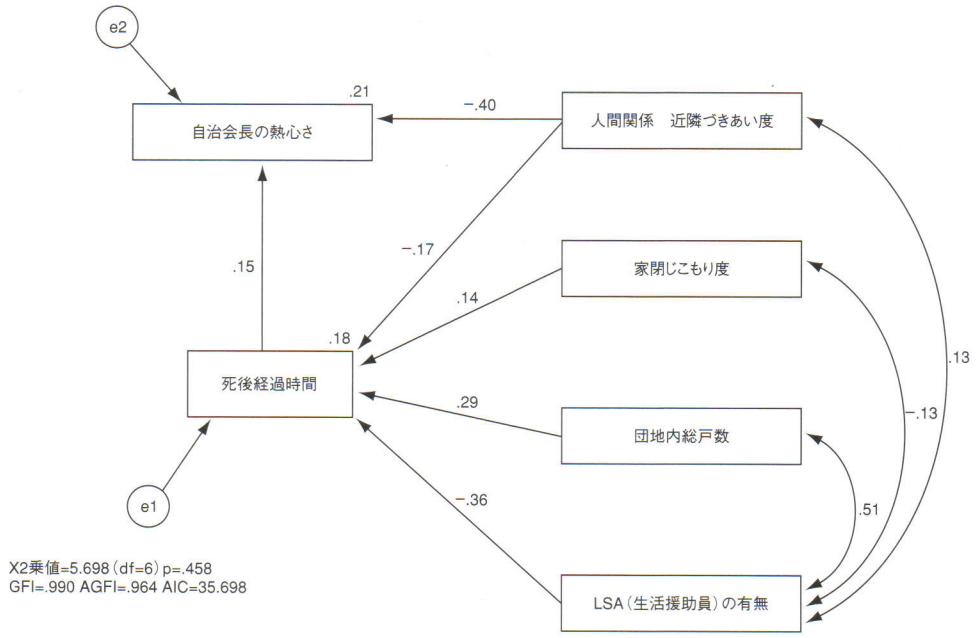


図7　災害復興公営住宅団地における独居死186事案における死後経過時間と団地内人間関係や公的支援者の活動、自治会活動の関係

3 高齢世帯生活援助員（SCS）の活動の見直しについて

2002年の復興公営住宅調査は、SCS（Senior Citizen Supporter, 高齢世帯生活援助員）の活動について再考を迫る結果を示した。この制度は、被災者復興支援会議Ⅱの第３回提案「恒常的な地域の見守りと心のケアの体制を築くために」（2000年１月17日）の中で「シルバーハウジング以外の一般の復興公営住宅におけるLSA機能を担う人材の配置」として、また同会議Ⅱの最終提言（2001年３月23日）中でも、「必要とされる地域へ、民生委員・児童委員、社会福祉協議会、保健婦（士）、自治会等の地域見守り関係者のコーディネートを行う『地域見守

支援会議の提案（日時）	兵庫県の対応
シルバーハウジング以外の災害復興公営住宅入居者の生活相談・安否確認および高齢者を支えるネットワークづくりを行うLSA機能を担う人材の配置や継続を求めたい。（支援会議Ⅱ第３回提案）（2000年１月17日）	
災害復興公営住宅はもちろんのこと、高齢化が進む地域を広くケアする恒常的な見守り体制をどのように作り上げていくかは、震災経験から得た大きな教訓であり、現在および今後の重要な課題である。 （中略）被災地市町を中心に必要とされる地域へ、民生委員・児童委員、社会福祉協議会、保健婦（士）、自治会等の地域見守り関係者のコーディネートを行う「地域見守りコーディネーター（仮称）」の配置を県及び市町に望む。（支援会議Ⅱ最終提案）（2001年３月23日）	
シルバーハウジング以外の災害復興公営住宅にLSA的機能を持った人材の配置を求める（支援会議Ⅲ緊急提言）（2001年９月21日）。	「高齢世帯生活援助員（SCS）」の設置 災害復興公営住宅では、LSAや民生委員・児童委員、保健婦（士）等の各種支援者により被災高齢者の生活再建支援が行われていますが、高齢化が進展しており、また、個別・多様化する課題に対応するため、被災高齢者等への見守りの充実が求められています。 そこで、2001（平成13）年10月から、これら高齢者等への支援に重点をおき、生活に関する相談への対応や一時的な家事援助等も行う「高齢世帯生活援助員」を設置し、訪問頻度を増やして、被災高齢者等の見守り体制を強化しました。なお、これに伴い、「生活復興相談員」制度は本制度に改めました。 １ 業務内容 個別訪問及び電話訪問により、安否確認、生活指導・相談、一時的な家事援助、関係機関との連絡、その他日常生活上必要な援助を行う。（中略） ４ 活動形態 巡回型とし、対象世帯を概ね１週間に１回訪問するとともに電話訪問を行う。
シルバーハウジング以外の災害復興公営住宅入居者の（中略）ネットワークづくりを行うLSA機能を担う人材の配置を求めたい。（支援会議Ⅱ第３回提案）（2000年１月17日）（再掲） 被災地市町を中心に必要とされる地域へ、民生委員・児童委員、社会福祉協議会、保健婦（士）、自治会等の地域見守り関係者のコーディネートを行う「地域見守りコーディネーター（仮称）」の配置を望む。（支援会議Ⅱ最終提案）（2001年３月23日）（再掲） シルバーハウジング以外の災害復興公営住宅にLSA的機能を持った人材の具体的活動は「コミュニティづくりや近隣助け合いの関係が生まれるよう、核となってファシリテート（促進）する」こと。（支援会議Ⅲ緊急提言）（2001年９月21日）（再掲）	2004（平成16）年度よりSCSの業務の見直しが行われ、SCS等が見守りグループづくりや見守りプログラムづくりへの支援を行う「コミュニティサポート支援事業」を実施した。

※現在は「保健婦（士）」から「保健師」に改称。保健婦助産婦看護婦法の一部を改正する法律の施行日（2002（平成14）年３月１日）から施行。

りコーディネーター（仮称）』の配置を」と繰り返した。さらに、被災者復興支援会議Ⅲでも緊急提言（2001年９月21日）で「高齢者が安心して暮らせる災害復興公営住宅をめざして」を出し、その提案１として、「シルバーハウジング以外の災害復興公営住宅にLSA的機能を持った人材」の配置を求めた。支援会議が繰り返し行った提案を受けて、県が復興基金事業として2001年10月より開始したという経緯がある。しかしながら、この提案をうけて発足したSCSは従前の生活復興相談員を改変させたものであり、再三再四支援会議Ⅱ・Ⅲが求めた「コミュニティづくりや近隣助け合いの関係が生まれるよう、核となってファシリテート（促進）する」（支援会議Ⅲ緊急提言、2001年９月21日）活動は、SCSの業務としては盛り込まれなかった。

2002年度の復興公営住宅団地コミュニティ調査結果などを受け、ようやく2004年４月になり兵庫県はSCSにコミュニティづくり支援業務を持たせることとなった。

支援会議Ⅱおよび同会議Ⅲの提言が繰り返し求めたのは、通常の安否確認や生活相談に加えて「被災地型LSA活動」として認知されてきた「コミュニティづくり」業務であった。これは、具体的には「高齢者を支えるネットワークづくり」であり、「地域見守り関係者のコーディネート」活動を指していた。これに対して当初県が実施したSCS業務は、これらのコミュニティ活動が業務から外された。その結果、SCSの設置は、入居者調査でも団地単位調査でも有効な効果を実証することができなかった。一方LSAの活動は、安否確認や生活相談に加えて団地内の人間関係づくり（コミュニティづくり）活動を兼務しているが故に、団地自治会活動を促進し、人間関係づくりに貢献し、独居死者については死亡発見時刻を短縮する効果が実証的に確認された。

2002年秋から翌春にかけて実施された復興公営住宅団地コミュニティ調査結果をもとにコミュニティ活性度や近隣関係度と、復興感や生活満足感の関係が明らかになったことを受けて、兵庫県は2003年度に一般の災害復興公営住宅のコミュニティづくり支援要員としてSCSを活用することの検討を始め、ようやく2004年度よりSCS等による「コミュニティサポート支援事業」が開始されることになった。

さらにポスト震災復興10年の高齢者への地域見守り体制づくりを検討する復興フォローアップ委員会の提言を受けて、2006年度以降もSCS事業は継続されるとともに、一般復興公営住宅での常駐の場を確保するための高齢者自立支援ひろば事業も始まった。このようにコミュニティサポート支援は、被災地高齢者を支援する大きな位置を占めるコミュニティ施策となっている。しかしながら、これらの事業が、震災後の地域型仮設での活動から継続して蓄積されてきたLSAによるコミュニティづくりの知恵が、SCSによる「コミュニティサポート支援事業」や「高齢者自立支援ひろば事業」にも継承され、復興公営住宅におけるコミュニティづくり支援策として実質的に機能していくかについては、今後も引き続き見守って行かなければならないと考える。

【参考文献】

立木茂雄（2006）「コミュニティづくりの推進」『復興10年総括検証・提言報告書【1】健康福祉分野』(http://web.pref.hyogo.jp/contents/000038700.pdf).

(1) 復興公営住宅全数調査の主たる学術成果については、越山健治・立木茂雄・小林郁雄・室崎益輝・菅磨志保・福留邦洋・柄谷友香（2003）「災害復興公営住宅居住者の復興感分析－2002年兵庫県災害復興公営住宅団地コミュニティ調査報告－」『地域安全学会論文集』, 5, pp.237-244を参照されたい。

(2) 神戸市内7区の独居死データの収集・整理にあたっては、人と防災未来センター福留邦洋専任研究員（当時・現新潟大学災害復興科学センター特任准教授）にご協力頂いた。ここに記し、感謝いたします。

神戸市のシルバーハウジング・LSAの先駆性

㈶高齢者住宅財団開発調査部　開発情報課長　落合　明美

私が、現職場に勤務したのは、平成５年９月です。これまでの14年間、神戸市のシルバーハウジングご関係の皆様には大変お世話になりました。当財団で機関誌の発行や調査研究の業務に携わっております関係で、取材や調査で、何十回となく神戸を訪れ、LSAや行政担当者等からお話を聞かせていただきました。時代の要請によって進化をさせていく神戸市のシルバーハウジングやLSA業務の広がりは、世の中のニーズを先取りする取り組みとして、常に注目をさせていただいております。

シルバーハウジング・プロジェクトが発足して20年になろうとしています。行政の住宅部局と福祉部局が連携をし、高齢者の安心の住まいを提供するという仕組みは、行政の縦割り組織を乗り越え、ハード施策とソフト施策を融合させる試みとしても、当時は画期的でした。神戸市では、制度創設当初から、積極的に特養と合築したシルバーハウジングをつくってこられ、全国的にも先駆的な取り組みとして認知されていたと聞きます。

私自身が、神戸のシルバーハウジングと深く関わらせていただくきっかけになったのは、1995年の阪神・淡路大震災でした。当時は、私どもの財団で全国のシルバーハウジング・プロジェクト事業計画策定業務を受託しておりましたから、未曾有の震災体験のなかで、被災地のシルバーハウジングがどのように機能をし、また、LSAがどのような役割を担ったのか、居住者の安全確保はどうだったのか、等について関心がございました。地震発生の１カ月後、石東さんはじめ関係者の皆様のご協力を得て、神戸市のシルバーハウジング２団地、西宮市・芦屋市のシルバーハウジング各１団地をたずね、LSAの方々にインタビューをさせていただきました。

交通が寸断され、粉塵が舞う神戸の町中を歩きました。倒壊・焼失した建物の残骸のなかに置かれた花やお供え物に涙したことを、今も忘れられません。最も印象に残っているのは、被害が最も大きかった長田区にあるシルバーハイツ長田北でした。地震後の大火により、焼け野原となってしまった一帯で、シルバーハイツ長田北が入るケアセンターながたの白い建物はほとんど無傷で、遠くからでもよく見えました。介護が必要な高齢者の緊急受け入れや、全国から集まってきたボランティアの基地、支援物資の調達拠点にもなっており、特に災害時には、福祉の専門機能と専門家集団を抱え、地域情報ももつ福祉施設の役割は非常に大きいことを痛感いたしました。一方、長田区では高齢者の犠牲者も多かったと聞きますが、シルバーハイツ長田北の居住者は、頑丈な建物と身近にいるスタッフに守られ、誰一人として、命を落とすことも大怪我をすることもなく、無事に、暮らしを継続されていました。震災以前から、LSAが働きかけて入居者の自治会づくりを進めていたそうですが、震災時は、その自治会が結束して、自主的に助け合いを行ったということでした。まさに、シルバーハウジングは「安心のすまい」であることが証明されたのでした。

今年はじめ、高齢者住宅に関する調査で、10年ぶりにシルバーハイツ長田北を訪れました。当時のLSAの山内さんはケアセンターながたの施設長になっておられました。山内さんによれば、シルバーハイツ長田北は高齢化が進み、今は自治会も機能しなくなっているとのことです。時系列的変化によって、必要なサービスも変化します。シルバーハイツ

長田北は、身近にすべてのサービスがそろっていますから、虚弱化が進んでも、ある程度住み続けることは可能です。一方で、施設ではなく住宅ですから、入居者の皆さんは、行きつけの近所の喫茶店で「モーニング」を食べたり、神社におまいりしたりと、長田らしい暮らしを続けておられるということでした。施設の安心と、住宅ならではの自由さを兼ね備えたのが、神戸市で初期に推進された合築型のシルバーハウジングの良さではないかと思います。

さて、震災後、被災地では、高齢者・障害者向け地域型仮設住宅が建てられ、そこにLSAを配置されました。被災されたさまざまな障害や事情を抱える傷ついた方たちが集まって暮らす中に、突如放り込まれたLSAの戸惑いと体当たりの取り組みは、これまでも私どもの機関誌に、手水仮設の桑原さん、長楽仮設の坂本さん、黒田裕子さん、重野妙実さん等の皆様によりご執筆いただきました。仮設住宅での取り組みは、まさに混合ケア、グループホームケア、地域ケアの先駆けとなる実践ではなかったかと思います。仮設を卒業されたLSAの皆様が、現在、小規模多機能の原型となるような取り組みや、グループリビング的な住まいを始められたことは、震災の悲惨な経験を通して獲得された、すばらしい成果だと思っています。地域型仮設住宅での生活を経て、居住者とLSAなどの支援者が、「集まって住まい、助け合って暮らす」ことの大切さを実感されたがゆえに始まった、実践から生まれた新しい住まい方は、現在、全国に広がっています。

その後は、相次いで建てられた大規模復興公営住宅のシルバーハウジングを、こうべ市民福祉振興協会の重野さんのご案内でいくつも見学させていただきました。新しい居住文化を被災地から生み出そうと、コレクティブハウジングやペット共生住宅など、果敢に新しい取り組みに挑戦されていたことを記憶しています。また、1,000戸近い大規模団地が一気に立ち上がり、地縁も知人もない中で、寂しさを募らせてアルコール依存症になったり、果ては孤独死などが次々と発生する中で、やはりキーパーソンとしてコミュニティづくりや入居者支援に活躍したのは、LSAでした。

従来のシルバーハウジングのLSA業務についての一般的な認識は、基本が入居者の安否確認と一時的な生活支援であり、コミュニティワーク的な機能は、重視されていませんでした。しかし、震災後の復興住宅においては、LSAは、多様なニーズをもつ膨大な入居者を支えるため、社会資源を結ぶネットワークづくりに力を入れ、そして、お一人お一人を適切にサービスに結びつけてその方の安心と生活の安定を保障した上で、社会参加の機会をつくり地域づくりをされていったと思います。LSAを、単なる緊急通報の監視役ではなく、高齢者の地域居住を支える専門職として位置づけていかれた意義は、大変大きいと感じています。

また、神戸市さんの強みは、当時、約50団地のシルバーハウジングにLSAを派遣し、その他見守り事業も始めておられましたから、LSAが100人近くおられました。全国的にみて、シルバーハウジングはモデル事業の位置づけですから、地域にLSAが複数いるところはほとんどなく、情報交換をする仲間を持たない、一人職場の孤独なLSAがほとんどです。行政が、LSAをとりまとめて研修を行ったり、相互交流を促しているところ

はほとんどありません。また、LSAの身分も明確に保障されているわけではなく、業務区分も明確ではありません。そんななかで、頑張りすぎて燃え尽きてしまうか、逆に割り切って、安否確認だけに徹するなど、LSAという仕事が確立されていないだけに、誇りをもって取り組むことが難しい状況におかれているLSAがほとんどでした。

しかし、神戸市では、LSAを一つの専門職としてとらえ、高齢者の在宅を支える重要な結節点であることを、研修を通して位置づけ、また、優れたスタッフを育て、最も高齢者に近いところにいるLSAを中心に、在宅を支える地域ネットワークを構築されました。これは、画期的ともいえます。国の施策においても、LSAをシルバーハウジングに限定せず、地域の実情に応じて幅広く対象とすることがうたわれています。神戸市で先行的に取り組まれている「見守り推進員」、「高齢者自立支援拠点事業」などは、今後、普遍化して取り組まれていくのではないでしょうか。バックアップの母体施設をもつこと、地域住民や行政との連携がしっかりとれていること、こういった条件整備をしたうえで、地域見守りを行うLSAが配置されれば、まさに面としての支援が可能になります。今後は、その有効性をデータでもって実証していくことが期待されると感じています。

どこに住んでいようと、そこに孤独を抱え、リスクをもったお年寄りが住んでいれば、そこはすべてシルバーハウジングになるという、シルバーハウジングの普遍化が一層進むことを願ってやみません。また、LSAや見守りの役割の重要性を示してこられた神戸市の関係者の皆様のご努力に、最大限の敬意を払いたいと思っております。

ハナミズキ

「シルバーハウジング長田北」について

社会福祉法人神戸福生会　理事長　中辻　直行

「シルバーハウジング（高齢者専用第１種市営住宅）長田北」は平成５年４月、特別養護老人ホーム長田ケアホーム（定員50名）、神戸市立西部高齢者支援センターに合築して整備されました。神戸市立西部高齢者支援センターはショート専用施設（定員40名）、デイサービスセンター（定員20名）、在宅介護支援センターの３機能を持ち、神戸市内初の施設でありました。厚生省（現在は厚生労働省）のモデル事業にも指定され、在宅サービスを強化した都市型高齢者総合施設として長田区の中心地に、区役所、警察署、消防署と同一敷地に前後して誕生しました。当時、神戸市の特別養護老人ホーム等の高齢者施設は北区、西区に偏在し、市街地に立地する特別養護老人ホームは兵庫区に１施設だけでした。そのため、在宅介護の推進拠点の第１号として市が用地を提供し社会福祉法人を公募して、全国でも初めての都市型高齢者施設として整備され、併せて高齢者住宅をも併設する画期的な事業でした。

「シルバーハウジング長田北」は単身者住宅20戸（39.1平米）、夫婦用住宅18戸（54.1平米）、多目的室１室（54.1平米）が高齢者施設の３階から７階に併設されました。特別な設備として24時間生活リズムセンサー、ナースコールが高齢者施設に直結して非常時対応をすることで安全な生活を確保し、高齢者施設にLSA（生活援助員）を配置し、日常生活の相談等を行う体制がとられています。それまでのシルバーハウジングでは、生活援助員が住み込みの管理人のような形をとっていたため、住人との適切な関係が確立できずに定着しない事例が多く、建設省（現在は国土交通省）との協議の結果、施設機能で対応することが初めて認められました。

当初の応募は40数倍で、所得制限等で排除された方を含めれば100倍近い希望者がいたと記憶しています。入居者の多くは神戸市内の下町の木賃アパート（木造の民営賃貸アパート）から転居されました。阪神大震災の直後、『元の家を見てきたらペシャンコで、ここが当たってなかったら死んでましたわ。』という入居者が多数、居られました。

入居直後、歓迎の『鍋パーティー』を行い、自治会が発足しました。そのとき、私は長田ケアホーム等の総施設長をしていましたが、『この高齢者住宅に入居でき皆さんは、宝くじに当たったような人ですから、自治会をつくり、皆さん同士が助け合い、一日でも長くここで楽しい日々を送りましょう。』と挨拶をしました。

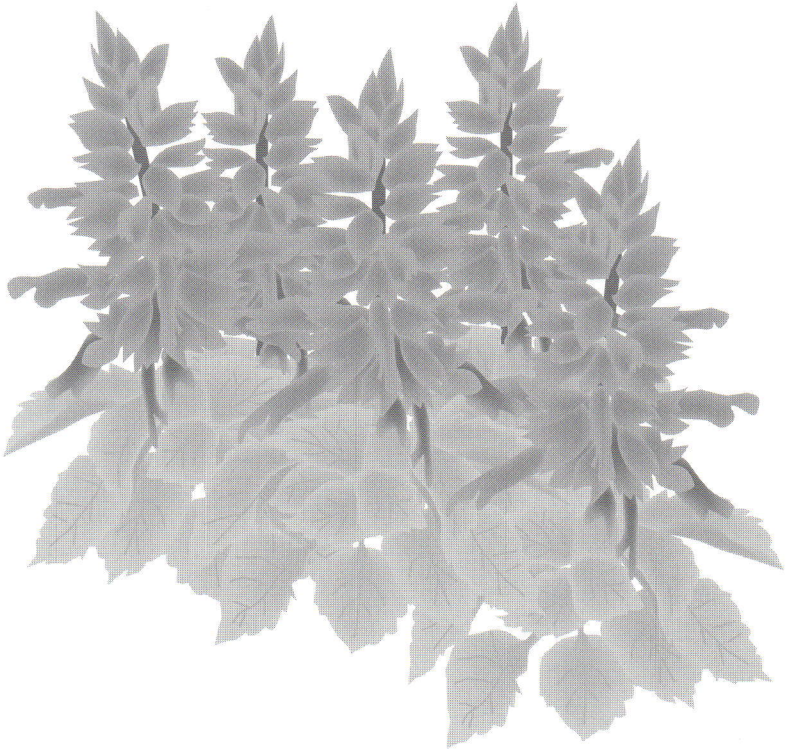
自治会には、「健康生活委員会」「環境整備委員会」「教養娯楽委員会」の三委員会で、健康生活委員会の役割は、「風邪」など体調が悪いとき、調理等の家事や添い寝等の見守りを入居者の助け合いで行っています。入居後１年９カ月で阪神大震災に遭遇されましたが、大災害も相互援助で乗り越えることが出来ました。

しかし現在は、入居後、14年以上を経て、平均年齢は79歳を超え、数年前に自治会もまとめ役が亡くなり、活動を中止しています。介護保険の対象者も過半数を超えました。毎日、ナースコールを押す方、毎日のように深夜、電話を掛けてくる方、ご主人が長田ケアホームに入居されて、奥さんが一日の大半を当施設で過ごされる方等、施設との関わりが非常に強くなっています。高齢者施設と高齢者住宅の合築は入居者の安心感が非常に高く、要支援・要介護となっても在宅で暮らし続けることの出来る、理想型といえます。

平成７年１月に阪神地区を襲った阪神・淡路大震災は、都市の高齢者問題を一瞬にして揺

り起こしました。避難所で急激に心身状況を悪化させる高齢者。高齢化率が50%を超える仮設住宅。緊急一時保護から在宅復帰できない要支援・要介護高齢者。震災後、多数の災害復興住宅が建設され、シルバーハウジングも全国の半数が神戸に建設された。当法人では、シルバーハウジングにLSAを派遣すると共に、災害復興住宅の高齢者等にも「見守り推進員（災害復興高齢世帯支援員）」の派遣を行っています。

住み慣れた地域から抽選でバラバラにされ孤立した高齢者に、新しい地域のつながりを再構築することは至難の業です。非常に困難な業務ですが、近未来の超高齢化社会の『高齢者の住まいのあり方』の答えが見えてきたような気がします。シルバーハウジングや災害復興住宅の支援で得たノウハウを、高齢者の多数を占める厚生年金高齢者が安心して暮らせる高齢者住宅に生かせたらと願っています。



サルビア

LSA 業務について

神戸岩屋北町住宅　LSA　清水　英子

神戸市内には、39住宅のシルバーハウジングがあり、入居世帯50世帯に対して１名のLSAが地域の社会福祉法人から派遣されています。

神戸市では、LSAが具体的な仕事の仕方とその範囲を「シルバーハウジング生活援助員業務マニュアル」（以下マニュアルという）にまとめ、それに沿って業務を行っています。

マニュアルに記載されているLSAの業務内容について抜粋し、説明します。

神戸市のLSA業務には、以下の７つがあります。

① 生活相談
② お元気確認（安否の確認）
③ コミュニティづくりに役立つ支援
④ 一時的な家事支援
⑤ 緊急時の対応
⑥ 関係機関との連携
⑦ その他日常生活に必要な支援

生活相談は、具体的には福祉・介護保険・医療・経済・住宅・家族・地域・その他の相談です。相談に際してLSAは、入居者に対し基本的な人権を尊重し、敬意を持って接します。入居者の気持ちや思いを傾聴し、共に考え問題を整理し解決の糸口を見つけられるように情報の提供や支援を行います。また、入居者からの相談でLSAが解決できることはわずかです。LSAは、相談の内容により関係機関を紹介したり、連絡したりする“つなぎ役”であり、決定するのは入居者です。また、問題を解決するのは入居者と関係機関です。LSAの立場は入居者の自己決定と自立支援が原則です。助言が押しつけにならないよう常に適切な距離を保ち自己評価をしながら仕事を進めます。またLSAは、どのような場合でも保証人や身元引受人になる立場にありません。金銭や鍵を預かることもしません。入居者との適切な距離を保ち、信頼関係を築いていくことが大切です。そのためにも、全ての入居者に公平な対応・支援を心がけています。

お元気確認（安否確認）は、LSAが各戸訪問や電話で直接行うほか、他の入居者との会話やさまざまな行事や集会での出会いなどを通じて行います。各戸訪問は原則として玄関先で行います。インターホンを押してから玄関ドアが開けられるまでの時間や、ドアが開いたときの瞬間に、部屋の臭いや温度などを五感を使って観察し、直接入居者ご本人からお話を聞く前からお元気確認は始まっています。同時に入居者の顔色や体調、食事が取れているか、失禁はないか等も見ます。体調不良と見受けられる時には、必要なサービスが届くように助言します。日頃から体調不良（病的な精神状態、アルコール依存症）の入居者に対しては、保健福祉サービスが届くよう心掛けます。入居者が入院や入所をされた場合はお元気確認を休止しますが、退院など帰宅される日程が把握できるように入居者やその親族、関係機関と良い関係をつくり、帰宅後の支援を行うために連携がとれるよう努めます。

お元気確認を拒否された場合で、入居者がお元気な場合は、間接的な見守り活動とし、必要な時にはお元気確認が出来るようにします。また、お元気確認を不快に感じられる場合は無理をせず、受け入れられる範囲で確認し、全くの拒否の場合は間接的な見守りにします。拒否の方がLSAを必要とされた場合、いつでも受け入れる準備があることを伝えておくこととします。ゆっくりと良い人間関係

を作ることから始めます。お元気確認の難しい入居者がいる場合は、あらかじめLSA派遣施設（以下、「派遣施設」）と神戸市社会福祉協議会（以下、「市社協」）と協議しておきます。

お元気確認ができない居室への対応では、他の入居者に尋ねたり、緊急連絡先に連絡します。生活保護受給者の場合は区役所保健福祉部担当ケースワーカーに連絡します。上記をふまえ、派遣施設、市社協に状況を報告し、指示を得ます。

コミュニティづくりに役立つ支援とは、入居者が近隣と気軽に話し合えるよう、挨拶や会話をする事や近隣の様子で変わったことがあった場合はLSAに知らせて欲しいと伝え、近隣の状況などを気にかけてもらったり、話し合って解決すべき問題がある場合は、話し合いの場を持つよう提案し支援することです。

集会所の行事やイベント等の声かけをしたり、コミュニティサポートグループ育成支援事業で近隣が親しくなれる場の提供と、住民相互の見守り活動などによるコミュニティづくりを支援すると共に、コミュニティサポートグループの育成支援をします。住宅で孤立している人がないように、また孤独死がないように声かけを心がけます。

一時的な家事支援とは、入居者が急に家事の支援を必要としている時、例えば退院直後で体調が悪く買い物が出来ない場合や急病の場合の通院介助など、LSAの判断で状況に応じて支援を行います。ただし、親戚や老人会などの地域の支援が可能な場合は援助してもらい、支援体制を作ります。また、継続して援助が必要と見込まれる場合は、介護保険の申請を勧めたり、関係機関への相談などを提案します。

緊急時の対応について説明します。

シルバーハウジングには高齢者が自立して安全かつ快適な生活が営めるよう緊急通報ボタンや生活リズムセンサー（水センサーまたはパッシブセンサーなど）などの緊急通報システムが備わっています。

緊急通報ボタンは、トイレ・浴室・和室・居間に設置されています。市営住宅、県営住宅で一部様式が違いますが、押すとLSA室及び警備会社(契約している住宅に限ります)に通じ、緊急対応が出来るようになっています。

生活リズムセンサーは、ドアの外側から施錠した場合は、システムが「不在」と判断し、働きません。ドアの内側から施錠した場合と、無施錠の場合にシステムが「在室」と判断し、働きます。

生活リズムセンサーの水センサー警報は、①システムが働いている間（「在室」に12時間（一部16時間）以上水道を使わない場合。②システムに関係なく２時間以上水道水が出続けた場合や、１時間以上多量の水道水が流れている場合に自動的に発報し、LSA室および警備会社に通報されます。

パッシブセンサーは、体温を感知して作動します。12時間以上室内での人の移動がない場合に通報されます。

体調によっては不都合に感じるシステムですが、基本的な知識を入居者へ分かりやすく説明し、上手に利用してもらえるようにします。

緊急通報システムの緊急通報の対応は、LSAが勤務中はLSAが対応し、それ以外の時間は、警備会社の対応となります。(24時

間対応）

緊急通報の警報が発報している間のみ、LSAと警備隊員が持っている緊急解錠鍵で玄関のドア（ドアチェーンも含む）を開け入室出来ますが、各入居者宅の鍵はお預かりしていないため、退出する際には外から施錠することが出来ません。このため各入居者には所定の場所にスペアキーを用意してもらっています。

緊急対応時は、入居者の身体状況に応じて適切な処置をとります。身体に異常が見られる場合、かかりつけ医や緊急連絡先に連絡します。生命が危機的な状態にある場合は、救急車を要請し、緊急連絡先、派遣施設、市社協にも連絡します。

救急搬送となった場合、原則としてLSAは同乗しません。搬送先が分かれば聞いておきます。

関係機関との連携とは、入居者が安心して生活するため家族や緊急連絡先を始めとし、福祉、介護保険、医療、住宅、地域などの関係機関との連携を大切にしていくということです。そのため、関係機関や関係者へLSAの存在を知らせてもらうよう入居者に伝えます。

その他の日常生活に必要な支援とは、入居者の依頼や希望をお聞きしたことが、生活に支障を来すような事ではないが、LSAが支援が必要と判断した場合、職務に支障を来さない範囲で対応することをいいます。判断がつかない時は、派遣施設、市社協に連絡、相談します。

マニュアルに記載されていることはあくまでも基本的なことであり、住宅のある地域の地域性や入居者お一人お一人の状況により対応や支援の仕方はさまざまです。

私は5年間LSA業務に携わってきましたが、今振り返ってみると一人の人間としてこの仕事に関わってきたように思います。ただ、LSAとしての自覚は忘れないようにしてきました。入居者の方から話を聞く時はご近所さんのように聞き、大切なことはしっかり掴み、記録する。支援が必要な場合は協力する。あまり事務的に接しても、なれなれしく接してもいけないと思っています。適度な距離がどんな時でも取れるようにすることが大切なことだと思います。

LSAの仕事は簡単そうに思われますが、実は難しいもの、奥の深いものだと感じています。経験と技術がこの仕事には必要なんだと、ひしひしと感じています。

この先も、入居者の自立した生活ができるような支援、介護予防的な支援、知恵や力を生かすような支援を行い、最後までこの住宅で生きいきと生活していただけるよう見守りを続けていきたいと思っています。

LSA 業務の果たす役割と意義

シルバーハイツ西神井吹台住宅　LSA　川端　由美

〈はじめに〉

阪神・淡路大震災から、すでに12年が経つ。当時は神戸市内だけで約３万戸を超す仮設住宅が建てられた。そして４年の歳月をかけて、被災者はそれぞれの新しい住み家となる恒久住宅に引っ越していくことになる。その一つに復興住宅がある。

復興住宅には当初、震災で住居を失い自力での再建が難しい高齢者を優先的に入居させている。長年住み慣れた地域に帰ることができず、不本意にもなじみの無い場所に建つ復興住宅に入居せざるを得なかった高齢者も少なからずいる。従って、新しい地域になじめず、いつまでも元の居住区を引きずっていたり、引きこもりがちになったりして、コミュニティの形成に難しい要素がある。自治会の運営など、コミュニティの維持も困難になってきているのが現状である。復興住宅における高齢者の抱える問題は、高齢による心身の衰えに限らず、環境の激変によるさまざまな生活問題や人間関係、精神不安など多岐にわたっており、その問題の根も深い。

生活援助員（LSA＝Life Support Adviser）は、神戸市の生活援助員派遣事業の運営を委託された神戸市社会福祉協議会から再委託を受けた社会福祉法人に所属し、各住宅に派遣されている。現在、神戸市内39カ所のシルバーハウジングに54人のLSAが従事している。神戸市の場合、１人で約50戸を担当。公営住宅内にあるLSA室に、平日の9：00～17：00勤務している。シルバーハウジングの入居者（60歳以上）がその対象である。

シルバーハウジングには緊急通報システムが設置されており、西神井吹台住宅の場合、LSA室と警備会社に繋がっている。緊急通報が発報すると勤務時間内であればLSAが、それ以外は警備隊員が24時間対応できるようになっている。緊急通報システムには、緊急通報ボタンと水量センサーがついている。本人が通報する以外に、12時間以上水を使用しなかったり、２時間以上出しっ放しにすると自動的に発報する。もし発報時、内側から施錠されていたとしても、LSAと警備隊員は、緊急解錠キーで入室し対応できるような仕組みになっている。

〈LSA業務の意義と役割〉

LSAの業務には、大きく分けて２つある。１つは、高齢者が安心して自立した生活が送れるよう見守り支援すること。もう１つは、住民同士が支えあい生きがいを持って暮らしていけるようコミュニティづくりに役立つ支援を行うことである。

以下、LSAの業務に沿って、その意義と役割を紹介したい。

LSAの業務の内容は、Ⅰ　①安否の確認（神戸市では「お元気確認」と呼んでいる）②生活相談　③緊急時の対応　④一時的な家事支援　⑤関係機関との連携　⑥　その他日常生活に必要な支援　そして、Ⅱ　コミュニティづくりに役立つ支援である。

Ⅰ「安否の確認（お元気確認）」は、戸別巡回訪問を通じて行うことが多い。これはLSAが「気にかけていますよ」ということを伝える基本的な手段である。これにより、対象者は「見守られている」という実感を持ち、信頼を寄せてくれることになる。戸別訪問を通じて対象者の変化や問題を見つけ、話に耳を傾けることにより、対象者の思いや状態を確認する。必要であれば、関係機関や専門家につなぐ。LSAは守秘義務を守り、他言しないことにより、対象者が心を開きや

すい信頼関係を築く。対象者の状態に応じて訪問頻度を変えるが、定期的に訪問することにより、「いつもあなたを見守っていますよ」というメッセージを伝え続けていく。これを繰り返すことにより、何かあったときには相談できるという安心感を持ってもらえるようになることが大切である。

「生活相談」では、ガスや電気が「つかない」という日常生活上の困り事から「死にたい」という訴えまで、実にさまざまな問題が持ち込まれる。シルバーハウジングの入居者は、復興住宅の住民であり、復興住宅という日常性の中で、さまざまな悩みや不安を抱えながら生活している人達である。家族や近隣との人間関係のトラブル、住宅への不満、体調への不安、精神不安や認知症による妄想や不眠の訴えなどという重いものから、公的な書類の代読・代筆・説明、地域情報、福祉情報の提供といったものまで、多種多様である。例えば、理解力や判断力あるいは視力や握力の低下は、公的機関に提出しなければならない書類の処理能力に表れてきたりする。去年まで自力でできていたことが、今年は自信がなくなったり、できなくなったりすることで、その人の現状を知ることになることがある。

特に精神不安や疾患は、独居の高齢者に多く、根底に孤独感や寂しさがあることは否めない。この場合LSAは、「隣が壁を叩く！」などの訴えの現象に振り回されることなく、その根底にある寂しさや不安に焦点を当てて対象者の声にじっくりと耳を傾け、否定も肯定もせず、その人をそのまま受け止める努力をすることになる。必要な場合受診を勧めたりするが、当事者にその自覚がなければ拒否されることも多い。LSAには当事者の生活に踏み込んで指導したり管理したりすることはできず、現象を空中に放りあげたまま、手を出すことも手放すこともできないまま、時間が環境や意識を変えてくれるまで、辛抱強く本人に付き合っていくしかないことも時にはある。また認知症などから来る近隣トラブルなどは、周りに理解を求めていくことが必要であるが、守秘義務を守りながらの支援は、遅々として進まないこともある。この場合、LSAは家族や近隣との関係性を日頃からしっかりと築いておくことが望ましい。忍耐と根気のいる、難しいところである。

「緊急時の対応」は、勤務時間内であればLSAが対応し、時間外であれば警備隊員が対応することになる。警備隊員は到着までに時間がかかることもあり、発作等命の危険が予測される場合は、緊急通報の他に、自力で119番通報もするよう声掛けをしている。発報時に限らず、体調不良と分かったとき、場合によっては救急車を呼んだり、かかりつけ医に連絡したり、家族に連絡を取ったりすることもある。そのため日頃から緊急連絡先やかかりつけ医の情報を確認している。緊急時には、当事者のみならず支援者も精神的安定を欠きやすいため、日頃からさまざまな場面を想定しておく必要がある。落ちついた観察力と判断が求められる。

「一時的な家事支援」とは、本人や家族の力、既存のサービス利用では対処しきれない、予測できない緊急事態への対応を指すものである。決して、日常的に提供されているサービスの不足を補うものではなく、あくまでも、正規のサービスにつなぐための緊急的・一時的支援である。一歩間違えれば、LSAは管理人になったり、ヘルパーになったり、便利屋になりかねない。LSAが直接問題解決するほうが、手っ取り早く対象者からは喜ばれ

るかもしれない。支援者としても達成感を得やすいだろう。しかし、対象者はあくまでも公営住宅の住民であり、自立した生活者である。我々の支援の目的は、その自立を支援することにある。安易に手を出すことにより、当事者の残存能力を損なったり、依存度を増したりすることのないよう、心して支援しなければならないと思う。

「関係機関との連携」には、さまざまなものがある。LSA は、対象者から発信されるサインを見逃さないよう常にアンテナを張っておく必要がある。問題の発見や生活相談の中から新たな援助が必要と思われれば、関係機関につなぐ。すでにつながっている場合は、その関係機関と情報のやり取りをする。専門家の判断が必要であれば、そこにつなぐ。本人の意思能力に問題があり、生活障害が起きている場合は、本人に家族への連絡を勧めたり、こちらから家族や関係機関に連絡を取り、状況や気付きを伝え、適切な対応をしてもらえるよう働きかけることもある。LSA室は住宅内にあるため、住民の日常生活、住宅内の人間関係、自治会や住民グループ・近隣との関係など、たくさんの情報を持っている。関係機関は、これらを有効利用することで、支援をより有効的なものにできるのではないかと思われる。

「その他日常生活に必要な支援」としては、情報提供があげられる。高齢者は、耳や目が衰えやすく、テレビやラジオあるいは新聞等からの情報が得にくくなる。おまけに、行動範囲も狭くなってくるので、ますます情報は入りにくい。また、理解力に問題が生じている場合もあるため、情報をわかりやすく噛み砕いて伝え直す必要がある。情報が正確に理解できれば、的確な判断を下すことができる場面も増えてくるのである。

Ⅱ 「コミュニティづくりに役立つ支援」

神戸市は平成16年秋から「コミュニティサポートグループ育成支援事業」を展開している。これは、入居者が安心して生きがいを持って生活することができるよう、LSA が住民グループ等のコミュニティサポートグループを育成支援し、住民相互の見守り活動、ふれあい交流等によるコミュニティづくりを活性化させることを目的としている。

震災直後は、ボランティア活動も驚くほど活発であった。しかし、年月の経過とともに、コミュニティを支える力は弱くなってきている。自治会自体、役員のなり手がない。住宅内のさまざまな行事の担い手であるボランティアも高齢化や体調不良などでだんだんと先細りしていく。このままでは、コミュニティが衰退していくことは必至であることから、それを支える人たちを育成し、何とかコミュニティを活性化させることが必要になってきたのである。高齢化が進み、依存度が増していく中で、高齢者の自発的な活動は望めないという声もあるが、LSA が少しお手伝いをすることにより、高齢者の経験を生かし、住民相互の助け合いや見守りの目が育っていくことになれば幸いである。また、支え手として活動することにより、住宅内での居場所ができ、自分自身の生きがいを得ることにもつながっていく。LSA は、その最初のきっかけづくりをすることができればよいのである。いったん動き出すと、高齢者の知恵と行動力は、想像を超えて遥かに深く、強いようである。

例えば、私の元の職場があった住宅では、自治会は、毎年全役員が当番制で交代し、継続的な事業を催しにくく、経験が蓄積されな

いため、長期展望が望めない状況にあった。そこで、住宅内のコミュニティづくりの母体として、老人会を立ち上げることにしたのである。LSAの関わったことは、最初のキーパーソンを５人見つけることと、その５人で立ち上げ準備会を発足させ、議論を重ねながら、規約作りや設立総会に向けての準備のお手伝いをしたことである。だんだんと老人会便りなども自分たちで発行することができるようになり、LSAは予定通り、黒子に後退することができた。会員数70名ほどで、七夕祭り・敬老会・健康講話・バス旅行など多彩な行事をこなしている。役員さんは大変なご苦労をされているが、役目を得てその顔は生きいきと輝いているように見える。

現在の職場では、幸い住宅内の集会所行事は多彩で、空いている曜日が１週間のうち１日ぐらい。多い日は１日に３つの行事が行われたりする。支援者としてのNPOや複数のボランティア組織があったり、住民同好会活動が活発だったり、老人会活動も多彩であったりするためである。したがって、今のところ行事自体を増やす必要はないと思う。それでも内情は、担い手がだんだんと体調不良などで減っていることも事実である。ボランティア自身の声で「いつまで続けることができるか・・」と聞くこともある。60代の住民を如何に取り込むかが、当面の課題である。先ずは、集会所の行事や住宅内の動きを住民の皆さんに知っていただくために、「LSA室便り」を毎月発行している。加えて今年は、「認知症講座」を開催することで、認知症への理解を深めてもらい、住民同士の助け合いのきっかけになればと思っている。

〈終わりに〉

LSAは全ての業務を通して、「見守り」という支援をしている。LSAの支援は、時間をかけてじっくりと関係性を築き、心を開いてもらうことから始まる。高齢者は心身の衰えの自覚を持ち、具体的な生活課題も一方ではありながら、「この先どうなるのだろう」という大きな不安をかかえて生活している。LSAの行う「見守り活動」の中軸は、「高齢になると何が起きるかわからない。その何かが起こったときには助けてほしい」という潜在的な「不安」に応えるものである。LSAは、住宅内にLSA室という拠点を持ち、そこに常駐している。常駐しているということは、もっとも住民の近くに存在するということでもある。緊急通報システムが設置されていることで、もしもの時には駆けつけてくれるという安心感も与えることができる。「いつも見守っていてくれる」「何かあったら一緒に考えてくれる」存在があるという安心感は、入居者の生活を安定させ、老後の不安を和らげ、自己解決能力を高め、自立の力を強くするものと信じる。

月曜日の朝、LSA室が開くと「ホッとする」という声をよく聞く。「居てくれることが安心」と言われる。「見守り」を通して働きかけるLSAの業務が、高齢者の生きていく力を前向きに強くするものでありたいと心から思う。

一人暮らし高齢者の生活と命を支える試み 神戸市シルバーハウジング事業からの報告

神戸親和女子大学福祉臨床学科講師 神戸市社会福祉協議会 LSA 事業アドバイザー　重野　妙実

はじめに

わが国が世界一の長寿国といわれて久しい。2007年4月、世界保健機関の報告でも、日本の平均寿命は82歳（男女計）で、世界一の長寿国でした。古今東西不老長寿を求めてきた人間にとって、目標に近づくめでたい喜ばしいことですが、現実を見ると少子高齢化、生産人口の減少等、高齢社会を支える基盤は弱く、今後危惧される面が多々存在します。総務省統計局の平成15年の調査によると人口の３分の１が高齢者を含む世帯であり、その中の２割が高齢単身世帯です。今後急速に一人暮らし高齢者の増加が予測されています。このような社会的状況を踏まえ、神戸市のシルバーハウジング事業を一人暮らし高齢者を支えるモデル事業にしたいと取り組んできました。今回は、阪神・淡路大震災後、被災高齢者の命と生活を支えることを目指したLSA事業を社会福祉現場職の立場から報告します。

第1章　神戸市のシルバーハウジング

1．シルバーハウジング

1995（平成７）年１月17日、阪神・淡路大震災が起きました。震災後神戸市内には、約28,000戸の復興住宅として公営住宅が建設され、その中の８％が被災高齢者を対象としたシルバーハウジング（高齢者世話付き住宅）でした。

シルバーハウジングは、1986年度から厚生労働省と国土交通省との共同による「シルバーハウジング構想」に基づき建設が進められてきた住宅であり、住宅政策と福祉政策との連携による高齢者向け住宅です。独立して生活するには不安があるが、生活相談などの生活上の援助があれば、自立した生活を営める60歳以上の単身者、あるいはどちらかが60歳以上の夫婦が安全かつ快適に生活できるよう設備・構造面及び運営面での配慮がなされた公的賃貸住宅です。

神戸市のシルバーハウジングの第1号は、1987（昭和62）年に全国に先駆けて、神戸市兵庫区に菊水住宅として建設されました。菊水住宅の建設当時を知る人たちは、国内はもとより海外からの視察も多かったと聞きます。

阪神・淡路大震災が起こるまで、神戸市のシルバーハウジングは、３住宅104戸でしたが、震災後に被災高齢者のためにシルバーハウジングが大量に建設され、現在は39住宅2,378戸です。2006（平成18）年３月末、シルバーハウジングは全国で791住宅、21,260戸建設されています。神戸市は全国の10.5％を占めています。全国的にみると一住宅当たり、平均戸数は27戸に対して神戸市は61戸です。また、他の地域では、平均戸数が20～30戸の住宅が多いのに対して、神戸市や兵庫県では、100戸以上の住宅も多いのが特徴です。被災高齢者のために大量の高齢者向け住宅が必要であり、結果大規模住宅になりました。

2．高齢者障害者向地域型仮設住宅から始まった業務マニュアル

神戸市のシルバーハウジング事業は、震災の年1995年４月末日に神戸市中央区東川崎公園に建設された高齢者障害者向地域型仮設住宅から始まっているといえます。震災後神戸市では32,346戸（市内29,178戸、市外　3,168戸）の仮設住宅を建設しましたが、広大な敷地を要するため、建設されるのは北区・西区の新興住宅地の造成地と港湾の埋立地が多く、高齢者が多く住んでいる六甲山より南側の古くから開けていた町からは遠く離れていました。高齢者は病院や買い物に不自由なため、学校等の避難所から転居できない状況が続き

ました。そこで、避難所で不自由な生活をしている高齢者・障害者のために居住施設をつくるための具体的検討が厚生省・兵庫県・神戸市の三者で協議され、街中の児童公園に寮型の仮設住宅を建設する計画をたてました。この仮設住宅は高齢者障害者向地域型仮設住宅と呼ばれ、一般の仮設住宅が、連棟であり、各住宅が独立しているのに対して、台所・風呂・トイレ共用の間貸し住宅のような仮設住宅でした。地域型仮設住宅の入居者は高齢者、障害者のみであり、障害者については、重度の知的・身体障害者と精神障害者手帳認定者でした。入居の決定は神戸市が行い、ハンディの大きな人（障害の程度や年齢等）に加算の点をつけ、ポイントの高い人から入居を決めていきました。

神戸市は、この入居者を支援するスタッフを、シルバーハウジングのライフサポートアドバイザー（以下LSA）をモデルにしました。1,500戸の地域型仮設住宅にLSA一人あたり50戸担当として（当時の国基準では、シルバーハウジングはLSA一人当たり30戸担当）30名のLSAを予定しましたが、、震災後この事業ができるスタッフを新規採用することは困難でした。当時筆者の勤務していた㈶こうべ市民福祉振興協会では、神戸市の委託事業で、ホームヘルパー派遣事業を行っていました。ホームヘルプ事業の介護については、主に特別養護老人ホームに委託し、ベテラン・中堅の寮母がホームヘルパーとして活躍していました。このホームヘルプ事業で在宅生活支援を知っている介護職員を神戸市は地域型仮設住宅のLSAとしたのです。

この事業は神戸市から㈶こうべ市民福祉振興協会が委託をうけ、各施設に再委託していきました。筆者は、この事業担当として関わりました。

LSAは、施設から離れた児童公園に建設された地域型仮設住宅に勤務し、そこでは見ず知らずの人との共同生活の混乱や、いざこざによる喧嘩も多発していました。また、被災後長かった避難所の疲れもあり閉じこもっていた入居者も多くいました。多くの課題についてLSAと共に知恵を寄せ合って解決策を考えました。そして、その年の10月にはLSAの業務マニュアルを作成しました。このマニュアルを神戸市のシルバーハウジングは引き継いでいます。

3．入居者の状況

神戸市のシルバーハウジング入居者を対象とした2006年４月１日付の調査では、入居者は2,657名（男性1,003名・女性1,654名）、平均年齢76歳（男性74.7歳・女性76.8歳）であり、介護保険認定は31%でした。2000年と比較すると平均3.6歳（男性4.7%、女性3.3%）上昇しています。

2000年と2006年に行ったシルバーハウジング入居者調査からみると、外出の回数、行事参加、家事能力にほとんど差がない状況です。平均年齢が3.3歳上がっているのに心身状況がほとんど変わらないことは、地域で元気に年を重ねているという嬉しい結果となっています。

2007年４月の入居者世帯状況を見ると、入居世帯は2,230世帯、高齢単身世帯は1,654世帯、夫婦等の複数世帯は438世帯です。単身世帯は74%であり、シルバーハウジング入居者の４分の３は単身高齢世帯であることが分かります。入居者人数は2,666名です。このうち、介護保険適用は806名で全体の30%です。１カ月以上の入院や施設入所者は164名で、全体の６%です。

利用しているサービスを見るとホームヘルパーが一番多く、529名で全体の22%がヘルパーの支援を受けています。次に多いのが、デイサービス251名で全体の９%が利用しています。民生委員の訪問は473名で17%が受

けています。

4．神戸市の強み

神戸市のシルバーハウジング事業は、神戸市が神戸市社会福祉協議会に委託し神戸市社会福祉協議会は社会福祉法人に委託しています。2003（平成16）年までは、㈶こうべ市民福祉振興協会が委託を受けていましたが、地域づくりの一環として、社会福祉協議会が関与するのが適当と神戸市が判断して委託の形態が変わりましたが、実質的には変わっていません。この三者の役割が明確であり、社会福祉法人の職員であるLSAは日々の業務を日報・月報・電話等を用いて神戸市社会福祉協議会の担当職員に相談連絡報告を行い、担当職員は全シルバーハウジングの現状を掌握しています。また、月１回の研修や業務マニュアル等でLSAの業務内容の標準化をはかりLSAの質を担保していることが強みです。神戸市のシルバーハウジング生活援助員業務マニュアルは内外部の状況変化に合わせ必要に応じて年々変更追加しています。LSAが業務上困難と感じたことや入居者を支援する上で必要と感じたことを持ち寄り、グループワーク等で解決策を考え作成したもので、現状で起きている課題に関してはほぼ網羅し、事業の指針となっています。

LSAは施設職員であり異動もあり、ケアマネになっての異動もありますが、業務マニュアルと引き継ぎ方法を明確にしているため、人事異動によるリスクは低いと思います。

第2章　LSAの働き

LSA業務は、生活相談・お元気確認（安否の確認）・コミュニティづくりに役立つ支援・一時的な家事支援・緊急時の対応です。コミュニティづくりに役立つ支援は神戸市独自のものです。震災後の地域型仮設住宅では「合言葉はコミュニティワーク」と言って活動したほど、近隣地域の支えあいは大切であり、入居者の力を持ち寄ることが一人暮らし高齢者を最期まで支えるために不可欠のことです。

1．生活相談

LSAは福祉専門職であり社会福祉施設の職員です。日常的には、入居者が元気で過ごせるよう、少しでも生活の質を高めるよう関わり、体調不良にならないよう予防的な見守りをしています。体調不良や入居者が保健福祉サービスを必要とする時には適切に助言し、介護保険等の申請のための情報提供や、他の専門職を紹介するなど連携をとっています。福祉専門職が身近にいて見守り、介護保険等のサービスと連携をとれる制度は入居者の在宅生活を支えるために非常に有効です。また、サービス導入後も、体調急変の場合等どのような連携をとるか入居者とともに決めておけることも安心につながっています。

2007年４月の統計を見ると、LSA54名が受けた生活相談は1,020件、LSA一人当たりに割り戻すと１カ月19件の相談を受けています。相談内容は多い順に医療病気に関すること282件、介護保険107件、経済的なこと63件、地域に関すること63件、家族に関すること39件でした。

LSAが連絡した連絡先は、ケアマネが一番多く262件で、LSA一人当たり５件、次いで自治会等住人、親族関係、地域包括支援センター、ヘルパーとなっています。介護保険等福祉サービス、自治会等地域住人、親族と連携を取りながら入居者を支えていることが数字からも読み取れます。

2．週三回のお元気確認（安否確認）

神戸市では週３回のお元気確認をLSAに

求めています。高齢者は体調が急変することも多いのですが、週３回出会うことで、在宅で元気に生活することを支援しています。

ただ、訪問をするのでなくシルバーハウジング生活援助員業務マニュアルに訪問観察の仕方を次のように規定している。

訪問時には入居者の顔色、体調、食事が取れているか、家事はできているか、失禁はないか等を観察し、体調不良と見受けられる時には必要なサービスが届くように助言する。高齢者は体力がないため、急変することも多いので、LSA は予防的な視点をもって観察する。

日ごろから体調不良（病的な精神状態、アルコール依存症）の入居者に対しては、精神保健相談員等から助言を得る等、保健福祉サービスが届くように気配りをする。

LSA は、入居者全体の安否が確認できるように月単位の安否確認表に記録しており、

お元気確認ができなかった居室への対応方法や報告の仕方も記入している。自宅で倒れて動けなくなり、LSA が助け出すケースも時々あります。

社会福祉協議会は LSA に対して、質の高い生活支援や、見守りができるように月１回研修会を行っています。高齢者のかかりやすい病気の基礎的理解・体調管理と観察の仕方、認知症・精神的な病気の基礎的理解と日常生活における対応の仕方など各専門講師から学習する場を設けています。一人暮らし高齢者が最期まで在宅で暮らせるのかが今後の大きな課題です。LSA が対応困難事例を持ち寄り情報交換により相互学習するとともに、専門職から助言を受けることによりスキルアップをしています。

３．コミュニティづくりに役立つ支援

①ご近所同士の支えあい

シルバーハウジングの LSA事業にコミュニティづくりを入れたのは神戸市独自の事業です。これは、阪神・淡路大震災により、住み慣れた地域を離れ、高齢者障害者向地域型仮設住宅に転居してきた入居者の生活を見て、近隣地域の支えあいがいかに大切か、人は孤立して生活できない、助け合ってこそ生き生き生活できることを学んだからです。入居当時、入居者はそれぞれ部屋に閉じこもり弁当を買ってきて部屋で食べるような生活でした。風呂、トイレ、台所が共用で、生活習慣や障害の程度や種別の違う高齢者障害者の暮らしは、個々には不満があり、LSA にぶっつけるが LSA としても対応方法が分からず苦慮していました。そこで、対個人のケースワークのみでなく、グループで解決するグループワーク、地域で解決するコミュニティワークを取入れていきました。当時地域型仮設の LSA はコミュニティ作りを側面的援助・黒子的支援と呼び、入居者が親しく助け合って共同生活ができるように声かけや工夫をした。ハンディのある入居者同士がそれぞれの持っている力を出して支えあう姿は、福祉専門職の LSA にとっても貴重な体験でした。

復興住宅であるシルバーハウジングにおいても、避難所・仮設住宅・復興住宅と短期間に少なくとも３回も転居を迫られ疲れきっての入居でした。当時、終の住み家として復興住宅のシルバーハウジングに転居したものの、住宅内に閉じこもっている人が多かったように思います。近年日本の住宅はプライバシーが保たれるよう設計されており、シルバーハウジングは鉄筋建ての集合住宅であり、「鉄の扉は重い」といわれるように、玄関の扉を閉めると外部との交流は遮断されていました。

人が生き生きと暮らすためには福祉職等に

よる一方的な支援でなく、人と人が声掛け合い助け合い支えあうことが大切であることを筆者たちは地域型仮設住宅の経験から学んでいたので、ここでもLSAは入居者をつなぐために、それぞれ工夫した黒子的支援を行っていきました。

近隣の心が通えば、気遣いあいが生まれる。新聞を取ってない、夜中もテレビがついたままになっている、毎朝出かける時間に見受けない—などの気遣いあいが命拾いにつながる事例もよくあります。この支えあいを促進するためにLSAは裏方支援を大事にしています。

②コミュニティサポート育成事業

コミュニティづくりに関して、従来は住人組織やボランティア団体が組織作りをするのを裏方から手伝っていました。復興住宅が建設された頃は、外部からのボランティアの支援も多く、自治会活動に関して助成金もありもめ事もありましたが活発な活動が展開されていました。現在も活発に自治会や老人会等が活動しているところもありますが、高齢化が進み徐々に衰退していくところや、一部の仲良しグループに占領され他の入居者は入りにくい会もでてきました。LSAには、お茶会等を開きたくても集会室を借りる予算もなく、コミュニティ作りのために予算をつけてほしいと願い続けていました。平成16年度からコミュニティサポート育成事業として予算化されました。この事業の目的は、個人に対する楽しみや生きがい作り、閉じこもり防止のみでなく、入居者同士が顔なじみになることで地域の支えあいをつくることです。隣近所が気遣いあうことにより高齢者同士の生活を支えあうことが目的の事業です。元気で積極的に人と交わることの好きな入居者ばかりではありません。お茶会や食事会の参加者は定着しがちです。積極的に参加する入居者ばかりでなく、引きこもりがちな入居者にも出席してもらえる企画をLSAは立てています。その折に力になってくれるのが、神戸市が市民講師を登録して派遣している“KOBEまなびすとネット”、高齢者対象のシルバーカレッジ卒業生による“グループわ”、リタイア後の男性数人のボランティアがどこにでも機材を積み込み、昔懐かしい映画を上映してくれる“ムービーズ”等です。震災後からずっと活動を続けてくれている大学生や地域のボランティアにも助けられています。

4．一時的な家事支援

一時的な家事支援はLSAの本来業務です。日本のシルバーハウジングは821団地ですが、一時的家事支援に関しては千差万別であると推察されます。ほとんど何も手伝わないLSAから毎日買い物支援や家事をしている場合もあります。LSAが高齢者住宅の入居者の世話をする住み込みの管理人のように思われている場合もあります。

神戸市の場合、一時的家事支援は、頼まれたら何でもするのでなく、基本的には介護保険や適切な保健福祉サービスにつなぐようにしており、一時的な家事支援の範囲を決めています。具体的には一時的または退院直後で体調が悪く買い物に行けないときの買い物、急病の場合の通院介助等です。親戚や知人の支援があれば、LSAは支援していません。常日頃から親戚や知人とのつながりをもち、個人を取り巻く支援を豊かにしておくことが大切と考えています。反対に何でもLSAが引き受けることで、LSA任せになり、親戚知人の輪が希薄になることを恐れての判断でもあります。LSAの一時的家事援助は、1カ月284件です。LSA一人当たりに割り戻せば、一月5件です。少ない件数ですが、困ったときに身近で提供される援助は大きいと思います。

第3章　緊急速報装置の効用

1．命を支える緊急通報装置

加齢は足腰からといわれますが、高齢者は室内で転んで起き上がれなくなったり、浴槽から出られなかったりすることは多々あります。また、体調不良で脱水症状を起こしたり、熱がでて動けなくなることがあります。シルバーハウジングの安心を支えている緊急通報装置の役割は大きいものです。シルバーハウジングに整備されている緊急通報装置は人が手で押して通報するブザーと生活リズムセンサーに分けられます。生活リズムセンサーは２時間以上水道が連続使用された場合や12時間以上水道水未使用の生活異変をキャッチした場合に警報音がLSA室や警備会社に通報される仕組みです。

緊急通報で対応するのはLSA・LSA派遣施設職員・警備会社です。神戸市のシルバーハウジングのLSA勤務時間は、月～金曜日の午前９時から午後５時です。LSAの勤務時間外の緊急通報に関しては、警備会社に委託しているところがほとんどですが、派遣施設（主に特別養護老人ホーム）と近接しているシルバーハウジングでは警備会社に委託せず、夜勤の職員等で対応しているところもあります。

2006年度LSAからの報告では、緊急対応で幸いに助かった事例は64件であり、緊急対応したが死亡に至った事例は３件でした。

優れた機能を持つ緊急通報装置ですが、住宅建設後10年が経ち、機械の故障も出てきています。また、緊急通報装置はドアの外から鍵をかけると住人不在状態と認識して生活リズムセンサーは機能しません。高齢化が進み、ドアまでの移動が困難な入居者がヘルパーや家族に鍵を渡して、外から鍵をかけてもらいドアポケットに鍵を返してもらうことがあります。この場合は、不在となり生活リズムセンサーが作動しないことを入居者やその支援者に伝えておくことが必要となります。いつも最善の状況で緊急通報装置が作動するようにLSAは細心の注意を払っています。

2．2006年実績

①助かった事例

2006年度の報告を見ると、緊急通報により助かった64事例で、その内訳は、単身男性は22名、単身女性は31名、夫婦は８組で不明が３であった。年齢別に見ると、男性60歳代１名、70歳代13名、80歳代14名、90歳代２名、合計30名、女性は60歳代１名、70歳代12名、80歳代16名、90歳代１名、合計30名、不明４でした。

具体的な緊急時対応については、次の12事例を見てください。

1. 男性（85歳）単身

・ＰＭ3：50　本人が緊急通報　施設職員が本人に電話するも不通。

・ＰＭ3：55　施設職員２名訪問。本人「気分が悪いのでコールした」額から脂汗少量。ケアマネと施設の看護師に連絡 。血圧80/208（普通高い時は上が220位あり）、脈60。かかりつけ医院に連絡、ケアマネ同行、受診する。

2. 女性（84歳）単身

・生活リズムセンサーが発報。H18春より体調不良。ふらつき、認知症、栄養不足、誤薬、脱水、ヘルパー拒否があった。週１回デイサービス利用。友人（シルバー）の手助けあるが24時間の見守りは不可。従姉が週１、２回来ていた。

・LSAが訪室すると、トイレ内で本人が転倒中。衣類は脱いでトイレ便器の中、意識あるが立位不可。
介助にてベッドに臥床。バイタルチェック異常なし。本人「大丈夫」との事で失禁での汚れを掃除して退室。

・１週間後、LSA、ドア越しに声かける。ドアはチェーンのみにしている。「助けて」と言われ、チェーンをたまたまいた業者に外してもらい入室。トイレ内で転倒、失禁、介助して臥床。着替えをする。
・担当者会議を開き、従姉と本人の在宅希望の意思に沿い、毎日の見守りをLSA、地域包括支援センター、従姉と連携して行う。
・その後、認知症の症状が進み、体調悪化、緊急ショートステイとなる。
・ショートステイ中、自宅での転倒のせいか、脳内出血が見つかり、入院、その後特別養護老人ホームへ入所となる。

3. 女性・単身・78歳

・AM2：30　生活リズムセンサーが発報。施設職員が解錠し入室。ベッドの上で首の痛みを訴え、動けず。本人は「大丈夫」と言う。バイタルチェック問題なしと判断して退室。
・介護保険拒否。精神の落ち込み、膝の痛みあり。家の中、生ゴミがたまり、虫が発生。ベッド上での生活になり、失禁による尿臭あり。
・同日、AM11：30　LSA訪問。ベッドの下で仰臥位になり、転倒（？）失禁、動けなくなり、ぐったり。
すぐに地域包括支援センターの保健師を呼び、バイタルチェック。着替え、微熱、高血圧、首の痛みを訴える。車イスで受診。首、異常なし。尿路感染、高血圧、脱水の疑いあり。その後、LSAが２日に１回訪問。生活支援をする。本人の友人も手伝う。ヘルパーによる支援について切り出し、どうにか申請までたどり着く。
・認知症が出て、ヘルパーによる支援を１日２回とする。ベッドの横に手すりを取り付け、ポータブルトイレ設置。精神的には明るくなったが、認知症は進んでいる。室内での歩行は可能となり、安定した生活を送っている。

4. 女性・単身・86歳

・本人より電話あり。朝からベッドより起き上がれないので来てほしいと言われる。玄関が施錠されているのでベッド近くにある緊急通報ボタンを押すよう指示し、入室する。
・ベッド横のコタツに伏せた状態で座っており、「しんどく足が動かせない。病院へ行きたいので娘に連絡して欲しい」と訴えあり。娘の勤務先へ連絡し、来ていただく。娘と受診し、肺に水がたまり、心不全を起こしていたため、入院となる。

5. 男性・単身・75歳

・本人が緊急通報。LSAが訪問すると台所で調理中に沸騰した鍋をひっくり返して、左手首から腕にかけてと右足を火傷したとの事。
・パーキンソン病で移動するにも全介助のため、救急車を要請する。救急車到着まで水でぬらしたタオルで火傷した部分を冷やす。
・救急搬送となり、処置を受けて帰宅する。

6. 男性・単身・74歳

・PM8：05　発報。（警備会社報告書より）
・LSA室より警備隊員が本人に電話するが応答ないため訪問。
・テーブルでうずくまっており、本人より救急車の要請依頼あり。病院へ搬送。施設宿直員よりLSAに連絡あり。
・翌日ケアマネに報告。午後ケアマネ来所。肺気腫等で呼吸困難による入院。

7. 男性・単身・89歳

・南側和室６畳間にあるベッド付近より出火。
・非常ベル（火災報知器発報）に気がついた他の住民が、当該住宅へ駆けつけ、倒れている本人を発見、救出。その後、他に駆けつけた住民による初期消火。消防隊到着し、

消火活動され、鎮火。その後、消防隊及び警察により情報提供の依頼があり、LSAが対応する。

・本人は救急搬送にて病院へ運ばれ、現在、入院加療中。今後については施設入所予定。住宅については他の延焼もなく、LSAより住民への説明、巡回訪問など行い対応している。

8. 男性・夫婦・82歳

・夫がトイレで転倒、助けようとした妻も腰痛を起こし、２人とも動けなくなり、夫が通報。

・地域包括支援センター職員２名が訪問。動かすのは危険と判断し、救急車要請。

・夫は入院、内臓疾患も見つかり、その後肝臓癌で逝去。妻も圧迫骨折をしていたが、その日のうちに帰宅。以後実妹の支援を受けながら、自宅療養されていたが、11月には電車での外出もされるくらいに自立した生活に戻り、今に至る。

9. 男性・単身・73歳

・本人の緊急通報により警備員が居室を訪問。酔って頭を打ち、台所で出血していた。

・救急車を手配し、第１緊急連絡先へ電話連絡するも通じず。（現在、電話番号使われていない）

・病院に搬送。（その日の夜中、タクシーで帰宅）

10. 男性・単身・77歳

・本人緊急通報。LSA電話確認、気分不良、嘔吐の症状がある。

・LSA、ケアマネ駆けつけ、診察に同行。

・検査入院された。

11. 女性・単身・89歳

・本人緊急通報。電話確認できず。LSA駆けつける。

・胸がつかえて苦しいとの事。ケアマネ、連絡駆けつける。

・対応中に落ち着きを取り戻す。誤嚥の可能性あり。嘔吐なし。

12. 女性・単身・83歳

・前日、夕方にも発報。食事も水分も全く取っておらず、寝たままの状態で12時間の水量センサーが発報。３回目の発報時に隣人が警報音を止めるため入室する。

・前回２回は本人が発報音を止めることができたが、３回目は起きられず、隣人が対応。LSA室に隣人が来所し、本人の危険な状態を伝えにきてくれる。

・LSAが訪問し、水分補給等する。救急車での搬送を拒み続けたが、３回目の訪問で救急車による入院を了承したため、入院する。家族への連絡、ケースワーカーへの連絡もでき、家族が対応している。

②在宅死亡事例

2006年度、次の３事例は、緊急通報で駆けつけたが在宅死であった事例です。いずれも単身高齢者であり、世間では孤独死と呼ぶのでしょうか。シルバーハウジングでは、重篤な持病を持ちながら、施設や病院でなく、最期まで在宅希望で生活をしている入居者は多くいます。死亡報告があった時に、神戸市社会福祉協議会のLSA担当職員は、前日までの入居者の様子、LSAの見守りの仕方、地域でその方がどのように生活をしていたかを確認しています。大抵の場合持病を持ちながら、前日まで元気な顔を見ていたとの報告を受けます。

1. 女性・単身・77歳

・インターホンの呼び出しに返答がないため、警備員緊急解除キーで入室。呼びかけても、肩を揺すっても反応はなく、顔色は青白く血色なく、居間に横になっておられた。

・コントロールセンターへ無線で連絡し、LSAを呼び出すことにするが、日曜日のため、LSA不在で施設職員が現場に行く。２名で確認し、脈がなかったため、救急車

ではなく、警察へ連絡。

・死亡確認後、現場で状況・事情聴取を終え、発報から２時間半後、退出する。施設職員より区役所保護係へ連絡する。

２. 男性・単身・84歳

・ＡＭ6：30　宿直者訪問。呼吸なし。身体冷感あり。心臓マッサージ施行。

・ＡＭ6：40　救急車要請、警察連絡、課長に連絡、親族に連絡。

・ＡＭ7：00　救急車到着、死亡確認。警察事情聴取。

・ＡＭ8：40　LSA は課長より報告を受ける。

・ＡＭ9：00　病院に搬送。

・ＰＭ2：00　遺体を６階だんらん室に安置。

３. 男性・単身・85歳

・ＡＭ0：47　生活リズムセンサー（12時間水未使用）で発報。警備会社隊員到着時、本人浴槽内で死亡。

・119番、110番通報後、LSA派遣施設にも報告。

・警察の事情聴取を受け、LSA が現場到着後、状況説明し、退室。LSA事情聴取を受け、翌日関係機関（ケアマネ、配食センター、地域包括支援センター等）に報告。

・土、日の連休前にお元気確認ができていたが、入居者の体調が急変し、起こった事故である。

③ 孤独死に関する考え方

孤独死という言葉が一般的に使われるようになったのは、阪神・淡路大震災後に仮設住宅や復興住宅で「死後数週間たって発見」が問題となり、孤独死を防ぐためにさまざまな試みが行われました。

人生の最期まで在宅で暮らすことは、誰にも看取られないで一人息を引き取るリスクがあります。しかし、前日まで地域や親族と交流がある人が一人で亡くなっても孤独死と呼ぶでしょうか？

看取る人のいない死亡のうち、「社会的に孤立し十分なケアを受けられない状態での死」を孤独死として扱うのが適当であると筆者たちは考えます。

LSA をはじめ、近隣親戚、福祉サービス提供者が日常的にいかに関わり支えてきたかが、大切だと考えています。最期まで在宅で元気に暮らしたいと願う一人暮らしの入居者にとって、現在のサービスにおいては、理想に近いのではと感じますがいかがでしょうか。

まとめ

神戸市のシルバーハウジングの入居者は、2006年４月で平均年齢76歳、2007年４月一人暮らし世帯が４分の３でした。年齢の統計が１年前であり、現在はもう少し高齢化が進んでいると推察します。

震災により住居・家財・地縁血縁を失った入居者が、復興住宅において新しいコミュニティをつくりその中でお互いを気遣いあい支えあうことができ、その輪の中で人生の最期を豊かに暮らすことを願い、それを支えるためのLSA事業を試行錯誤しながら作り出してきました。

入居者が元気なときにはその力をボランティアや自治会、老人会などの世話役として活動することを支え、高齢化が進んで保健福祉サービス等が必要になったときには適当な時期に適切なサービスを紹介し、終末期にも可能な限り本人が希望の場合はシルバーハウジングで生活することを支えています。

このように、LSA は最期まで入居者が人に囲まれて生活することを支援しています。また、事例に出したように緊急通報の役割は非常に大きいと感じています。

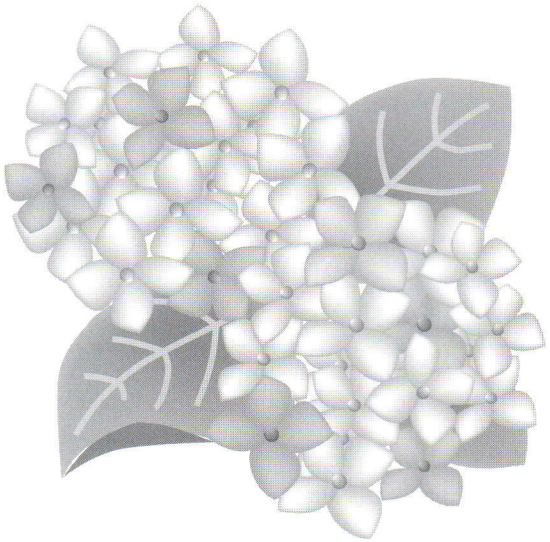
神戸市ではシルバーハウジングを理想の高齢者住宅になるように事業を進めてきたつもりですが、全国的にこの形態が取れるわけではありません。ただ、それぞれの地域で、ど

のようにすれば地域で高齢者が生き生きと暮らし最期まで生活できるかを課題に取り組むことにより、地域の強み弱みが見えてきます。強みを生かし、弱みを地域課題として取り組むことにより解決できることは多いと思います。

神戸市では地域包括支援センター（あんしんすこやかセンター）に三職種（主任ケアマネ・保健師・社会福祉士）に加えて、LSAのような職種として見守り推進員を2006年度から配置し、近隣支えあいの輪をつくる試みを始めています。また、モデル事業として、高齢化がすすむ一般の公営住宅の空き室を借りてあんしんすこやかルームを開設、ここにも見守り推進員を配置しています。

阪神・淡路大震災後の神戸市は、全国から駆けつけてくれたボランティアに支えられ助けられたことにより住人の心も和らぎ助け合えた体験を持っています。そのお返しをするためにも、震災により未来先取りのような形でできた神戸市のシルバーハウジングにおいて高齢者、特に一人暮らし高齢者に対して、最期まで生活と命を支える試みを行ってきました。

今後はますます高齢化がすすみ、在宅終末期ケアが増えることも予測されます。その時々の課題に取り組み、入居者の力を最大限に生かし、近隣の支え合いを大切にした質の高い支援を実施したいと願っています。



アジサイ

特　集

Ⅰ コミュニティサポート育成事業

Ⅱ 入居者の声

Ⅲ うちの住宅自慢

コミュニティサポート育成事業

神戸市のシルバーハウジングにおけるコミュニティ支援事業の取り組み

神戸市社会福祉協議会

神戸市では、LSA本来の業務である生活相談、安否の確認、一時的家事支援、緊急時の対応、関係機関との連携、などに加えて、シルバーハウジング内および周辺地域のコミュニティづくりの支援に力を入れています。

神戸市内には、公営のシルバーハウジングが39団地あり、うち30団地が震災後に被災者のための災害復興住宅として建設されました。入居者の多くは仮設住宅から転居されており、新たな地域で生活を始めた方も少なくありませんでした。そんな中、転居当初は各区にある社会福祉協議会の主催でウエルカムパーティが開催されたり、保健師による健康教室やボランティア団体による茶話会などが行われており、LSAは、住民へ各種催しの参加を呼びかけるとともに、LSAも催しに参加し住民とのコミュニケーションを取りました。

しかし、10年余りが経過し、入居者も高齢化が進み、当初活発に行われていた茶話会やイベント等が減少したところも多く、入居者同士が集う場所が減少しました。また、加齢による体力の低下で、外出の機会も徐々に減ってきました。

神戸市のシルバーハウジングが目指す「いつまでもお元気で　おとなり近所が助け合う暮らし」を実現するためには、LSAが側面的支援からもう少し前面に立つコミュニティワーカーとしての役割を果たす時期が来たように感じていましたが、コミュニティ支援を行うだけの財源もありませんでした。

そんな中、平成16年度からコミュニティ支援を行うための助成事業「コミュニティサポートグループ育成支援事業」が実施され、LSAは年間約５万円の助成金で、在宅の高齢者が安心して生きがいを持って生活することができるよう支援し、住民相互の見守り活動等の実現を目的に事業を実施することになりました。

事業実施にあたり、市社協で主催する毎月定例のLSA会議（主に研修事業や情報交換を行う場）のなかで、コミュニティづくりに役立つ講義や演習を取り入れていきました。

平成16年度当初はLSAがコミュニティワーカーとして活動するために必要なことを基本から学んでいきました。活動することの意味を考え、社会資源を見直し、活動マネジメントの実践力を高めるためのものです。

またそれから数カ月後のLSA会議では、事業を実施してみてどうだったのか振り返りの時間を持ちました。事業から見えてきたことは何か、そしてこれからどう支援していくのかを考えるため、グループワークを実施しました。その中で、下記の意見が出ました。

『住民が集まる機会､場を提供することに意義があった』
『閉じこもり防止になるとともに、コミュニティを作ることで相互に安否確認や、情報交換が自然にできるようになった』
『継続していくことが大切だと思う。そのためにも、支援内容の見直しも必要だと思う』
『住民同士のコミュニティづくりや地域とのコミュニティづくりに発展させるためにも復興住宅外の地域の方への参加も呼びかけたい』
『住民の参加者が固定化している場合が多い。方法、内容等を検討していく必要がある。閉じこもり防止対策としても実施内容を考えていきたい』
『より多くの住民との交流と、参加しやすい環境作りを目指す』

この振り返りから、一年間のコミュニティ活動予定をシミュレーションしてみました。（参考資料１）

市社協からは、コミュニティづくりに役立つ情報

提供を行います。神戸市には、市の担当職員が地域へ直接出向きお話をする「出前トーク」や、豊富な知識や経験、優れた技術や才能、ボランティア活動への意欲をもつ市民が登録し、学習を希望する地域やグループにその市民講師を紹介する「ＫＯＢＥまなびすとネット」という制度があります。市社協では、この制度を社会資源の一つとしてLSAに紹介することにより、コミュニティ支援活動の中で講師として活躍いただいています。

平成17、18年度では、16年度に実施した事業について取り組みを振り返り、問題を整理し課題を明らかにして今年度の目標をたてることから始めました。目的は、生きていてほっと安心するコミュニティを身近につくること。そのためにはイベントは手段であり、そこへ到達するための手立てやプランニングが大切であることを学びました。

LSAが担当以外のシルバーハウジング住宅を訪問し合い、コミュニティに関する情報交換を現場で行う「相互訪問」も実施しました。事業が実施されるまでの過程の情報を交換したり、イベントなどに参加される入居者にお話を聞くなど、他の住宅の様子を伺うことを試みました。

またこの頃から、介護予防につながる支援を取り入れるようになりました。まずはLSA自身が体験し学んでみることが大切と考え、LSA会議の中で理学療法士を講師として「生活の中に体操を取り入れよう」をテーマに指導を受けたり（写真１）、翌年度には歯科衛生士を講師として「口腔ケアの大切さ」について学びました。また調理実習も行い仲間と囲む食卓の楽しさや食の大切さを学びました。（写真２）このような体験は、入居者の身近で生活支援を行っているLSAが、普段の入居者同士の井戸端会議の中に少し顔を出して気軽に健康体操を行ったり会話をしたり、場所を選ばず介護予防の支援につなげる手段となりました。

その他に、新聞紙やカレンダーを使った遊びの研究（参考資料２）や、各住宅でLSAが実施している事業（健康体操や川柳教室、寸劇など）を他のLSAに紹介する「一芸教室」を毎月のLSA会議に取り入れ、情報交換や情報共有の場を多く持つようにしています。

それぞれの住宅では、LSA会議での内容を参考に、さまざまな事業が開催されています。実施された内容とともに今月の振り返りと次回への目標を記載した「進捗状況」が毎月LSAから市社協に提供されます（参考資料３）。LSAがコミュニティワーカーとして活動を進めるうえで、この振り返りと目標は、今後のその住宅に合ったコミュニティ支援の指標となっています。

またこれからのコミュニティ支援に役立てる材料として、「地域エコマップ」を作成しました。（参考資料４）これは、現在シルバーハウジング内で行ってきたコミュニティづくり支援から地域の支え合い

参考資料1

（第52回LSA会議録抜粋）

グループワーク　シミュレーション（下記の条件で１年間のコミュニティ活動予定を立ててみる）
・年間５万円の助成金　・月１回何か行う　・集会室の使用料は１回1500円　・シルバーハウジング50世帯の住宅と仮定する

【４班】

月	内　容（詳　細）
4	茶話会（お茶を飲みながら歓談・参加費100円）
5	ふれあい会（地域の子供とふれあう会・参加費200円）
6	食事会（お弁当をとる・参加費300円）
7	七夕祭り（七夕の飾り付け・参加費100円）
8	夏祭り（盆踊り・参加費100円）
9	敬老会（赤飯配る・参加費無料）
10	体操教室（講師を呼び、体を動かす・参加費100円）
11	勉強会（食生活の勉強会・参加費100円）
12	クリスマス会（プレゼント交換、ケーキ付き・会費200円）
1	新年会（参加費100円）
2	節分祭り（巻きずし配る・参加費100円）
3	ひな祭り（桜餅、あられ付き・参加費100円）

【７班】

月	内　容（詳　細）
4	お花見（やきとり、お酒・参加費300円）
5	出前トーク・訪問販売について（オレオレ詐欺寸劇）
6	映画会
7	花火大会
8	盆踊り会（たこ焼き、焼きそば、ビール、ヨーヨー・参加費300円金券）
9	敬老カラオケ大会（敬老の日のお祝いカードを作り贈呈する）
10	輪投げ大会（景品在り・参加費200円）
11	紅葉狩り（交通費、お酒付き・参加費500円）
12	クリスマス会（ビンゴゲーム、ケーキ・会費300円）
1	もちつき大会（きなこ、あずき、おろしもちの会食・参加費200円）
2	豆まき、すいとん会（大鍋で野菜をもちより団子汁・参加費100円）
3	おひな祭り（さくらもち、甘酒、音楽演奏・参加費300円）

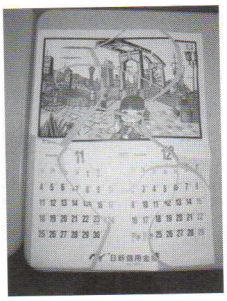
コミュニティサポート育成事業

参考資料２

第72回LSA会議　カレンダーで遊ぼう　作品集
（第72回LSA会議録抜粋）

作品　ジグソーパズル　（作品１）

①カレンダーを大まかに切り分けて、ゲームの準備をします。
②ゲームを始めます。
切り分けたブロックを組み合わせて元のカレンダーに仕上げます。
※普通のパズルは原画が残っていますが、これはないため、あまり細かくブロック分けすると、難しくなります。
※応用編：カレンダー複数枚でチャレンジ
複数枚を重ねたまま大まかに切り分けます。切ったカレンダーをバラバラにしてパズルを始めます。



作品　1

作品　ビンゴゲーム　（作品４）

①参加者に一枚ずつカレンダーを配布します。
②それぞれが好きな場所を【横（4ます）×縦（4ます）】囲みます。
③準備が出来たところでビンゴゲーム
スタート!!

作品　4

作品　神経衰弱　（作品７）

①カレンダーの数字の部分を利用します。
②2ヶ月分のカレンダーを用意します。
③数字の部分を全てバラバラに切り分けます。
④ゲームの準備ができました。
⑤ゲームを始めましょう。
※数字部分をバラバラにする前に、裏面に型紙を貼ると強度が増します。

作品　7

作品　数字を使った頭の体操

（※作品7で作った数字カードが利用できます。）
①カレンダーの数字の部分を使います。
②数字を切り取り $\boxed{1}$ から $\boxed{30}$ までのカードを作ります。
③あらかじめ別の用紙に問題を作っておきます。
例：□+□−□×2=$\boxed{26}$
□+□+□−□=$\boxed{1}$
・
・
・
④ゲームを始めます。
⑤グループに問題用紙と②で作った数字カードを配ります。
⑥ゲームの説明をします。□に数字を入れていきます。（答えはたくさんありそうです。）
⑦グループでタイムを計り、競争してみましょう。

や見守りといった地域力と、地域の社会資源との連携を深めていくことを目的としています。作成することで、漠然としていた地域との関係がはっきりしました。また、もともとの地域の課題や地域エコマップを作って分かった課題も見えてきました。この「地域エコマップ」は、今後毎年状況を記し比較をしていくことを考えています。それをもとに今後の取り組みを考えることができます。シルバーハウジングが一つの点に止まることなく、地域の点と結び線にする、そして面にしていきたいと考えます。そうすることで、例えば認知症の住民を支えたり、閉じこもりがちの住民に声をかけるなど自然に相互見守りができるのではと考えます。

神戸市社会福祉協議会では、これからもLSAが福祉現場の専門職として活動していくためには何が必要なのか、何が求められているのか、何をすべきなのかをLSAと共に考え、そして、年12回のLSA会議を行うことにより、入居者の視点に立って支援のできるLSAを育てていくことを目標に、LSAと一緒になって取り組んでいきたいと考えています。

上記で述べたとおり、平成16年度から実施した本事業は４年目を迎えました。現在ではLSAの支援と入居者やシルバーハウジング近隣の地域住民が相互に関わりを持とうとする気持ちが徐々に表現された事業となってきました。

実施当初はほとんどの住宅で受け身的であった入居者も事業を行うごとに協力者や担い手（できることをできる方で分担して行う）として活動している住宅が増えています。住民が主役となる作品展や発表会は住民間の団結力や自信に繋がり有意義な活動だと感じます。行事参加の呼びかけでは、入居者同士が行うことが増え、閉じこもり防止にも繋がっています。

また、介護予防につながる健康体操やラジオ体操を定期的に実施する住宅が増加しています。LSAはもっとたくさんの入居者に関心を持っていただくために、地域の看護師ボランティアによる健康チェックの実施や、地域包括支援センターの協力の

参考資料３

平成 19 年度　８月コミュニティ支援事業進捗状況報告

		団地等の名称	グループ名	会合名･交流会名	事業開催日	内容	参加者･人数	今月の振り返り	次回への目標
東灘	市	シルバーハイツ六甲アイランド	E9シルバーサロン	E9シルバーサロン	8月10日(金)	手仕事ボラ･茶話会	住民⑧/LSA①	住人が大きな西瓜を用意してくださる。1人暮らしの方が多く、日頃1人ではなかなか食べられないので嬉しいとお聞きする。「にじの家」見学会は多くの参加者があった。	「にじの家」のコミュニティでシルバーの住人も活動できるようあんしんすこやかセンターと検討中である。
					8月31日(金)	「にじの家」見学会	住民⑭/LSA①/職員①		
	市	シルバーハイツ北青木	シルバーハイツ北青木住民グループ	茶話会	8月9日(木)	ビデオ鑑賞会(綾小路きみまろ)	シルバー住民⑥/地域住民⑩/ボランティア②/自治会長①/民生委員①/特養②/看護師①/包括②/LSA①	今回は趣向を変えてビデオ鑑賞ということで、大勢の参加者を期待していたが、シルバー住民の方も今まで一番少ない参加人数だったので残念であった。参加者は大爆笑し、喜ばれた。	シルバー住民の方の参加に期待するも色々と口実があり、参加がまちまちで話はするも今ひとつ。何とか頑張るしかない。
灘	市	シルバーハイツ大石東	大石東	第10回健康らくらく体操とお茶会	8月2日(木)	ジャンボお手玉を使って、講師による介護予防体操、その後、手作りのあんみつの盛り付け、ジャンボお手玉作りは住民の協力あり。	シルバー住民⑦/一般･地域③/民生委員①/SCS①/LSA①	暑い時期のため、参加者は少なめであるが、思ったより、人数が集まった。(住民による声かけが多かった)	9月の敬老会の計画と声かけなど多数来ていただけるように考えていく。
	市	シルバーハイツ灘北	なだきた	ラジオ体操	8月6･13･20･27日(月)	ラジオ体操第1を2回繰り返す	シルバー住民⑨/一般②/LSA②	猛暑にも関わらず、野外でのラジオ体操の参加人数は安定している。らくらく体操も賑やかに行うことができた。	体操と平行して手芸教室も勧めていく.
					8月2･16･23･30日(木)	ラジオ体操第1を2回繰り返す	シルバー住民⑨/一般②/LSA②		
				健康らくらく体操	8月9日(木)	椅子に座って簡単な体操を行う	シルバー住民⑬/一般③/LSA②/講師②		
	県	神戸岩屋北町	いわや	ラジオ体操	8月2日(木)	ラジオ体操第1･第2	住民⑪	ラジオ体操は参加者が定着してきている。	継続は力なり･･･できるだけ続けていきたい行事です。
				ラジオ体操	8月9日(木)	ラジオ体操第1･第2	住民⑨		
				ラジオ体操	8月16日(木)	ラジオ体操第1･第2	住民⑤		
				ラジオ体操	8月23日(木)	ラジオ体操第1･第2	住民⑨		
				ラジオ体操	8月30日(木)	ラジオ体操第1･第2	住民⑩		
			いわや2号棟	ラジオ体操	8月2日(木)	ラジオ体操第1･第2	住民⑪	ラジオ体操は参加者が定着してきている。	継続は力なり･･･できるだけ続けていきたい行事です。
				ラジオ体操	8月9日(木)	ラジオ体操第1･第2	住民⑨		
				ラジオ体操	8月16日(木)	ラジオ体操第1･第2	住民⑤		
				ラジオ体操	8月23日(木)	ラジオ体操第1･第2	住民⑨		
				ラジオ体操	8月30日(木)	ラジオ体操第1･第2	住民⑩		
	県	HAT神戸灘の浜　6番館	はっとでほっと映画会	映画会	8月10日(金)	アットン婆さん	住民㉙	暑い中にもかかわらず、多数参加された。	「美しき日々」は定着しているので、他1回の内容に力を入れたい。
				映画会	8月24日(金)	美しき日々9･10巻	住民㊶		
			はっとでほっと歌･レク･体操	歌･レク･体操	8月17日(金)	歌を歌う。指を使い、脳トレ。表現体操。	住民⑮	タオルを使用して「黒田節」の体操をしている。継続できたらいい。	少し動いたら、座る人が増えてきたので、順番を考えていく。
	市	HAT神戸灘の浜　9番館	ハピーで交流会		8月21日(火)	歌を歌ったり、体操を行っている。	住民⑰	普段より多く歌を歌い、体操が追加となった。ボールを使って行う時は、以前より少し皆さん慣れてこられた様子。	健康体操の後のお茶の時間を楽しく過ごせるように(皆会話に参加できるように)。
			ハピーで音楽会	ハピーでみんなの音楽会	8月27日(月)	ボランティアグループによる演奏に合わせて歌う。	住民⑭	宣伝が少なかったようで(個人へのピーアールが)また、他のクラブ等と日が重なり、参加人数が少なかった。	個人へピーアールして参加者を増やす。
中央区	市	シルバーハイツ日暮	日暮グループ	日暮コミュニティ	8月8日(水)	映画　男はつらいよ「寅次郎と殿様」	住民⑥/む～びぃ～ず①/吾妻ふれまち①/LSA①	今回は庶民的な寅さんシリーズの中でも嵐寛壽郎が出演していて、世間知らずの四国の殿様は抜群の適役と住民は声をそろえて喜んでいました。次回を楽しみにしていると言ってワイワイと話しながら積極的に片づけをしていました。	今後も住民が興味を持って参加でき、健康維持にもつながるよう働きかけていきたい。

コミュニティサポート育成事業

平成19年度　8月コミュニティ支援事業進捗状況報告

		団地等の名称	グループ名	会合名・交流会名	事業開催日	内容	参加者・人数	今月の振り返り	次回への目標
中央区	市	シルバーハイツ筒井	ほのぼの会	お元気体操	8月1日(水)	準備体操と「北国の春」「涙そうそう」の歌体操	会員⑦/住宅住民⑬/SCS②/LSA①	暑い中お元気体操に思いのほか多くの方が参加してくださった。また1人で家にいても暑いだけと来られる方がいて輪なげ、おしゃべりで時間をつぶしておられる。	「北国の春」「涙そうそう」の音楽に合わせた体操は、指導しているLSA自身まだ十分覚えておらず、失敗しながら行っている。少しなれて余裕が出てくれば、大きく歌詞を書いて張り出し、歌いながらの体操にしたい。
				筒井住宅コミュニティ会議	8月20日(月)	筒井住宅近辺の盗難事件・熱中症への注意・今後のSCSの関わり方について	見守り推進員③/LSA①		
				お元気体操	8月22日(水)	カラフルたまごモザイク・焼板ネームプレートなど制作を通じて高齢者と小学生の世代間交流	会員⑥/住宅住民⑪/SCS②/LSA①		
				LSA・SCS新聞そよかぜ編集会議	8月31日(金)	9月号そよかぜの校正と10月号の記事検討	見守り推進員③/LSA③		
	県	神戸南本町	いきいきすこやかグループ	町の保健室	8月10日(金)	血圧・体脂肪・脈チェック、健康相談	住民⑪/ボランティア②/他②	介護保険の説明は住民さんが望んでいたので、熱心に聞いていました。	今月は毎日のように暑かったので、来月の敬老の集いは、ゆっくりと過ごしていただきたいと思います。
				介護保険の話	8月10日(金)	改正に伴い、初歩的な話・質問等々			
				映画会	8月21日(火)	「赤い夕日の渡り鳥」小林旭、浅丘ルリ子他	住民⑫/ボランティア②/LSA①		
	県	神戸大倉山	花みずき	ラジオ体操	8月7日(火)	ビデオにて健康体操と唱歌を歌う。	住民⑩	猛暑が続く中、1時半からという時間設定にも関わらず、笑顔で体操に参加される。毎回日常の水分補給を促し、熱中症予防の注意を呼びかけている。	カレンダー作りについては、今後偶数月に開催を予定している。徐々に参加者が増えていくようポスターや声かけ等で募り、特にこれまで行事参加をされなかった入居者に参加していただくような配慮も必要かと思われる。
				ラジオ体操	8月14日(火)	ビデオにて健康体操と唱歌を歌う。	住民⑧		
				ラジオ体操	8月21日(火)	ビデオにて健康体操と唱歌を歌う。	住民⑨		
				ラジオ体操	8月28日(火)	ビデオにて健康体操と唱歌を歌う。	住民⑧		
				カレンダー作り	8月9日(木)	9月、10月のカレンダー作成。	住民⑦		
			大倉山コレクティブ	コレクティブふれあい喫茶	8月10日(金)	パン、コーヒー、紅茶、フルーツ等で朝食をとりながら交流を図る。	住民⑦/LSA①	21日、4階協同室で開催した『ふれあい喫茶』では、2階の新入居者が参加、自己紹介され、他の参加者とごく自然に溶け込んでお話されていた。各協同室(2～4階)2回ずつ開催してきたが、いずれも開催フロア入居者の参加だけでなく、他フロアからも違和感なく参加されている。	『ふれあい喫茶』を通し、今回のように新入居者の積極的な参加により、入居者間の交流が深められた事、またコレクティブに対する理解も深められたことから、今後も入居者にとって様々な情報交換の出来る場としてLSAは関わっていきたい。
				コレクティブふれあい喫茶	8月21日(火)	パン、コーヒー、紅茶、フルーツ等で朝食をとりながら交流を図る。	住民⑧/LSA①		
			こでまり会	映写会設営準備	8月21日(火)	会場設営準備	住民ボランティア⑤/LSA④/さくら苑SCS①	夏休み企画として、ディズニー映画を取り入れたが、子供さんの参加が少なく、事前の宣伝を蜜にする必要があったと反省する。	次回は、50回記念として作品を選別し、楽しんでいただき事故等のないよう注意したいと思う。
				映写会	8月22日(水)	作品:ピーターパン	住民⑮		
	市	HAT神戸脇の浜(市)	市住サポートグループ	喫茶(8番館)	8月2日(木)	菓子・飲み物	地域住民㉖/推進員①/市シルバー⑧/LSA②	どれも参加者には期待されているようなので、今後も期待に応えていきたい。	恒例行事ばかりのため、他に目を向け、色々なことを行いたい。
				健康教室	8月9日(木)	落語	地域住民㉗/推進員①/市シルバー④/LSA③		
				栄養教室	8月29日(水)	お菓子作り	地域住民㉔/推進員①/市シルバー⑤/LSA③		
				喫茶(7番館)	8月30日(木)	パン・飲み物	地域住民⑳/推進員①/市シルバー⑨/LSA②		

平成19年度　8月コミュニティ支援事業進捗状況報告

		団地等の名称	グループ名	会合名・交流会名	事業開催日	内容	参加者・人数	今月の振り返り	次回への目標
中央区	県	HAT神戸脇の浜(県)	HAT神戸脇の浜県住サポートグループ	刺繍教室	8月8日(水)	各自好きな材料に、ミシン刺繍をする。今回新しい方1名参加される。	シルバー住民・地域住民⑪/LSA②/推進員①/講師①/ボランティア②	ミシン刺繍は定着してきた。新しいメンバーが増えつつある。10番館は新入居者の紹介も兼ね、ハンドベルの演奏をしてみた。珍しいので好評だった。輪なげも定着しつつある。	ハンドベルは、講師になってくれる方が、施設の前職員だったこともあり、住民の方とも打ち解けやすかったので、今後も続行していこうと思っている。クリスマス会等で披露できるまでの上達が出来ればと思っている。
				10番館お茶会	8月10日(金)	今回はハンドベルを練習してみた。珍しさもあって好評だった。新入居者の紹介も兼ねた。	10番館住民⑥/LSA②/推進員①/講師①		
				輪投げをしよう	8月14日(火)	適度な運動になり、、気軽に楽しめている。定着しつつある。	シルバー住民・地域住民⑫/LSA②/推進員①②		
				輪投げをしよう	8月21日(火)	毎回、新しいメンバーが増えてきて、住民間の関係もいい。	シルバー住民・地域住民⑯/LSA②/推進員①		
北	市	シルバーハイツひよどり台	ひまわりグループ	おたのしみ会	8月8日(水)	昼食と大正琴	住民㉟/LSA②		
				おたのしみ会	8月28日(火)	買い物外出・外食	住民⑤/LSA①		
	市	シルバーハイツ鈴蘭台	シルバーハイツ鈴蘭台住民グループ	お茶会ふれあいの会	8月9日(木)	近況を話す会	住民⑥	何時も参加される方が同じでワイワイ過ごしている。	楽しい会を考えたい。
	市	シルバーハイツ西大池	大池いこい友愛グループ					盆踊り、その他支援者個々多忙なため(地域住民含む)協力要請が出来なかった。(言えなかった)	手芸、映画会要請する。
兵庫	市	シルバーハイツ菊水	菊水	避難訓練	8月2日(木)	火災発生を想定して避難訓練を実施。			9月中に行事を実施する予定。現在企画中。
	県	神戸明和	いきいきクラブ	高齢者の交通安全ビデオ鑑賞会とコマの折り紙	8月22日(水)	TV放映、水戸黄門出演者による今昔、交通安全ビデオ解説。折り紙(コマ)	シルバー住民⑮/一般住民⑤/警察官①/LSA②	集会所の広さの関係でビデオ鑑賞を実施していなかったので、住民の方には物珍しく、好評だった。	珍しい腹話術を検討中。
	市	シルバーハイツ浜山	フレール浜山グループ	カラオケ交流会	8月5日(日)	カラオケ	住民⑧	沖縄料理では、3グループに分かれて作る楽しさ、食べる喜びを味わってもらえたように思います。	9月からは健康教室、映画鑑賞会を毎月行う予定です。
				フレールいきいき栄養教室	8月22日(水)	沖縄料理の実演と試食	住民⑯		
				フレールふれあい喫茶	8月26日(日)	喫茶と歓談	住民㉟		
長田	市	シルバーハイツ長田北	なでしこ会	ふれあい喫茶(なでしこ会)	8月24日(金)	長田区保健師による健康体操や健康講座お茶とお菓子で楽しいおしゃべり交流	住民⑩/LSA①/保健師①	健康体操として時期が悪かったのか、お茶を当番制にしたのが悪かったのか、集まりがよくなかった。	参加しなかった人、また出来なかった人から「ごめんなさい」の言葉が出るようになってきた。良い方向へ進んでいくことを願っている。
	市	シルバーハイツ浜添(真野ふれあい住宅)	真野ふれあい住宅住民グループ	ハンドベル演奏	8月8日(水)	聴覚障害者の方のハンドベル演奏	地域住民・デイサービス利用者・各シルバー住民計㊿	先月に比べ、各ハイツの方や地域住民の方の参加があった。	男性の方の参加がなかったため、次回男性の方も一緒に参加できることを企画したい。
				染物体験	8月29日(水)	シルバーハイツ住民の方に教わりながら、木綿のハンカチを染める。	デイサービス利用者・各シルバー住民計⑮		
	市	シルバーハイツ東尻池	シルバーハイツ東尻池住民グループ	ハンドベル演奏	8月8日(水)	聴覚障害者の方のハンドベル演奏	地域住民・デイサービス利用者・各シルバー住民計㊿	先月に比べ、各ハイツの方や地域住民の方の参加があった。	男性の方の参加がなかったため、次回男性の方も一緒に参加できることを企画したい。
				染物体験	8月29日(水)	シルバーハイツ住民の方に教わりながら、木綿のハンカチを染める。	デイサービス利用者・各シルバー住民計⑮		
	県	神戸西尻池	西尻池シルバーハウジンググループ	カレンダー作り	8月23日(木)	9月のカレンダーに色をつける(ぬりえ)	住民⑩	いつも同じメンバーの参加だが、1つのグループになってきており、次回の希望を言われる。	参加者は少ないがLSAが行う行事を楽しみにしている方がおられ、今後もよい関係でありたい。
				映画会	8月29日(水)	やすし&きよしの漫才	住民⑧		

コミュニティサポート育成事業

平成19年度　8月コミュニティ支援事業進捗状況報告

		団地等の名称	グループ名	会合名・交流会名	事業開催日	内容	参加者・人数	今月の振り返り	次回への目標
須磨	市	シルバーハイツフレール離宮西町	フレール友の会	団らん室清掃	8月12日(日)	共用部分の清掃活動を実施	住民⑤	住民6名中5名が参加され、約1時間清掃活動が「和気あいあい」と行われた。	当日LSAは参加出来なかったが、次回は参加し、交流を図りたい。
	市	シルバーハイツ松風	よりあい	よりあい	週1回開催	製作活動、茶話会など	住民⑧/LSA①	隣接する施設の夏祭りに参加していただき、楽しいひとときを過ごしていただくことができた。	自治会主催の茶話会や食事会が定着しつつある。LSAとしては、勉強会の定期開催を検討中。
				夏祭り	8月18日(土)	施設のイベントへ参加。盆踊りなど	住民⑯/LSA①		
	市	シルバーハイツ松風 第2	つどい	つどい	週4回開催	ゲーム、製作活動、茶話会など	住民⑪/LSA①	施設の夏祭りに多数参加いただくことができ、良かった。	自治会主催のふれあい喫茶の開催に向け検討中。LSAも支援を行う予定。勉強会の定期開催を検討中。
				夏祭り	8月18日(土)	施設のイベントへ参加。盆踊りなど	住民⑭/LSA①		
	県	神戸白川台	白川台住宅　住民グループ	ラジオ体操	8月(月～金)	ラジオ体操・テレビ体操	住民・LSA②～④	グランドゴルフは暑さのため中止としていたが、住民からの呼びかけにより開催。	9月は暑さなどの状況をみて『歩こう会』を開催するかを決める。
				グランドゴルフ同好会	8月(火・金)	健康づくり・住民交流	住民・LSA③～⑥		
				頭の体操教室	8月22日(水)	頭の体操クイズ等	住民・推進員・LSA⑧		
垂水	県	神戸小東山	小東山LSA	小東山LSA				住民福祉グループによるカラオケ、詩吟、手芸、お弁当の会は順調に行われている。	今後LSA主催で実施したい行事について住民に聞き取りをおこなったところ、みんなと食事をしたいという提案が多く寄せられた。10月開催に向けて検討中。
	市	シルバーハイツベルデ名谷	グループプラム	ラジオ体操	8月	(月～金　9:30開催)　健康づくり・住民交流	住民⑥/LSA①	猛暑の為、体調を崩される方が多数あり、行事への参加も減り、心配です。	少し涼しくなり、気候が良くなれば、外出の計画を立てて皆様に参加していただきたいです。
				誕生日カード	8月	誕生日カードを渡す。お元気確認、コミュニティ	住民⑭/LSA②		
				上映会	8月8日(水)	「鬼平犯科帳」上映・住民交流	住民⑦/DS①/LSA②/ボランティア②		
	市	シルバーハイツ舞子山手住宅2号棟	舞子山手住宅2号棟住民グループ	栄養教室茶話会	8月22日(水)	栄養士による講義、調理実習	舞子山手2・3住民⑭/LSA②/実習生①/栄養士①	栄養教室が人気である。男性参加者も増え、住民も今後に期待している様子。	2号棟にも立派なカラオケ装置がある。もう5年以上使用されていないので、一度調整したい。
				会場準備	8月22日(水)		LSA①		
				打ち合わせ	8月15日(水)	必要物品、消耗品買出し	LSA②		
	市	シルバーハイツ舞子山手住宅3号棟	舞子山手住宅3号棟住民グループ	茶話会	8月8日(水)	茶話会、沖縄ワールド	舞子山手2・3住民⑬/LSA②	夏らしい催しとして、沖縄の名産をそろえたり、屋台風でたこ焼とラムネ(瓶)を提供し、好評であった。	今年から始まった全国の銘菓、少しづつ人気が出てきている。季節に応じた出し物を考えたい。
				打ち合わせ	8月1日(水)	買い物	LSA③		
				茶話会	8月29日(水)	茶話会、夏祭り屋台風	舞子山手2・3住民⑰/LSA②		
				打ち合わせ	8月27日(月)	買い物、屋台出し物準備	LSA③		
				打ち合わせ	8月3日(金)	8月茶話会ポスター作成、貼り出し	LSA②		
西	県	シルバーハイツベルデ玉津	ふれあいグループ	日曜喫茶	毎週日曜日	住宅入居者および地域住民が集うふれあい喫茶を自治会と共に実施する。	平均参加者41名	地域の自治会と実施する日曜喫茶は順調に実施されている。参加者も定着している。	9月は自治会とLSAが共催して敬老の日に食事会を行う予定。
	県	伊川谷第2	いかわだにグループ	ふれあい喫茶	8月11日(土)	茶話会	住民、学生ボランティア、友愛訪問ボランティア	ふれあい喫茶に友愛訪問ボランティアが関わっていただくようになった。	開放コーナーの利用促進を図る。映画会の実施。近隣住民との関係づくり。地域の行事などに参加していただくことなど考える。「町の保健室」開催に向けて看護大教授と打ち合わせし、実施する。
				健康体操、健康チェック	8月28日(火)	健康体操と血圧、体脂肪測定など	住民、推進員、LSA		
				看護大との打ち合わせ	8月17日(金)	新規事業に向けての打ち合わせを行う	看護大教授、学生、推進員、LSA		
	市	シルバーハイツ西神井吹台		広報誌作成	8月6日(月)	記事内容の検討	LSA室スタッフ④	前月に、広報誌の土台つくりが出来ていたので、比較的スムーズに作業が進んだ。記事内容の検討に関しては細心の注意を払った。	より見やすく読みやすい紙面づくり。
				広報誌作成	8月10日(金)	記事内容の確認	LSA室スタッフ④		
				広報誌作成	8月15日(水)	レイアウト検討	LSA室スタッフ④		
				広報誌作成	8月27日(月)	最終校正、チェック	LSA室スタッフ④		
				広報紙印刷	8月28日(火)	印刷	LSA①		

もと体力測定を実施するなど工夫をしています。それによって多くの入居者に参加していただくことに繋がりました。

この４年間のコミュニティ活動は、日常生活（特に夜間、休日等の緊急時対応や、いざという時の住民の連携）での入居者同士の支え合いを大きくしました。

また、LSA にとってコミュニティサポートグループ育成支援事業は、コミュニティづくりを行うきっかけ作りになりました。市社協で実施する研修やグループワークを通してコミュニティづくりについて学び、それを住宅に合った無理のない形で実施することができました。LSA のコミュニティワーカーとしての力量が評価できます。

行事への参加者は増えつつありますが、住宅全体に高齢化が進み協力者や担い手を募ることが難しいのが現状です。今後は、地域の自治会や民生委員とも今以上に交流を図り協力を得ていきたいと考えます。また、地域包括支援センターとも連携を取り合い、地域が一体となって支援をしていきたいと考えます。

参考資料４

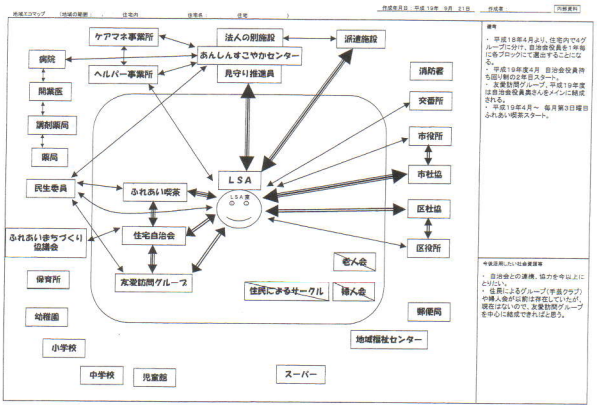
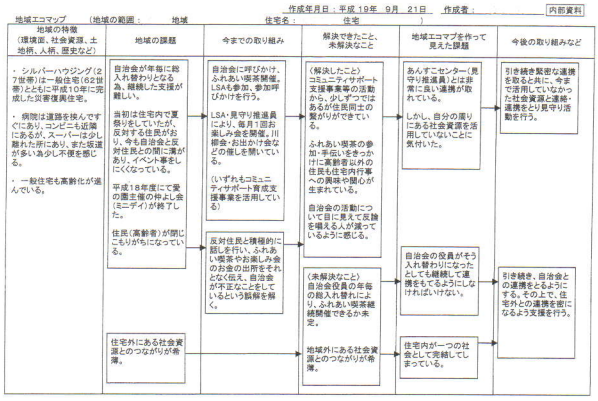


写真１：LSA 会議の様子
LSA 自ら指導を受け体験する様子



「地域エコマップ」神戸市のあるシルバーハウジング担当LSA が、LSA室と地域の社会資源との関係を紙面上に落とし作成したもの。

写真２－①：LSA 会議（調理実習）の様子
「食」の大切さを学ぶ

写真２－②：LSA 会議（調理実習）の様子
協力し合う楽しさを体験

コミュニティサポート育成事業

コミュニティサポート育成支援事業への取り組み

社会福祉法人やすらぎ福祉会　脇の浜高齢者介護支援センター　センター長　濵田　福治

私たちの町HAT脇の浜地域は平成７年阪神・淡路大震災の復興住宅地域として県・市公団により住宅建築、平成11年に誕生しました。その後も民間により分譲住宅と、公務員宿舎の建築が進み昨年度で脇の浜地域の住宅はほぼ完成されました。全て高層住宅で戸数は県営253戸、市営550戸、公団853戸、民間分譲643戸、宿舎406戸、計2,705戸です。人口は5,864人で65歳以上の高齢者は1,302人、高齢化率は22.20％です。震災はいのちの尊さや、安全、安心で健やかに生きることの大切さを教えてくれましたが、阪神・淡路大震災から十二年が経過した今、被災地における課題は個別・多様化しており、特に、災害復興住宅では高齢化率・単身高齢化率が年々上昇し、入居者の日常生活動作の低下や閉じこもりの増加が懸念されるなど、普通の生活が困難になられた方が多くなり、そこで現われている課題は被災地特有の性質と将来の高齢化社会を先取りした課題を有しています。神戸市においては、この課題の緊急性や深刻さ、対応する施策の先導性に鑑み、被災地の自立支援プログラムを策定し、高齢者の見守りや生きがいづくり、コミュニティづくりなどの課題への対応を図ってきました。この震災では、多くの高齢者が住家を失い、こうした多数の高齢者へのニーズに応えるため、災害復興住宅を短期間で大量に供給して居住の安定を図った結果、復興住宅は一般住宅に比べ高齢化率が極めて高くなるとともに、各々住み慣れた地を離れて集まったことにより、コミュニティが非常に希薄な状態であったという基本的な課題への取り組みを必要とします。

神戸市内及び近隣の広い地域で被害を受けられ、それぞれ生活環境の異なった多くの方々が集まりこの地域で住まわれているため、特に住民同士の支えあいの難しい面があります。

この様な地域状況の下で平成11年４月より高齢世帯支援員（後の見守り推進員）と共同で生活援助員（LSA）は高齢者の健康で安心安全な自立した生活支援の活動に誠心誠意励んで参りました。ここ脇の浜復興住宅においても高齢者のきめ細やかな見守りを行うため、LSA、見守り推進員、民生委員など支援者による見守り活動を実施するとともに、緊急通報装置やガスメーターを活用した見守りシステムの普及促進、住民が安心して生きがいを持って生活することが出来るよう、コミュニティサポートグループの育成を支援し、住民相互の見守りやふれあい交流等によるコミュニティづくりを活性化させることを目的に、地域ぐるみで高齢者を包み込む仕組みづくりに努めました。当初はお元気確認（安否の確認）を主に実施して参りましたが、地域とのコミュニティづくりに役立つ援助も取り入れて近隣の支えあいを目指してきました。

この様な活動状況の中で平成16年度よりコミュニティサポート育成支援事業が始まり積極的に取り組みを始めました。これまでの取り組みを時系列で見てまいりますと次の通りです。

H16／11月　秋の日帰り「おいしんぼ」旅行　施設のバスを使用しての紅葉見学、ホテルランチ。

H16／12月　クリスマス会　その後も毎年恒例行事となり地域住民のみなさんに期待されている。

H17／ 2月　気軽に楽しめる「映画会」19年度末までに11回実施、回を重ねるごとにニーズに反映させていく難しさを痛感しています。

H17／ 3月　ひなまつり会　季節に合わせた催しと

演芸会　舞台の様子

して毎年恒例としています。演芸もあり大勢の参加があります。

H17／ 7月　こんぴら船々 IN 神戸　琴平高校の学生と世代を超えた交流をその後毎年実施。

H17／ 9月　工作・粘土教室　物作りを通して教えあい会話がはずみ作品を手にして喜び合います。

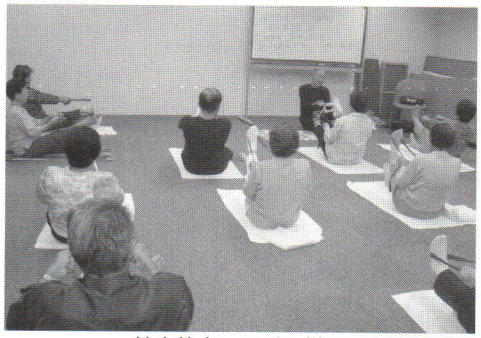
H17／10月　そば打ち体験教室　そば粉からそばを打ち、茹でて皆で食べる楽しさを感じ合います。

そば打ち体験教室の様子

H18／ 1月　刺繍教室　パソコンが組み込まれたミシンを使って刺繍をし、アイロンで仕上げる。参加者も多く以後毎月1回実施しています。

H18／ 3月　神戸空港見学　施設バスを利用して2回実施、空港内を自由に見学出来好評でした。

H18／4月以降　健康教室　介護予防、健康維持、増進を目指してウオーキング・体操・脳チェック・足底反射療法・輪投げ遊び・高齢者ヨガ・ミニゲーム大会・カイロプラクティク・歌体操・気功・フォークダンス等毎回趣向を変えて実施しています。



健康教室　ヨガの様子

H18／5月以降　栄養教室　ホットプレートクッキングで調理実習を定期的に実施。

H18／ 7月　南京玉すだれと皿回し　保育園児に声を掛け交流する。

H18／11月　ポートアイランドに買い物ツアー。

H18／12月　銭太鼓。

H19／ 1月　ミュージックセラピー。

H19／ 2月　お茶会。

この様に順次実施しています。また課題となっているコレクティブハウジングの共同スペースの活用についてはH19／２月からクレープ、たこ焼き、みたらし団子作りを実施「一緒に作り、一緒に食べる」機会を開催しています。

地域においても様々なボランティアグループによる催しやサークルがあり興味を持たれている方は参加されています。そのために新しくグループを結成するよりも地域にはない催しを実施し、一人でも多くの方に参加して頂き閉じこもり防止にもつながるように実施してきました。そして気軽に誰でも立ち寄れる場の提供をと考え喫茶を始めましたが、地域に定着し、様子をみながら今後ボランティアに移行できればと考えています。

災害復興住宅においては、高齢化率、単身高齢者世帯率は、一般住宅に比べて極端に高く年々高齢化が進む中、ADL（日常生活動作）の低下からケアを必要としたり、閉じこもりがちの高齢者も増加しており、更には自治会の担い手不足や自治会役員の高齢化によるコミュニティ活動の停滞など、良好なコミュニティづくりに支障が生じてきています。今後の高齢化の進展や課題の複雑化を視野にいれ、高齢者の自立を支援する持続可能な新しい仕組みを構築する必要があると考えます。今後ピークを迎える「団塊の世代」の一斉退職を見据え、退職した中高齢者の地域活動、とりわけ今後の超高齢化社会をにらんだ高齢者の自立を支援する活動への参画を大いに期待したいと思います。地域の良好なコミュニティを形成していくためには、高齢化対策はもとより、少子化対策や防犯、防災など、様々な分野の取り組みの連携を図り、高齢者の自立支援する拠点が、住民が主体的に関わる地域コミュニティづくりの核として発展することを目標とし、地域で普通の暮らしを支えるサポートを今後も支援し続けて行きたい。

コミュニティサポート育成事業

地域との協力行事「七夕まつり」

神戸魚崎南住宅　LSA　生和　房雄

梅雨の空に気を揉みながら震災復興住宅9年目に初めて、イベント「七夕まつり」を住宅以外まで広く呼びかけて高齢者と子供が参加して一緒に行いました。LSA活動の一つに高齢者の閉じこもり防止など、住民コミュニティ活動の支援が謳われています。この復興住宅は高齢化率が高くほとんどが65歳以上の方で近所付き合いも限定的なものになりがちですが、LSAは今までシルバーハウジング住民のみを対象にコミュニティ活動として映画会や茶話会などを年間数回開催していました。

この支援はシルバーハウジング住民のみ対象ですが、見守り訪問の中で高齢者の話題が少ないことや交流の活動範囲も狭いことを感じながら、子供との交流を通じて高齢者の活力を高めてもらいたいと考え子供も参加しやすいような季節行事の「七夕まつり」に工夫を盛り込み実施しました。

【準備会】

LSA一人では規模の大きい催しは出来ないので、一般住宅を訪問していたあんしんすこやかセンター（地域包括支援センター）の見守り推進員に声をかけて協力を求め合同で開催する運びとなりました。

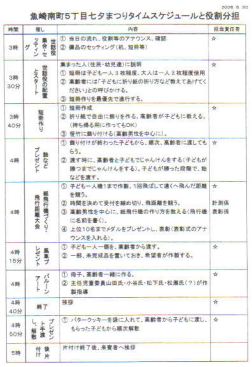
当初、子供を集める方策では近隣の保育園に参加を呼びかけましたが、保育園側の催しと重なることから断られたりもしました。七夕まつりを盛り上げるために、周辺に宣伝する必要から地域の関係諸団体や住民の皆さんにも説明会や事前準備会などを開き参画を求めました。

このため近隣マンションにポスターを持参して張ったり、民生委員や連合自治会、地域子供会などにも広く参加協力を呼びかけました。

特に重きを置いたのは「事前準備会」でした。準備会では会場レイアウト、催しものの内容、役割分担、子供へのおみやげ作りなどを中心に行いました。この準備会に時間を掛けて話し合ってきた「役割分担」は、七夕まつりの成功へのポイントとなりました。

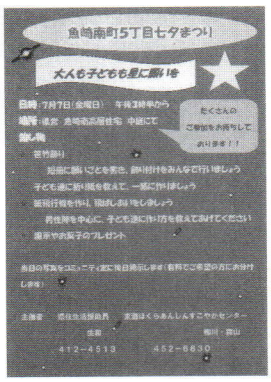
毎日、平穏に過ごしておられる高齢者に、催しものの担当として役割を担ってもらうことでした。力仕事や難しいことをしていただくのではなく、『子供とジャンケンをして飴を渡す役』『男性の高齢者は紙飛行機づくりを参加した子供に教える役』『当日のおみやげ用のかざ車の作成と、当日作り方を教える役』また米寿の入居者の方には『紙飛行機飛ばしに参加した子供達を表彰する役』や、体がやや不自由な入居者の方には『参加者の事故防止の見守りを行う役』など担当をお願いしました。

この「役割分担」には過去の催しやその参加状況、また個人の趣味や体調などの情報を集めてこちらから役割を受けてもらえるように強制的でなく誘導していくことが大切だと思いました。


魚崎南町5丁目七夕まつりタイムスケジュールと役割分担

時間	催し	内容	担当責任者
3時	集合・ウォーミングアップ	① 当日の流れ、役割等のアナウンス、確認 ② 備品のセッティング（机、短冊等）	※
3時30分	自由参加の催し スタート	事前ふった人（住民・近代連）に説明 ① 短冊は子ども一人3枚程度、大人は一人2枚程度使用 ② 高齢者には「子どもに折り紙の折り方など教えてあげてください」との呼びかけ。 ③ 短冊作りを最優先で進行する。	※
3時40分	短冊作り	① 短冊作成 ② 折り紙で自由に飾りを作る。高齢者が子どもに教える。（特ない場合は一緒に作ってもOK） ③ 飾りに飾りつけ（高齢者男性を中心に）。	※
4時	飾りつけ プレゼント	① 飾りつけが終わった子どもから、順次、高齢者に渡してもらう。 ② 渡す時に、高齢者と子どもでじゃんけんをする（子どもが勝つまでじゃんけんをする）。子どもが勝った段階で、飴などを渡す。	※
4時	紙飛行機大会	① 子ども一人種1まで作製、1回飛ばして遠く飛んだ距離を競う。 ② 時間を決めて受付を締め切り、飛距離を競う。 ③ 高齢男性を中心に、紙飛行機の作り方を教える（飛行機に名前を書く）。 ④ 上位1名までメダルをプレゼントし、表彰（表彰式のアナウンスを入れる）。	※ 計測係 表彰係
4時15分	集合・プレゼント	① 子どもー人一景品、高齢者から選ぶ。 ② 一部、未完成品を置いておき、希望者が作製する。	※
4時	バルーンアート	① 母子、高齢者一緒に作る。 ② 主任児童委員山田氏・小谷氏・松下氏・松瀬氏（？）が作製指導	※
4時40分	終了	後片付	※
4時50分	集合・プレゼント	① バタークッキーを袋に入れて、高齢者から子どもに渡し、もらった子どもから順次解散	※
5時	後片付け	片付け終了後、未賞食べ・後片	

役割分担表



チラシ

可能な限り準備会では参加者全員に役割を担っていただき、行動など意識を高める手段として名札をつけて責任もってもらうことにしました。実際に役割を持った高齢者の方はそれなりに表情も穏やかで、生き生きと動かれていました。

【まつり当日】

午後3時過ぎからの催しにどれだけの参加者があるかと心配をしていましたが、幼児達は母親の手をとり一緒に来てくれたので安堵したものでした。小学生も学校が終わった4時前には駆けつけてくれ、七夕の短冊の飾りつけやそれぞれの催し等に総勢100人ほど集まりに賑やかに盛り上がりました。

近隣マンションの住民の方が余興としてバルンアートの実演や皿回しを披露するなど飛び入り出演もありました。一方　高齢者も子供が書く短冊に目を細めながら文字書きに手を添え、また紙飛行機づくりではチラシから折りあがる紙飛行機を掴むなり、投げ飛ばす子供の姿を笑顔で見ている母親たちの光景もありました。

行事協力の高齢者も子供の動きに声をかけながら笑顔でそれぞれの役割の仕事を進めていました。また私たち主催者側が手薄になりがちな事故防止のために道路で見守る人や、ごみを拾うなど陰ながら支援をしている人達もあり、とてもありがたく感じたものです。

また見守り推進員の女性達がマイクを持ちそれぞれの催しの進行や案内することで華やかさも醸しだしていました。

後の簡単な反省会でも若い女性の優しい声で和やかな雰囲気づくりとなったことや、あんしんすこやかセンターの職員（見守り推進員など）との距離が縮んだと聞き嬉しくなったものです。

【終わりに】

後日、集会室の廊下に「七夕まつり」の写真を張り出し、希望者には有料で渡しました。「準備会」、「本番」、「写真展」と3回もこの七夕まつりで楽しみました。この写真撮影も役割分担として住民の方にお願いしたものです。

規模が大きくなると屋外での催しになりがちで、準備や天候など不測の対処が必要となりますが、LSAは自治会や地域の関係団体との関わりを普段からつくっておくことが肝要と思えます。

このような催しは珍しいことでなくどこでも行われていますが、住民側は誰かが“してくれる”だろうという受け身の意識がどうしても強く、“誰かがすればわたしも手伝う”という考えの方が多いと感じます

今後コミュニティ活動をサポートするうえで、我々LSAが高齢者の気持ちをどこまで汲み取ることが出来るかが課題です。

以前は復興住宅の中庭に子供たちの姿は少なかったが、今は放課後の居場所として砂遊びやブランコ等で賑やかな声と共に多くなった子供たちの姿をベランダやベンチで眺めている高齢者を見かけます。

会場の様子
奥には笹が置かれ、飾り付けが行われている

また遊ぼうね
高齢者と子ども
県住で交流会

東灘区

子どもとお年寄りの交流を深めようと、東灘区魚崎南南五の県営魚崎南高層住宅で七日、七夕祭りがあり、ジャンケンや紙飛行機飛ばしなどのゲームで、約八十人が楽しんだ。

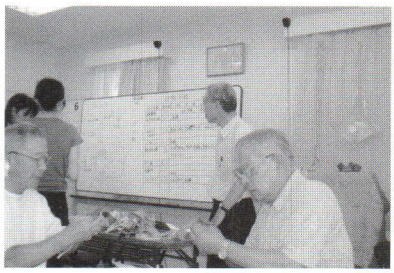
同住宅は自己二十戸の大半が高齢者で、訪問活動などをしている生活援助員（LSA）らが「子どもと触れ合うことで元気を出してもらおう」と企画した。

祭りはササが飾られた同住宅内の公園で午後三時半に始まった。お年寄（七）は「久々に飛行機をりたたが、孫のような子どもたちによく飛ぶ紙飛行機の作り方を教えた」と、折り紙の風車をプレゼントしたりすると、子どもたちもすっかりとけ込み、喜んで遊んでいた。

紙飛行機作りを子ハバイスした松田勝巳さん（六六）は「久しぶりに折った以上に喜んでいた」と目を細めた。風車をもらった魚崎南小一年の三原航大君（六）も「僕も折り紙を入れたけど、風車は知らなかった。また教えてほしい」と笑顔で話していた。（木中麻美）

紙飛行機を飛ばして楽しむ子どもたち
＝東灘区魚崎南5

平成18年7月8日（土）
神戸新聞朝刊
七夕祭り取材記事



準備会の様子　手前は当日のおみやげのかざ車を作成中

近隣マンションの住民の方々によるバルーンアートコーナーの様子

コミュニティサポート育成事業

手話コーラスグループ設立
～住民メンバーが主役の会～

ＨＡＴ神戸灘の浜（市営）住宅　LSA　柏原　静津子

私たちは２年前から、行事等に参加できていない人や閉じこもりの方々に呼びかけ、コミュニティサポート支援事業の取り組みの中で月１回健康体操をしています。

ボールやチューブを使い、音楽に合わせて体操し、ひと汗かいた後で講師の先生も交えてお茶会をします。先生はとても明るくお話も上手で、参加者も吸い込まれるように健康体操をしています。

ある会で講師が演じた手話「四季の歌」に住民の方が大変興味を持たれ、自主的に自宅でも練習をするほどになりました。ある時、先生が日頃指導されているほかの健康体操のグループの発表会があるので、「応援に行こう」という話になりました。先生は「応援に行くだけではなく、是非みなさんも参加してみませんか？」と言われ、結果私たちは手話コーラスで出演することになりました。ただ住民の方々の中には「できない、前に出るのはようせん」など消極的な方々もおられたので、LSA の出番となり、「ステージ脇で私たちも一緒にするから！！」と後方支援を提案しました。すると徐々にみんなの顔から緊張感がとれました。発表会の２週間位前からは毎日練習で猛特訓が続きました。

いよいよ当日、会場に向かうバスの中では緊張ぎみの方もおられましたが、いざ舞台に立つと、みんな日頃の練習の成果を存分に発揮し、発表も大成功に終わり舞台を降りる時には表情は晴ればれとスッキリでした。帰りのバスの中では大変和やかな雰囲気になり、またやってみたいとの声があっちこっちから上がりました。

それから半年後、灘の浜で神戸大学生主催の「春の祭」が実施される事になり、そのプログラムの中で、学生の演ずる手話の発表があると知りました。そこで私達のグループも手話参加をしたいとお願いしたところ、快く受け入れていただきました。ところが住民にこの話をしたところ「人前では、ちょっとねぇ～」と言って、またもやしり込み状態。メンバーのみんなからは、「日曜で子や孫が来るさかい」「彼岸で墓参りに行くでなぁ～」等…参加出来ない理由がLSA に伝えられました。LSA が「出られない方も練習だけでいいから参加してください」と呼びかけ、２週間前から練習を始めました。

実は、今回の曲目「今日の日はさようなら」はまだ２回しか講師から教わっていなかったのです。それでも集まれば誰かが覚えているだろうと言う事で記憶を頼りに始めました。わからないところが出てくると「いやぁ～、先生こうしてたで～」とか言いながら身ぶり手ぶりでして見せます。どうしてもわからないところはみなで知恵を絞っての振り付けです。メンバーが１つになり、練習していく中でだんだん形が出来上がっていきました。

練習を始めて１週間、メンバーの方々に変化が表れ始めました。既に手話もそれなりに完成に近づき、更に高い完成度を目指し、毎日の練習を頑張っていました。メンバーがメンバーを引っ張り励まし合って、それぞれができることを考えながら役割分担し、みんなが支え合えるようになっていきました。練習は毎日３時半から５時近くになることもあり、私たちLSA が業務をしながら、毎日お付き合いするのは正直きついものがありました。そんな時、メンバー

グループの日頃の練習の様子

の方から「あんたたちは仕事忙しいでしょう。私たちは勝手にするからお仕事しといて」と言ってくださいました。

練習後のお茶の時間に、お茶菓子を持ち寄り、井戸端会議。時にはそれが長くなって手話練習か井戸端会議か、どちらが主かわからない状況もありましたが、これも住民の交流の場だと大きく受け止め楽しんでいただきました。実はそれが後に引きこもりの方々を井戸端会議に参加させようという交流会の１つを立ち上げるきっかけとなったのです。

祭が近づいてくると、ステージでの立つ位置をどこにするか、歌詞カードを誰が持つか、誰が指揮をするのか等の段取りで色々意見が交わされました。あんなに引っ込んでいた方が僅かな期間で自分達だけで何とかしようと動いてくれたのです。お祭の直前にはすっかり住民主体で手話ができるようになりました。祭の前日「私、行けるようになった」「練習は出られなかったけど何かできることある？」「お墓参りの予定を子どもに頼んで１日繰り上げてもらったから」「参加させてもらいますわ」等、涙が出るような言葉がたくさん出てきました。

そして平成19年３月18日、大学生主催の春祭りの当日。本当の意味での住民主役の手話発表の場です。「四季の歌」「今日の日はさようなら」２曲を手話で演じ、みなドキドキわくわくしながらも楽しく発表されました。

お祭りでの出演の様子

お祭の発表後、達成感と一緒にまた何かしたいという気持ちがわき出ているのがわかりました。メンバー同士の結束力も更に強いものになり、メンバーが発表した手話を見て習いたいという人もあり、次の交流会では新メンバーも増えました。私たちLSAも今回の春祭りではお手伝いしましたが、大半は入居者メンバー自らが頑張った結果です。メンバー全員には自信とやり遂げたという達成感があり、参加者の生きがい作りに繋がったのではないかと思います。

これがきっかけになり、住民の手で新しく手話グループを立ち上げるまでになりました。しばらくは、ビデオを見ながら自分たちで練習していく事になりますが、参加者募集のポスターも作り、準備は着々と進んでいます。手話サークル名は「にこにこ手話サークル」。月２回の練習です。平成19年６月４日、10名もの参加者で初練習を行い、楽しい時間とともに好スタートを切りました。今後の発展をとても楽しみにしています。

住民同士の集いの場「大倉山シネマ」

神戸大倉山住宅　LSA　朝日　治子・石田　幸子・玉田　和子・田村　雄吉・平井ひろみ

神戸大倉山シルバーハウジングの入居者の方が、LSA に46回続いている映写会での出来事や思い出を語ってくださいました。お話の内容をここに紹介します。

私は、映写会を毎回楽しみにしている１人です。

今日は大倉山シネマで“子ぎつねヘレン”の映写会があります。毎月第３水曜日がその日です。神戸で育った私は若い頃から日本映画発祥の地である新開地の聚楽館で、映画や芝居を楽しみました。他にも映画館がたくさんあってよく観たものです。でも最近は映画を観ていないなあ。また隣の人と「カトリック教会でのお茶会の後に何か楽しい行事をして欲しいな」と話していたのです。それを伝えてくれたんですね。支援センター、見守り推進員、住民の皆さんと検討会を何回もしてもらって、コミュニティホールで懐かしい映画も上映する事が決まり、とても嬉しく思いました。

午後にどんぐり公園のホールに着くと、「ようこそ、こんにちは」と声をかけてくださいます。LSA の方が「どうぞ」とビニール袋を渡してくれます。自分の靴を入れて足元に置くのです。のど飴も用意してくれました。入り口の上には「大倉山シネマ」の看板があり、映画館の雰囲気が出ています。椅子の上には座布団が敷かれ、楽です。住民、LSA、SCS で作っていただいた足置き台もあり、足の疲れが和らぎます。明かりの入る窓やガラス戸には暗幕が張られ、ホール内は暗くなります。白のスクリーンが引き立っています。

映写会の看板
入り口の上に掲げられる大きな手作り看板

私が「あの天窓の幕はどうして取り付けているのかな」と聞くと、「住民の発案で、自ら毎回梯子を使って上がり、薄いベニヤ板を立てかけて暗くした。SCS、LSA も何回か手伝った。この方法が最良だったが、今年４月には事故が起こらないうちにと、管理委員会と住民ボランティアの方が遮光ボードを天窓に張り付けて固定してくださった」とお聞きしました。

設営の様子
住民ボランティアの方々の協力のもと行われます

「梯子で上がらなくてよくなったが、手伝う事が減ってしまった。残念な…」と住民ボランティアの方が言われていて、なんともいい雰囲気を感じました。

周囲の幕は寄贈品の布を利用して、手縫いで仕上げられた。そして誰でも設営できるようにと住民が中心になって検討し、LSA は全面的に支え役で応えたそうですね。

映像に関しては、ボランティアグループ“出前映

画のむ～び～ず”のメンバーの方々がきれいに映してくれます。映写会の１回目は、区社協のプロジェクターを借用し、LSAの所属施設の応援で搬送と上映を手伝ってもらって『冬のソナタ』を見せてもらいました。２回目からは、ボランティアグループ“出前映画のむ～び～ず”さんとの出会いがあり、開催の度に来ていただき上映してくださいます。あちらこちらの住宅のLSAから「うちの住宅でも映写会を開催したいので紹介して」とLSAに声がかかったと聞きました。

午後１時30分になりました。司会者が「子供のキタキツネヘレンと少年の出会いを感動的に描いた物語です。ごゆっくりご覧下さい」と紹介があり、映写会は定刻に始まりました。

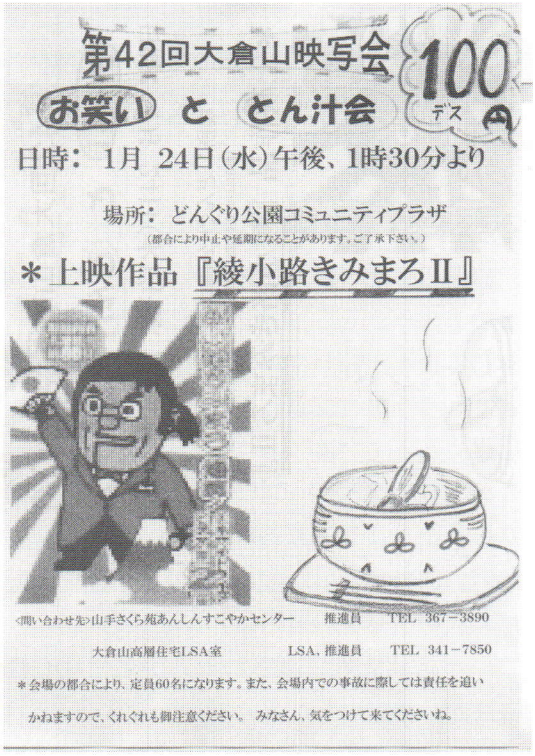
このように多くの人が快く準備に関わって開催しているのですね。皆さんありがとう。

冬の第３水曜日、あの有名な“綾小路きみまろ《あれから40年》”漫談の上映です。

（「あなた、行ってらっしゃい。早く帰ってね、本当よ、きっとね」当時は本当に可愛かった。食べてしまいたいくらい可愛かった妻。あれから40年・・・今は変わってしまった。帰ってくると「あんた、もう帰ってきたの？私は出かけるわよ」とつれない・・・。「あぁ～なんと言うことか、いっそあの時に食べておけばよかった」）ドッと笑いが響く、笑いの連続です。体を折り曲げて笑い転げる女性、「笑うのに涙がこんなに出て」と涙を拭く。上映は終わった。口々に「こんなに笑ったのは久しぶりだわ、あははは」と席を立つ。司会者が「また来月の映写会へどうぞ」と次回のポスターを掲示しながら、作品の内容を少し紹介する。

映写会のポスターは第１回からLSAが作ってきました。色合い、題名文字の大きさ等に工夫をしながら挿入画も分かり易いものを選びます。作成に適任者がいるんです。ポスターは１週間前から住宅掲示板に張り出しています。

皆さんは笑顔で帰る準備をしながら「来月も楽しみにしています。よろしく」とLSAに声をかけてくださいます。



映写会を知らせるポスター
毎回工夫をこらしたポスターが作成されます

さあ片付けです。“出前映画のむ～び～ず”は映写器材を、住民ボランティアと男性LSAは暗幕、スクリーン、畳を、女性は椅子、座布団、ひざ掛け、足置き等を手際よく片付けます。

一切を終えて映写会を支えてくださる皆さんにお礼を申し上げ、LSAは見送りながらつくづく「すばらしい集いの場ができてよかった」と思うのです。

コミュニティサポート育成事業

世代間交流～幼稚園児との定期交流会を実施して～

シルバーハイツひよどり台　LSA　壷井　信二郎

私がLSAとして赴任したのは平成17年の１月17日で、着任してからは前任者よりの引き継ぎに加え入居者の自宅へお元気確認（巡回訪問・安否確認）に追われる日々が続いていた。寒い時期で玄関まで出てきてもらうことも申し訳がない様な季節であったのを良く覚えている。

そこで当住宅について少しふれてみたいと思う。シルバーハイツひよどり台は平成10年入居開始（99世帯129名入居可能）になり今年で９年目を迎える。神戸市北区の『しあわせの村』に隣接しており、気候が良いときは散策に出られる方が見受けられる。しかしながら地域としてみた場合、ひよどり台地区の中心からは離れており、その中心地へ行くにも坂道を上っていかないといけないという環境で利便性を考えると少し不便なように思う。外出される際はシルバーハイツを出てすぐの場所にバス停があり、神戸の中心地へ行かれたり、近隣のスーパーへ買い物に行かれるなどが日常的な生活スタイルである。

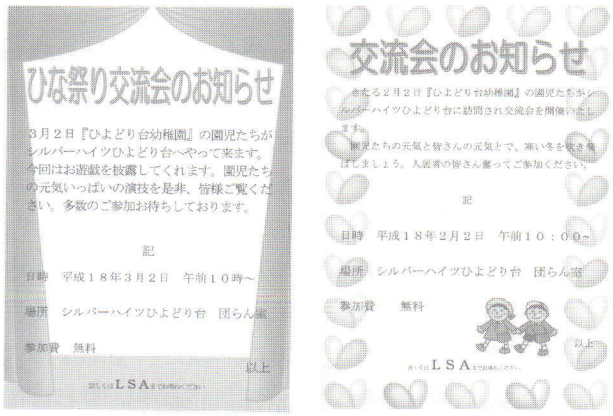
その様な中コミュニケーションというと隣近所との関係はあるものの、上下の階では名前と顔が一致しないということもしばしば見受けられる。何故その様な状況なのかはLSAとしてではなく一個人として自然と感じられると思う。それは阪神・淡路大震災によるコミュニティの喪失を経験されているということである。震災で自宅を無くし仮設住宅での生活を余儀なくされ、仮設住宅からシルバーハイツへ入居されるというわずかな期間で少なくとも２度のコミュニティの喪失を経験されているということになる。震災後、近くの仮設住宅に入られた方は多少負担が少ないように思えるが、自宅のあった場所から遠く離れた仮設住宅での生活を余儀なくされた方は精神的にも負担があったであろうと考えられる。その仮設住宅も期限付きでの生活であり、一時的にコミュニティが形成されたものの仮設住宅の撤去及び復興住宅等への転居で、結果的に２度目の喪失になってしまった。このようなことを基本に考えながら、シルバーハイツひよどり台住宅での現在のコミュニティの状況と新たに立ち上げた『なかよし交流会』について述べていきたい。

まずは、従来から行われているコミュニティサポートグループ育成支援事業は、地区担当民生委員とボランティアグループである『ひまわりグループ』と神戸市シルバーカレッジ卒業生のボランティアグループである『わ』文化部会による催しを月に一度『おたのしみ会』として実施している状況である。内容としては『わ』文化部会による出し物（銭太鼓・マジック・民謡・ハワイアンバンド等）を中心に行い、そのお世話を『ひまわりグループ』が中心に、昼食やお茶菓子を準備していただき、LSAについては、『わ』文化部会との日程調整、会場準備、呼びかけなど側面的な支援を行っている。このおたのしみ会においては、その時その時の内容等により参加率が大きく変わり、特に昼食などがある場合は参加率が高い状況である。その他でも比較的参加率は高いものの参加される方はほとんど同じ入居者で、新しく入居されてきた方の参加率が低いというのが現状である。

その様な状況の中、新しく企画を実施することは容易ではなかった。まず考えたことは入居者の方がどの様なことに興味があるのか、どんなことが楽しみにされているのかを普段から探していた。そんなある日、２歳のある男の子が来ていた時、どの入居者も笑顔で話しかけていることに気づきヒントを得た。そしてこの地域にどの様な社会資源があるのかを探した結果、当住宅のすぐ近くに幼稚園があることが分かった。そこで、地区担当民生委員へ企画内容を伝え実際園児との交流事業を行うにあたりどの様な内容にしていくかを検討し幼稚園へ企画の提案に行った。その際幼稚園側からも地域との交流を深めて行きたいとの話しがあり両方の意見が一致し

たのである。それからは幼稚園と日程調整や園児たちにお土産を用意したらどうかと入居者の皆さんから提案もあり、準備に取り掛かり『交流会』として開催したのである。実際に開催してみると普段行っている行事に参加されない方も多数参加され、入居者間で顔を合わされた時にお互いに声をかけられ自然とコミュニケーションがとられていた。幼稚園バスが到着し園児達も初めは恥ずかしがって、入居者の間に入るまでとは行かなかったものの、次第に入居者とふれあい始め会場は笑い声で溢れあっという間に時間が過ぎた。今回私はコミュニティサポートグループ育成支援事業においてLSAにとってのグループの育成や実績等という事ではなく、ただ単純に入居者がいきいきと暮らせるきっかけを考えただけであった。今回もシルバーハイツと幼稚園を繋ぐきっかけを作っただけであり結果として喜んで頂けただけである。その後、再度幼稚園と今後の継続的な開催に向け調整や話し合いを行い、現在は『なかよし交流会』として隔月で開催し、入居者からは好評を得ている状況で楽しみにしていただいている。

今後LSAが求められていることは、対象となる人に、いかにその人らしさを出してもらいながら楽しんで生活をしてもらえるか、また相談や問題などが発生した時にいかにスムーズに情報提供ができ、且つ相談内容にあった関係機関へ繋げて行けるように援助していくことが必要であると考えられる。個人的な意見ですが初めの一歩というきっかけづくりの提供が大事なのかもしれません。さぁ次はどんなことをしようかなぁと模索中です。



開催チラシ・ポスター

幼稚園児との交流会の様子

コミュニティサポート育成事業

小旅行を企画して　～LSA 奮闘記～

シルバーハイツ舞子山手住宅　LSA　石﨑　優実・戎谷　真里・國分　良政

兵庫県神戸市の西の端、垂水区に市営舞子山手住宅はある。阪神・淡路大震災の復興住宅として、平成10年４月にシルバーハイツ２号棟が、そして約半年遅れて３号棟が入居者を迎えた。その入居者の多くが震災の被災者であり、各地の仮設住宅や他区から転入された方は垂水区という新しい土地で、生活を始めるにあたり、皆それぞれに大きな不安を抱えておられたと思う。今日までに悲しいお別れをした方々、新しく入居された方々、変わらずにお元気な方々を含め、現在は二棟合わせて154世帯、162名が暮らす。平均年齢76歳。そんな入居者の皆さんと共に、私たちLSAの活動も９年目に入った。

２号棟、３号棟とも、それぞれに自治会を立ち上げ、当初の自治会の活動はLSAが振り回されるほどに盛んであった。「みんなで助け合おう」という思いは、それぞれが経験された避難所や仮設住宅での生活で培われたのだろう。自治会がリーダーシップをとり、お茶会やカラオケ、ゴミ当番などが住民主体で行われていた。活動に熱心な人もいれば、全く関心がない人もいるのは、ここシルバーハイツに限った事ではなく、どこの地域でもよくあること。ただ盛り上がりも早かったが、しぼむのも早かった。

社会福祉協議会のコミュニティサポートグループ育成支援事業は、ジリ貧になっていたコミュニティづくりの活性剤となった。住民の皆さんが中心となって発案・計画・実行し、LSAは側面から活動をサポートするのが本来の姿であるが、笛吹けど踊らず。「せっかく貰った助成金、皆のために使わなければ」と結局、LSAが奮闘する事になった。全国から取り寄せた銘菓が食べられるお茶会、演芸会、クリスマス会や年越しそばなどの催しを多数実施。LSAは皆さんの喜ぶ顔を見るため、日々頭を悩ませている。

そして、LSAにとって最大の悩み、住民にとって最大の楽しみが、年に２回、春と秋に実施する「遠足」である。最初は「ちょっと外出して、気分転換」の気持ちで実行した。だんだん参加者が増え、移動距離も長くなり、今では二班に分かれての小旅行になった。この行事の発案者は誰なのかと恨みたい。とにかく準備が大変なのである。

まず、行き先の設定から思案が始まる。第一におもしろくなくてはいけない。中には「一泊旅行したい」と言う旅慣れた方もおられるが、外出が困難になった高齢者に楽しみをというのが基本方針であり、一番体力がないと思われる方に合わせて準備を行う。体力、気力ともに下降ぎみの入居者のことを考えると、車の移動は片道30～40分以内。見学、散策ルートに坂道や階段、段差はないか。昼食の価格、弁当を食べる場所、雨風に影響されないか、土産物を買う所があるかなどをチェックする。そして重要なポイントがトイレ。洋式トイレの数、手すりの有無、車椅子でも出入り可能かなど、実際に現場を下見して全行程を４時間ほどで計画する。団体割引、障害者割引など使えるものは全て使う。毎回、参加料を頂くが、生活の負担にならないようバス運賃ぐらいの金額におさえる。遠足というからには、元気に歩いてもらいたいのだが、「ぎょうさん（たくさん）歩くのはアカンで」と入居者から希望が出される。大人数が移動すれば、その分リスクも高まる。引率者が先導しても、素直に付いて来る人などいない。みなさん元気なのである。気の向くまま、足の向くままに移動し、座る、しゃべる、食べる、聞かない（聞こえない）、興奮する。入居者の皆さんの普段とは違う一面にちょっと驚く。車椅子介助で参加される方も増え、LSAだけでは道中の安全が確保できず、施設職員の応援も不可欠となった。文字通り、手取り足取りの大名旅行である。もちろん、看護師も同行する。当日は、緊張と混乱の連続で、参加する側も引率する側も疲労困憊で一日が終わる。翌日は参加者が体調を崩していないか確認するのもLSAの

大事な仕事だ。

「遠足、どこ行ったの？」と質問されて「どこ行ったか、わからんけど、よう歩いて足がパンパンや」と答えているのを聞くと、高齢者のコミュニティづくりのあり方について、改めて考えさせられる。私たちは、コミュニティづくりをついつい難しく考えてしまいがちだ。生きがいを持ってもらうためだとか、互いに助け合う気持ちを持つためだとか。実は、ワイワイ騒いで、笑って、怒って、感動した、その瞬間に入居者の皆さんがひとつになり、コミュニティづくりの目的が達成されるのではないだろうか。変わり映えのしない毎日にLSAが少しお手伝いをして、皆さんの心が動く、それで十分なのではないか。

「なんか、エエことない？」「どっか、エエとこ、連れてって」そんなエエことを探しながら、コミュニティの輪が広がっていくような気がする。

最後にLSAに協力してくださる関係者の方々、今までに受け入れてくださった施設の皆様にこの場をお借りして心からお礼申し上げます。そしてコミュニティサポートグループ育成支援事業が今後も引き継がれ、シルバーハイツ入居者の皆さんがいつまでもお元気で、楽しく安心して暮らせる基盤となることを強く希望します。

平成１９年度

秋　の　遠　足

平成１９年１０月２４日（水）

舞子山手住宅＿＿号棟＿＿号室
お名前＿＿＿＿＿＿＿＿様

本多聞高齢者介護支援センター
電話078（783）5001

★ 用意いただくもの
① 昼食を取られる方は、昼食代金
② お薬を飲まれている方は、お薬
③ 動きやすい服装とくつ
★ 途中、ケガをしたり、気分が悪くなった方は、すぐに、近くの職員に声をかけて下さい。
職員は青いポロシャツを着ています。
★ 当日、やむをえず欠席される場合はなるべく早く、事務所へお電話下さい
★ 当日は、集合時にお渡しする［バッジ］をつけて下さい

当日のスケジュール

時　間	予　定
１０：３０	出発（時間厳守！） １０時１５分に本多聞高齢者介護支援センター前に集合
１１：３０	イオンモール神戸北到着 自由行動 昼食は、各自でとって下さい
１２：４５	三田プレミアムアウトレットへ移動 記念撮影・自由行動
１３：３０	集合
１４：３０	解散 本多聞高齢者介護支援センター前

秋の遠足のしおり
LSAが作成し、参加者全員に配布します。

秋の遠足のご案内

猛暑をのりこえ、ようやく行楽の秋が到来！
今回は、オープンしたばかりのニュースポットに、皆様をご案内いたします。
兵庫県最大級のショッピングセンター「イオンモール神戸北」とアメリカのロサンジェルス市郊外の高級住宅街をモデルとして建築された「神戸三田プレミアムアウトレット」です。
いずれも、他府県から観光客が殺到している、神戸の新しい観光名所です。この機会に、ぜひ一度ご覧ください。

行き先：　イオンモール神戸北ショッピングセンターと
　　神戸三田プレミアムアウトレット
日　　時：　１０月２４日(水)　または　１０月３１日(水)
　　午前１０時半ごろ～午後３時ごろ
集合場所：　本多聞ケアホーム　事務所前
参加費：　２００円　（申し込み時にお支払い下さい）
☆昼食は、イオンモール店内の各レストランをご利用下さい。
☆申し込み締め切り・・・１０月１２(金)
今回は、参加日を選べませんので、ご了承ください。
受付終了後、参加者各自に出発日をお知らせいたします。

平成１９年秋の遠足申込書

＿＿＿号棟＿＿＿号室
氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

「秋の遠足」の参加者募集のチラシ
シルバーハウジング各住宅に配布し、参加者を募ります。

手をたずさえたコミュニティ支援

シルバーハイツ筒井　LSA　坂本　由紀子

災害復興住宅として平成９～10年に完成した市営筒井住宅575戸のうちの60戸がシルバーハイツ筒井住宅にあたります。従来の施設併設シルバーハウジングとは異なり地域型仮設住宅の実績を生かした単独型シルバー住宅です。

【住宅概要】

（１）位置

灘区に隣接した中央区東端の工場跡地に建てられました。すぐ東隣には総合病院・北側にはスーパーマーケットがあり、阪神・阪急電車の最寄り駅へは徒歩７分と非常に便利な場所にあります。

筒井住宅遠景

（２）住宅戸数・建物・配置

筒井住宅は、１号棟から５号棟まで総世帯数575戸（うちシルバーハウジング60戸・車椅子住宅13戸）の大型復興住宅です。シルバーハイツ筒井は、１号棟203戸のうちの２階から６階にあたります。

（３）入居状況

平成19年10月末の入居世帯数は58戸（単身世帯37戸・高齢者のみの世帯19戸・障害者等若年者と高齢者との世帯２戸）で、入居者数は79名（男性30名・女性49名）です。うち４名は１カ月以上の長期入院中です。平均年齢は73.4歳（男性70.7歳・女性75歳）年代別では、図１の通り60～70歳代の方が多くを占めており、最高齢者は91歳、90歳代は２名おられます。介護保険認定者は、23名（全体の29%）で介護度別割合は、図２の通りです。身体障害者等手帳保持者は、10名（12%）となっていますが、それ以外の多数の入居者の方も高血圧などの持病を抱えています。また中には人工透析・Ｃ型肝炎・癌などの重病を抱えておられる方も多く、健康状態の把握には業務上重点をおいています。

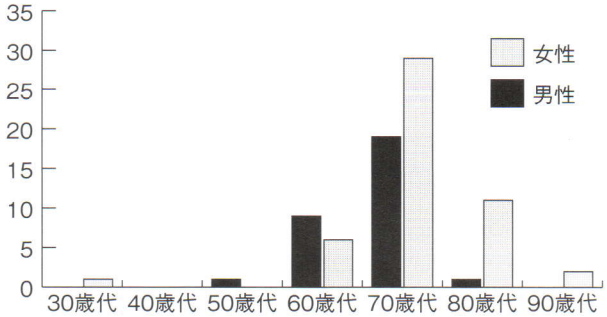


図１　世代別入居者数

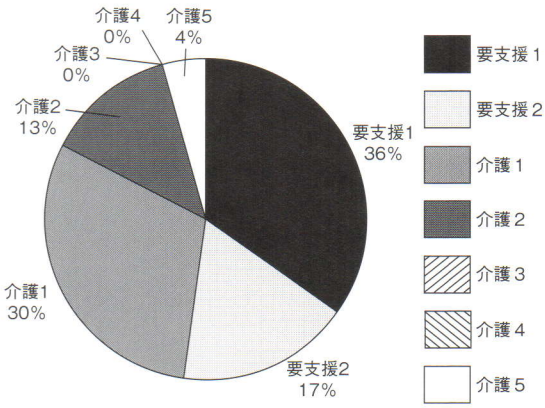


図２　介護保険認定者23名の介護度別割合

【シルバーハイツ筒井のあゆみ】

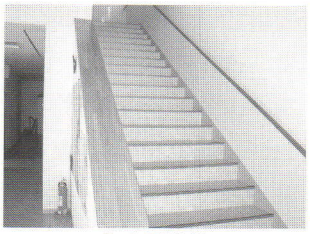
（１）地域の状況

筒井住宅の入居直後から、中央区社会福祉協議会（以下、中央区社協）、在宅介護支援センター、ボランティアの方々の協力で「ウエルカムパーティ」「訪問活動」などの支援活動が行われました。その後、

１号棟から５号棟までの連合自治会や老人会も立ち上がりました。兵庫県からは平成10年度から「復興住宅コミュニティプラザ活動助成金」を受ける事となり、月１回の「茶話会」「さくら祭り」などのコミュニティ活動も盛んに行われました。しかし３年間の助成金が終了すると、ほとんどの活動が継続困難となったのです。その大きな要因として考えられるのは、活動を継続する若い担い手がいないという事が挙げられます。筒井住宅は震災後の早い段階に建ち、優先的に入居が出来たのは当時の高齢者や障害者・母子家庭の世帯でした。そのため８年以上たった現在も、30～50歳代の年齢層が極めて少ないという状況に至ったと考えられます。後継者がいないので現役の自治会役員の大半が60歳以上の高齢者です。その上、役員たちは住民間の苦情処理等をする他に、住宅内の修理依頼も引き受ける管理人をも兼務しているため、最近では「一日も早く交代したい」といった悩みさえ聞かれるようになりました。昨年秋には老人会も会長の施設入居に伴い後任が見つからず解散となりました。また民生委員も適任者がいないために、民生委員筒井地区の会長が代行されています。それと並行して住宅内では、ゴミ出しや騒音などのマナーの悪さ、住民の連帯感の希薄さが目立つようになっていったのでした。

（２）手をたずさえてコミュニティ支援

このような状況の中、筒井住宅に関わっている中央区社協・ボランティアグループ・あんしんすこやかセンター・民生委員・LSAによって「筒井住宅支援者連絡会」が平成13年６月に設立され、月１回の会議で、それぞれの活動報告や問題点などの情報交換を行いました。そんな時、入居当時から月１回の食事会を行ってきたユニベールボランティアより、今後の食事会開催が困難になってきたと問題提起されました。問題は２点ありました。まず１点目は、食事会を行っている集会室が２階にあるため、ADL（日常生活動作）低下の方が階段を上れないため参加者数が激減したことです。２点目は、一人450円の参加費を食材費や会場使用料（半日の使用料金3,000円）に充てていましたが、参加者も減り経費的に立ち行かなくなったとのことでした。これ以上住民の出会いの場をなくしてはいけないと、中央区社協と民生委員の働きかけで、従来のボランティアによる食事会を新たに「ふれあい給食」として申請し、補助金を受けて継続する事となりました。経費に余裕が出たので参加費も350円と安くなりました。ボランティアも今まで以上にメニューや彩り、味付けに工夫を凝らされました。そしてLSAやあんしんすこやかセンターの見守り推進員は、訪問時に食事会への参加呼びかけをしました。今では、11～12名だった参加者が収容人数一杯の40名にもなりました。お食事を温かいうちに提供できる家庭的なところが男性高齢者の評判になり、以前１～２名しかいなかった男性参加者が10名にもなりました。また、中央区社協を通じて神戸市住宅供給公社に、集会所（２階）への昇降機やエレベーターなどの設置や改善策を検討していただきましたが、残念ながら階段の幅が狭くスペースもない事から構造的に困難との回答でした。


集会所階段

食事会・５月のメニューは「オムライス」

食事会・みんなで食べるとおいしいね

【コミュニティサポートグループ育成支援事業】

（１）黒子から仕掛け人へ

平成16年度下半期からシルバーハウジング入居者の結び付きや支え合いを深め、住民が安心していきいきと暮らせる環境づくりと、効率的にLSAの活動が展開できるように「コミュニティサポートグループ育成支援事業」が開始されました。それまでのLSAのコミュニティワークは、自治会・ボランティアなどの活動を陰で支えるといった黒子的な活

動が主でしたが、この事業が開始された事で、LSAは「交流の場づくりの仕掛け人」というような積極的な役割を担えるようになりました。そこで助成金５万円を最大限利用しようと、シルバーハウジングの入居者だけでなく筒井住宅全体を対象として、多様な交流会を計画・実行しました。火災予防や悪質商法の「勉強会」、会話を楽しむ「茶話会」、世代間交流の「みんなで楽しくつくろう会」、住民の作品を集めた「ミニ展覧会」などです。「みんなで楽しくつくろう会」は、工作をしながら世代間交流も目的としていて、住宅の小学生も参加しています。小学生のみんなには、夏休みの宿題になると好評で、参加者の中には、孫を呼び寄せ一緒に参加している方も見られます。子供たちとふれあうことが楽しいと工作は苦手だと言いながら参加される方もいらっしゃいます。

初めは、LSAとあんしんすこやかセンターの見守り推進員の協力だけで行っていましたが、徐々に参加者の中から一人二人と会場設営など手伝ってくださる方が現れました。また「こんな集まりがあったらいいのに」の声も聞かれるようになり平成16年度は「絵手紙クラブつつい」が、また平成17年度には、ふれあい喫茶を行う「虹の会」がコミュニティサポートグループとして立ち上がりました。

筒井ミニ文化祭の様子

（２）ミニ展覧会からミニ文化祭へ　～「絵手紙クラブつつい」の立ち上げ～

交流事業を行っている集会所へは階段を使わないと行けません。参加の前にこの階段が大きなハードルとなり参加したくても出来ないという状況が起こっています。以前はよく行事に参加されていた93歳のＴさんがADL低下でベッド生活となりました。出会いの機会は無くしたものの絵を描くことを唯一の楽しみに暮らしておられると聞き、ふれあい給食に合わせて作品のミニ展覧会を企画しました。その後展覧会に参加できないＴさんに、展覧会の写真をお見せしましたところ、Ｔさん以上に介護しているご家族に大変喜ばれました。実は「寝たきり」イコール「認知症」と誤解したご近所の方から火事が怖いからとＴさんの好きなタバコを取り上げるように再三家族やLSAに苦情が届いていたのですが、展覧会のＴさんの絵を住民のみなさんに見ていただいたことで誤解が解けたと喜ばれたのです。

「ミニ展覧会」は年々作品を出品してくださる方が増え、現在「筒井ミニ文化祭」と名前も変わり規模も大きくなりました。そこに毎回出展する事を楽しみにしている男性がもう一人おられます。その方は今でこそ「次の文化祭はこんな作品にしようと思ってるねん」と、気軽にLSAへ話しかけてくださるようになりましたが、数年前までは完全な訪問拒否の方だったのです。

Ｓさんと初めて会ったのは、５年前私がLSAとしての引き継ぎ業務で前任者の元へ伺った日の事でした。ご本人から希望がありヘルパーをお願いするために介護申請をしたいという内容だったようで、それに対する意見を前任者に求められたのです。私も前任者と同じ意見でしたので「お元気そうにお見受けしますので、認定が下りずに介護保険でのヘルパー利用は難しくなると思いますよ」とお返事をしたのですが、Ｓさんは顔色を変え「お前らじゃ話にならんわ！」と声を荒らげて部屋を出て行ってしまわれたのでした。その後引き継ぎも終え、訪問活動を始めたのでしたがＳさんのお部屋にお伺いしても応答すらいただけず、電話も声を聞くと同時にガチャンと切られる始末。「あぁ、やはりあの時、私の言葉が足らなかったのか…」と反省しながらも毎回不在票（LSAが訪問したことをお知らせする手紙）を入れ続けていたのでした。２年程そういった状況が続いたある日、Ｓさんの部屋から突然非常発報があり、健康状況も当時は把握できずにいた私は慌てて駆けつけたのですがやはり応答がありません。緊急解錠キーで室内へ入ったのですがそこで掃除中の姿を見て、誤報だと分かりホッとしたのでし

た。そして、ふと机の上にあった描きかけの浮世絵に目がとまりました。鉛筆で描かれた細かいタッチに驚きを隠せずお聞きしたところご本人が描かれたとのこと。その日から絵を通じての会話が始まり、長かった訪問拒否が終わりを告げたのでした。絵について色々とお話をしている中で文化祭に出してみてはいかがかと勧めたところ、渋々ながらも了解をいただけたのでした。文化際終了後Ｓさんの作品への住民の評価は高く、Ｓさん自身も作品を発表する場を得た事でやりがいを見出されたようで、その後も続いて出展していただける事になったのでした。

色鉛筆の浮世絵

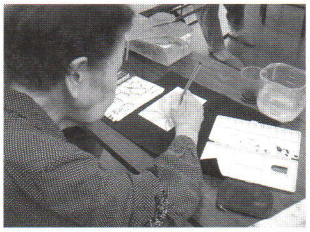
水彩による美人画

文化祭も回数を重ねるごとに画材も鉛筆から色鉛筆に、そして現在では絵の具へと変わり、題材になるものを探しに外出もされているそうです。Ｓさんの作品を楽しみにしてくださる住民が増えるたびに、作風も変化を見せ、少し表情のきつかった美人画も徐々に優しさや丸みを帯び始めたのでした。

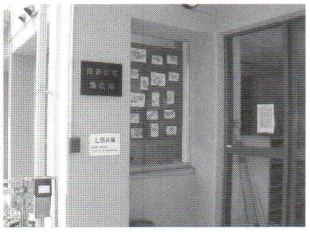
対人関係の苦手な方や身体機能の低下で参加の出来ない方も、作品を展示することで、間接的な参加ができる交流の場となりました。はじめはLSAと地域の見守り推進員の協力で行っていた交流事業ですが、参加者の中で一人二人と会場設営などを手伝ってくださる方が現れました。また「絵手紙を習いたい」といった声も聞かれるようになりました。

平成16年度には、ミニ展覧会、ミニ文化祭がきっかけとなり「絵手紙クラブつつい」がコミュニティサポートグループとして立ち上がりました。月１回集まって市民講師の指導で絵手紙を製作しています。会の終わりは、それぞれの作品を批評し合ったり、出来た作品を集会所に展示しています。趣味の会なのでなかなか人数は増えませんが、最近は男性が入会し、とても楽しいと話されています。

喫茶の合間にみんなで詩の朗読

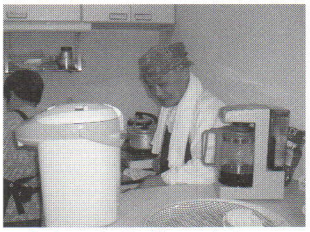

絵手紙クラブ･今月の画題は「ヤツデ」

絵手紙クラブ・今日の作品のできあがりを発表


絵手紙クラブ・集会所玄関に作品を展示

（３）ふれあい喫茶　虹の会の立ち上げ

平成17年に立ち上がったのは「ふれあい喫茶　虹の会」です。虹の会の会員７名が、それぞれ自分の特性を生かし、受付・会計係・ウエーター・テーブルのお花のセッティング係・茶菓子の盛り付け係・飲み物係など役割分担されています。


ふれあい喫茶「虹の会」・マスター？

ふれあい喫茶の様子　コーヒーを運ぶウエイターさん

入居者のＫさんは、歩行が困難でほとんど外出されない方でしたが、ミニ文化祭に写真の作品を出展されたことがきっかけで、パソコンを使ったお手伝いをお願いするようになりました。Ｋさんは喫茶での実働は出来ませんが、今では「虹の会」のメンバーとしてふれあい喫茶をお知らせするポスターを作成するという大切な役割を担当されています。最近は少しでもいいポスターを作りたいと、インターネットを活用したり、外出のための電動車いすも積極的に稼働させ、毎月一度の交流事業の参加者に写真入りカレンダーをプレゼントするなど活動の幅を広げておられます。先日Ｋさんにお会いすると「スーパーへ買い物に行ったら、初めて会う人からいつも

きれいなカレンダーをありがとうと声をかけられ嬉しかった」と笑顔の報告がありました。お体が不自由な方は、誰かに何かしてもらうばかりと思われがちですが、こうして特技を生かして人の役に立とうとされています。想像しなかった展開にLSAも大いに感銘を受けました。

ミニ文化祭・手作り看板

Kさんのポスターづくりの様子（自宅）

Kさんだけでなく入居者のYさんのように、交流事業の下足番を買って出られ、危険な階段の上り下りのエスコートをされるなどの住民同士の支えあいも生まれ始めました。

下足番をするYさん

階段をエスコートするYさん

【終わりに】

介護予防や自立支援と聞くと、筋力向上の体操や栄養指導・認知症予防などをまず考えがちですが、今まで行ってきた交流事業の中で学んだことは次のことです。

まずは、何でも良いからお好きな行事に参加していただくことです。参加することが楽しみや生きがいに繋がります。またその後立ち上がったグループに参加された方は、役割を持たれることで人の役に立つ実感や感謝の言葉を受けて自信をもたれるようになります。

多様な交流行事は、多くのコミュニティの輪を生みます。そしてそれは、参加者がいきいきと暮らす介護予防につながり、多くのコミュニティの輪は、支えあいという自立支援に結び付きます。

住民と試行錯誤しながら行っている交流行事ですが、想像以上の成果だと思います。今後は住民と共に安心していきいきと暮らせる環境づくりを目指して立ち上がったグループ活動の火を絶やさぬように活動していきたいと思います。

入居者の声

ひとつ屋根の下で　神戸片山コレクティブの10年

神戸片山コレクティブ住宅　会長　近江　弘子

私たちが住む神戸片山コレクティブ住宅は、平成９年８月、長田神社を西下に見る小高い坂の上に、日本で初めての公営のコレクティブハウス（協同居住型住宅）として誕生しました。そして私はこの住宅で会長を務めることになりました。

多くの市民は震災で仮設住宅での生活を余儀なくされました。私も被災した市民の一人でした。復旧工事が始まり、新しい住宅も建ち始めました。そんな時、近くに住む孫からこの住宅のことを聞き、ひとつ屋根の下で他人同士がお互い助け合って暮らしていくのもいいかなと思い入居しました。また、私の心の中の復興への挑戦をこの協同生活に託したのです。６名それぞれが別々に力強く力一杯生き抜いてきた半生、その半生を心の奥にそっと仕舞い込んで新しい気持ちで、新しい生活が始まりました。60代から80代と年齢にも差があったので、はじめはお父さん役、お母さん役、長女、次女、三女、長男と役を決め、お母ちゃん、お姉ちゃんと呼び合いました。家族のように暮らせたらと役を決めましたが、その「役」が取れるまでにはそんなに日数はかかりませんでした。すぐに本当の家族そのものが誕生しました。建物本体の「木のぬくもり」、生活を通しての「心のぬくもり」がそこにはありました。「６名に決め事はいらない」それが私のモットーでした。

この十年間を振り返って６名にとっての一番の思い出は、秋篠宮殿下ご夫妻にお越しいただいたことです。紀子様から欧米のコレクティブハウスと比較されたご質問があり、“日本で最初のコレクティブを何としても成功させてください”とのお言葉をいただきました。その「お優しさ」に応えなければと思いました。

会長として今思うと、相互の見守りやコミュニティづくりでは24時間気の休まるところのなかった10年でしたが、「近江さんだがら安心できる」とか、「近江さんに最期を看取って欲しい」などいろいろな感謝の言葉をいただくと、その疲れも吹っ飛ぶような気がします。これからの生活の中で、私もこの神戸市長田区に、また神戸片山コレクティブ住宅に、そして全てのことに対して「ありがとう」の感謝のこころで接していきたいと気持ちを新たにしております。

高台に建つ片山コレクティブハウジング外観の様子

周囲には戸建ての住宅が建ち並ぶ。庭には草花を育て、木造で街並みにマッチしている。

住宅の共同スペースで行う食事会での余興の様子
演じているのは入居者と会長

入居者の声

コレクティブでの暮らし

神戸大倉山住宅コレクティブハウジング
代表　岩崎　洋三

私たちが住む大倉山コレクティブハウジングは、全戸数32戸。神戸市中央区の復興住宅「県営神戸大倉山高層住宅」510戸の中にあります。１フロアに８戸。１階から４階部分がコレクティブ住宅になっています。１フロアごとに協同室があり、同じフロアの入居者やその家族、友達などが集える場になっています。ベランダには仕切りがなく一続きになっています。

私は、入居当初から代表を任され、自分に何が出来るのか、どうすれば入居者同士のコミュニケーションが図れるのか考えました。目標は２年間で住民同士の和ができること。とにかく協同室を活用しいろいろな行事をしました。食事会、カラオケ会、誕生会、季節の催しなど。食事会では男性の入居者が腕をふるったことも度々でした。また、「大倉山コレクティブボランティア」を結成し、事業を分担し、一人一人が責任をもって実施することができるようになりました。初めは活気もあったのですが、年齢を重ねるごとに（年のせいにはしたくないのですが）気力、体力が落ち、活気がなくなってしまいました。「これではいかん！！」という気持ちはあるのですが・・・。

「安心して、安全に暮らせる住宅」これが今の私の会長としての目標です。具体的には何をどうすることなのか考えてしまうこともありますが・・・。

現在までに多くの方がコレクティブ住宅の見学や取材に来ています。日本中からはもとより、外国からも来ます。日本の取材陣は建物（ハード面）についての質問が多いのに対して、外国からの取材は住民同士のこと（ソフト面）の取材が多いのが特徴です。例えば「今ここに住んでいて幸せですか」とか「前の住まいとどう違いますか。友達はいますか」など。それに対して入居者は「終の住処にしたいと思っている」という回答が出され、会長としてはうれしい限りです。

以前こんなことがありました。お一人暮らしで身寄りがないと聞いていた入居者がお亡くなりになり、行政も親族がいないか捜してくれましたが結果は分からないとの返事でした。しかし、会長として、また一入居者として今まで家族のように同じ住宅で過ごした入居者が誰にも見送られず逝ってしまうのは寂しすぎると思い、独自で色々とあたり、親族を捜すことができ、会っていただくことができました。親族の方にも喜んでもらえたとき、本当に良かったと思いました。

コレクティブハウジングの「ハウジング」は、「住まい方」だと思います。色々な工夫によって変化していく。それがコレクティブハウジングの良いところです。

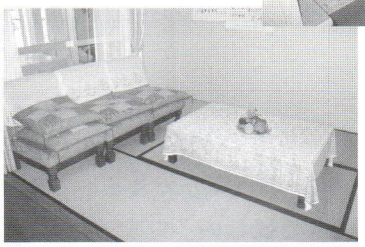
〈私が思う入居者同士が穏やかに過ごす秘訣〉

一歩引き下がって物事を考えることの大切さ。 優しさは一歩前に出していく大切さ。 人に押しつけることなく、出来る人がするということ。	＝	隣人愛、思いやり

入居から10年以上たち、入居者も高齢になってきましたが、お互い助け合い、見守り合い、集い、LSA の応援も受け入れ、コレクティブだから出来ること、今できることを無理せずに行っていきたいです。

協同室の様子
各階毎に設けられ、入居者が集える場となっている

協同室　台所の様子
喫茶や食事会ができるよう調理機器や食器が備え付けられている



協同室　和室の様子
入居者で管理し、きれいに整えられている

シルバーハイツでの安心した暮らし

シルバーハイツフレール浜山
フレール浜山自治会　副会長　梅谷　香苗

12年前、阪神・淡路大震災に見舞われ、慌ただしく転居先を探している頃、市の広報誌に災害整地跡に高齢者対策の市営住宅（一般住宅とシルバーハイツの混合住宅）の入居募集を知り、申し込んだところ幸い入居が決まり、急ぎ引っ越して来たことが思い出されます。

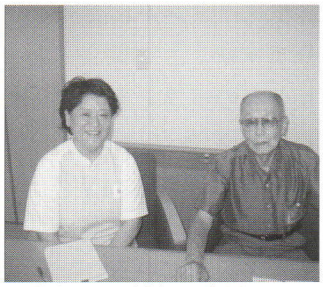
当時の神戸市内の復旧工事は、全国からの温かい応援活動により目覚ましく進行していました。区画整備によって道路、交通、住宅が次々と急ピッチに完成されました。交通の要となる地下鉄海岸線（三宮・花時計前－新長田間）が新設開通され、在来線（山手線）に接続し乗り継ぎができ、近郊の方や沿線の方々にとってたいへん交通の便がよくなり、とても嬉しく喜んでおられます。

私達が住む市営住宅「フレール浜山」は10階建て。１階から３階部分は特別養護老人ホーム「花みさき」・デイサービスセンター・浜山高齢者介護支援センターがあり、同時期にオープンされました。４階から10階は42世帯が暮らす住宅になっており、内28世帯がシルバーハイツ、14世帯が一般住宅です。施設とは別玄関になっており、階段と直通エレベーターで各階ごとに止まり出入りができます。また、部屋の中は高齢者の安全な生活を守るためにバリアフリー（段差なし、手すり設置）・緊急通報システム（各部屋に取り付けられた非常釦）・生活援助員（LSA）による支援があり配慮されています。建物の周辺は地下鉄の駅やバス停も徒歩３分と近く、銀行、郵便局、病院、学校、スーパー、商店街、ホームズスタジアム（サッカー場・スポーツ施設完備）、公園があり、地域の皆さんの散歩姿が見られ恵まれた環境に感謝しています。毎月LSAだよりが掲示板に張り出され、シルバーハイツの入居者、一般住宅の住民、地域の方々に健康教室や給食会、映画鑑賞会等の催しを開いて常にコミュニケーションを図り、介護される方の負担を軽くできるよう心の通った福祉サービスを提供されています。

フレール浜山自治会も毎月１回集会所でカラオケ交流会、ふれあい喫茶を主催し、LSAの応援をいただき、入居者、地域の方々誘い合って談笑の一刻を楽しく過ごしています。皆さん毎月心待ちにされています。

私も80歳過ぎの今日、毎月２回５年来定期的に病院に通院診察を受け、朝夕薬を服用しつつ、自治会役員を受け、建物内外の保全管理や友愛ボランティア活動に努めております。ひとり暮らしの高齢者の安否の確認や話し相手、相談、電話連絡や訪問を密にして少しでも寂しさを和らげるよう努力し、明るく穏やかに接しています。入居者の皆さんとエレベーターの中や郊外で出会った時はお互いに挨拶を交わしております。年々高齢化社会が進む昨今、高齢者を守るのは基本的には国であり市でありますが、私達身近なものも三位一体となり、手と手を握り合って美しい平和な日本を創りましょう！

梅谷さんの自宅玄関の様子
床は段差がなく、壁には手すりが付いています



梅谷さん（右）と市川LSA

梅谷さんが住むフレール浜山住宅

トイレの中の様子
縦と横方向の手すりが付いています
壁には緊急通報できる非常釦が付いています

東灘区

自分らしい暮らし方

シルバーハイツ六甲アイランド
LSA　佐藤　厚子

いつも元気に活動されているＫさんに「この住宅の良いところはどんなところですか」と聞いてみた。すると「それならいっぱいあるわ」とすかさず返事が戻ってきた。

“この住宅に入った時、自分はまだ60歳前だったわ。部屋に手すりが付いている事、段差が無いこと、緊急通報システムが有ることなどにとても驚いて、「こんな良いところに入れてもらえるなんて…」と主人と喜んだのよ。こんな有難い事は無いと感謝の気持ちでいっぱいだったわ。”“入居後すぐに住宅の1階部分にある特別養護老人ホーム協同の苑六甲アイランドに行って「私に何か出来ることはありますか？」と聞きに行ったのよ”。そしてこれがＫさんのボランティア活動の始まりだそうだ。

このＫさん、ボランティア活動は当施設だけでなく地域の福祉センターや病院でも活動されており、特に病院でのボランティア活動は30年前からと年季が入っている。

ホストファミリーの有料ボランティアをしているＯさんは今年85歳になる。

82歳の時仕事を探すためシルバー人材センターに行ったが、高齢のため断られた。しかしＯさんはそれに納得がいかず担当者と喧嘩して帰って来た。その後Ｏさんの思いが担当者に通じたのか、ホストファミリーの仕事を紹介してもらった。

高齢でもこんな仕事ができるんだと新聞にも載せてもらった。

「歳やから２人しか面倒みられへんけど」とまかないで鍛えた腕前で食事のお世話もしているそうだ。

この住宅がある六甲アイランドは、民間企業が主体となり開発、街づくりを行っている経緯があり、住民のつながりやコミュニケーションも盛んである。

街にはホテル、映画館、美術館、図書館などがあり、自転車で行ける距離にある。

地域福祉センターでは多くのサークル活動があり、シルバーハイツからもフラダンスやウクレレ、カラオケ、グラウンドゴルフなどに参加されているようだ。

毎週どこかで催しがあり、わずかな参加費でコンサートも楽しめたり、なかなか観ることができない能の鑑賞などもできる。

ボランティア活動やサークル活動に生き甲斐を感じている方や本の好きなご夫婦などは図書館通いを楽しみにされている。

それぞれが自分らしい暮らし方を見つけて生活されている。

入居者のみなさんのコミュニティ活動のひととき

自治会長を応援しながら

神戸魚崎南住宅
LSA　生和　房雄

平成18年の春、震災復興自治会長に推された75歳の男性。特に用事もないのでしょうが、毎日のようにLSA室へ顔を出し、お茶を飲んで雑談をして帰る。さりげなく、LSAのお元気確認をしていただいているようだ。

そんな新会長にLSAからコミュニティサポート事業の提案をすると、初めは傍観的立場で居られたが、その後は自治会として賛同と後押し的な発言となったものでした。

「映画会」からスタートをしてシルバーハイツの入居者だけでなく、住宅全体に呼びかけて楽しくなるような「お笑いもの」の上映をした。その後は、住民や自治会役員もLSAの活動に好意的となった。コミュニティサポート事業も回数を重ね「あんしんすこやかセンター（地域包括支援センター）」と共催することで、見守り推進員とも顔なじみになり、健康体操教室や栄養（食事作りの工夫などの）説明会、認知症講座など次々行えるようになった。

とはいえ　大世帯の自治会活動すべてが順調に行えているのではなく、人間関係のトラブルなどは永遠の課題で会長などの悩みを聞くのは止まない。

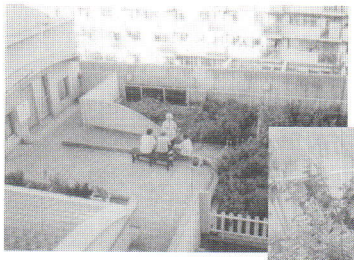
自治会長を側面的に応援しながら、LSAは、中立的立場で今も自治会が平穏な生活の場所となるように願い続けます。

屋上は、井戸端会議場

シルバーハイツ北青木
LSA　的場　美隆

この住宅の3階集会所横には、約80坪程の菜園があり、畳1帖から3帖位の大きさに区画されている。シルバーハイツおよび一般住宅（混合住宅）の住民の方が、自治会に水道代として年間1200円を支払って借りている。季節の花・野菜を栽培され、今は、キュウリ、トマト、ナス、ミョウガもあり、ホウズキも色づき始めている。お互いの出来ばえを話し合ったりして、楽しんでおられる。菜園を使用されていない方も話に参加され、夕方（時間帯にもよるが）、その場所がまるで昔の井戸端会議の場のような風景を見ることができる。

出来た野菜や花を分け合っておられることもある。街のビルの中で作物を栽培する。小さな自然環境がここの住宅にはある。栽培で土をいじり、草取りをすることで、指先を動かし、一種の脳トレ運動にもなる。健康にも良いのでは…。私も田舎育ちで懐かしく、時々話の仲間に入れてもらう。



夕方の井戸端会議の様子

お花がきれいに咲き、
野菜もたくさん実りました

健康で安心できる生活を願って

シルバーハイツフレール魚崎中町
LSA　佐藤　恒夫

私たちのシルバーハウジング　フレール魚崎中町は、阪神電鉄魚崎駅の北東約400mのところに位置し、特別養護老人ホームサンライフ魚崎、魚崎高齢者介護支援センターと一体となった地下1階、地上4階建ての3階と4階にグループホームと、棟を分けて平成12年4月に開設されました。杜の中にある魚崎小学校と魚崎幼稚園にそれぞれ東と南で面し、毎日子供さんたちの元気な歌声や小鳥のさえずりが聞こえる閑静な住宅街で、9世帯13名が入居されています。

平均年齢が比較的若く、ご入居当初は、要介護者ではないという意識からか、施設利用者様に対する苦情などが時々起きていました。しかし、入居者の中には急に体調を悪くして救急搬送されたり、施設の看護師による応急対応などを受ける中で、シルバーハウジングの良さをご理解いただいたのでしょうか、今では皆さんがLSAや施設職員に気軽に挨拶をしてくださるようになりました。

いつでもお互いに助け合い、健康で安心できる生活をと願っています。

灘　区

あったかい住宅、あったかい入居者

シルバーハイツ大石東
LSA　岡田　章代

シルバーハイツ大石東住宅は、10階建ての市営住宅の3階、4階部分の31世帯となります。1、2階は特別養護老人ホーム、LSA室は1階にあります。

私はLSAになって3年になりますが、今までの関わりの中で印象に残っていることは、住民間の見守りの素晴らしさです。

入居者Sさんが体調不良となり、次第に認知症と思われる症状が表れ、ちょっとした問題行動が見られるようになりました。Sさんと親しい住民は、惣菜などを買ってきて一緒に食事をしてくれたり、近所の住民からも、LSAに「Sさん大丈夫か？」という問い合わせが度々ありました。

また、身寄りのないに等しい入居者Mさんが、ガンで急遽入院した時、何名かの住民の方が交代でMさんの身の回りの世話をしてくださいました。LSAとも毎日連絡を取り合いながら、最後までMさんのために頑張られました。

さらに、軽い認知症の入居者の家を頻繁に訪ね、服薬確認をしてくださる方もおられます。他にも、近隣の入居者の方の、普段と違う様子を察知し、すぐにLSAに報告をいただくことがよくあります。

“見ていないようで、みんな見ている”それは、LSAとして本当に有り難いことだと実感する毎日です。またコミュニティサポート事業を実施し始めてから、自治会長さんがよく連絡をくれるなど、いろいろと協力してくださいます。今後の課題も多く残っていますが、このように温かい住宅なので、LSAとして心を込めた見守り活動を行っていかなければいけないといつも感じています。

言わせ上手、聞き上手な人…ハルさん

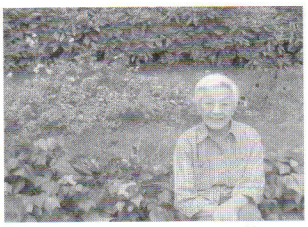
シルバーハイツ灘北
LSA　中塚　美代子・今西　純

～ハルさんのコメント～

朝は早起きし、毎日規則正しい生活を送る。

自分のためになるニュースや新聞を見たり、足踏みや手足を伸ばすといった簡単な体操を心がけて行う。

なんと言っても、年をとって家の中にいてはいけない！！外に出て外の空気をたくさん吸って、ベンチに腰をかけているだけで十分！！そうしていると、みんなが寄ってきてくれて話をすることができる。

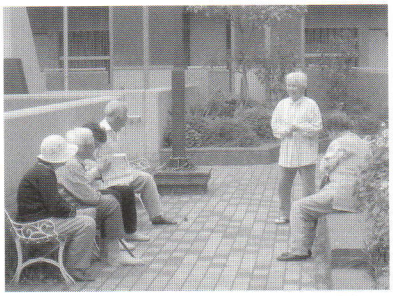


ハルさんと花壇のお花

お花が大好きなハルさんは、日課として決まった時間になると住宅の中庭ベンチに腰をかける。するとハルさんの姿を見かけた住民さんが集まってきて井戸端会議が始まります。

～ハルさんの口癖にしている言葉～

人の悪口を言って、人に後ろ指を差されることをしてはいけない。



住宅内のベンチにて井戸端会議の様子

人の性格は、クレヨンのようなものでいろいろな色がある。赤色の人は赤色の人に合わせたものの言い方をする。黄色の人には黄色の人に合わせたものの言い方をする。

「ほぉ～それからどうしたの？」と聞き、「言わせ上手、聞き上手」になることだ！！

ハルさんは、言わせ上手、聞き上手のため、いつも井戸端会議の中心になってみんなの話を聞いている。

神戸らしい雰囲気のある住宅

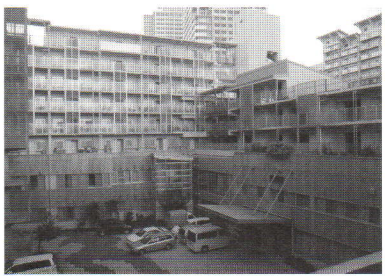
神戸岩屋北町住宅
LSA　清水　英子

住宅北側にＪＲ灘駅・南側に阪神岩屋駅があり、どちらも徒歩５分位。バスもＨＡＴ神戸やＪＲ六甲道、灘区役所前まで乗り換えなしで行ける交通の便の良い所です。駅から近い割に住宅内は静かで、中庭は良く手入れされ、住宅内通路・廊下・階段などは清掃が定期的に行われますが、自主的に清掃をされている方もおられるため、いつも奇麗です。

大きな病院・医院が近くにあり、近隣の医院は在宅医療に力を入れており、往診も頼みやすい下町っぽい気さくな雰囲気があります。自治会と学生ボランティアの協力で、夏まつり・クリスマス会などの行事があり、地域住民と住宅住民の交流も大切にしています。また、住宅住民ボランティアによるモーニング喫茶も行われており、コミュニティづくりにも力を入れています。少し昔の神戸らしい雰囲気のある住宅です。

意欲満々の入居者とともに

ＨＡＴ神戸灘の浜市営住宅
LSA　柏原　静津子



うちの住宅は、男性44名、女性76名の97世帯、平均年齢75歳のシルバーハウジングです。震災後の復興住宅で、周辺には市営住宅・県営住宅・公団住宅・分譲マンションが立ち並び、買い物や通院、保育所や小中学校もあり、交通の便もよく生活環境に恵まれた所です。

LSA主催の交流会では、住民自らが案内文をパソコンを使って作成したり、お茶出しを進んでしてくださる。「やれることは自分たちでしないと」と意欲満々！！です。また、ある方は「受付したらみんなの顔が覚えられるわねぇ」とか。

震災を乗り越えた人たちですから、少々のトラブルがあっても大丈夫。皆さんには、これからの人生もここで楽しく過ごしていただきたいと願っています。

今度、住民からの発案で、閉じこもりがちの方も招いて「心のコミュニケーション談笑会」を開催する予定です。この先、どんな住宅になっていくのか、とても楽しみでドキドキワクワクしています。

交流会「体操と手話」を行っているメンバーの皆さん

自慢の行事「ＨＡＴ劇場」

ＨＡＴ神戸灘の浜県営住宅
LSA　井上　かすみ

ＨＡＴ神戸灘の浜住宅はＪＲ灘駅・阪神岩屋駅から浜側に歩いて10分程の所にあります。平成10年４月のオープンから９年の歳月が過ぎ、多くの住民参加によるさまざまな行事が活発に運営されています。平成16年より「閉じこもり予防・住民の自立支援」を目標としてコミュニティサポートグループ育成支援事業が始まり、LSAとして地域の交流を深めたいと思い、映画会を始めました。

LSAは、準備段階から暗幕のことや人数のこと

で悩んでいましたが、住民の方に相談すると「暗幕を手作りしよう」と言ってくださり、黒いゴミ袋を継ぎ合わせ、それにフックを付けて立派なものができ上がりました。作ってくださったのは80歳のシルバーハウジング入居の方で、他の分野でのお手伝いも多くはシルバーハウジング入居の方々です。人数の方も、最初は16名の参加でしたが、現在では40～50名。他の地域からの参加もありとても好評です。

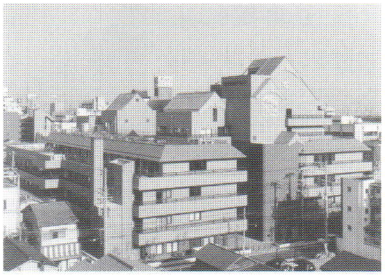
地域住民の知恵と努力で継続している映画会「ＨＡＴ劇場」は自慢の行事の一つです。

サクラ

中央区

かがやく助け合いの心がうちの住宅自慢

シルバーハイツ日暮
LSA　石橋　公子



シルバーハイツ日暮は、施設の上階５階、６階部分に20戸ある住宅で、うち現在19戸26名の入居者があります。施設の上にあるということから施設職員と入居者の関わりも身近にあり、お出会いや施設来所時には声かけ挨拶等をしています。少ない人数ながら、ごみ収集日には、早朝から自治会役員が仕分けや清掃、古紙回収等をして入居者同士の助け合いもあります。

地域の行事に参加することはまだまだ難しいですが、住宅の中で実施するコミュニティ事業への参加者は半数近くあります。また、ほとんどの入居者は週１、２回通院していて、自分の体調を維持しています。

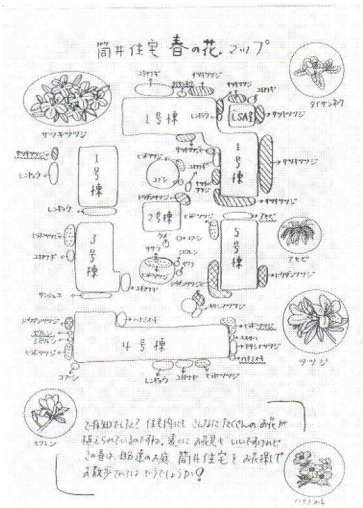
ある夫婦は午前中毎日二人一緒に散歩をされています。今日は山側、今日は海側とコースを変え、季節の移り変わりを満喫されています。お互いに病気もあるので、支え合い助け合わなければいけないからと家事も二人で分担されています。訪問時には、“今日は桜がきれいだったよ”“海がキラキラとしてとび魚もいたよ”といつも変わりないお元気な声で話していただき、神戸の穏やかな様子を伝え聞くことで私の顔もほころびます。明日は私も歩いてみようと、元気になります。

緑のパワーでいきいきと

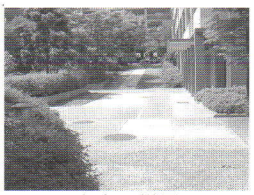
シルバーハイツ筒井
LSA　坂本　由紀子

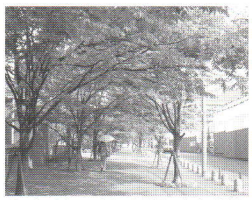
シルバーハイツ筒井のある市営筒井住宅は、平成10年に準工場地帯の工場跡地に建てられました。そういった環境への配慮でしょうか、建物もモダンなデザインになっていますが、何より植えられている

木々の種類が多く、木蓮・桜・サツキ・紫陽花・紅葉と四季折々の花の美しさが感じられるようになっています。他の団地などでは見られないような珍しい樹木も多くあります。桐の花やヤマモモなどは、私もこちらに来て初めて目に致しました。自治会が中庭にゴミ箱を設置し、通路の幅を広くしてくださったのでゴミも減り、車椅子の方も安心して散歩ができます。



筒井住宅　春の花マップ


中庭の様子


住宅前の並木道（歩道）の様子

【筒井住宅　春の花マップ】は、少しでも多くの方に花を楽しみながら散歩して頂けるよう、LSA新聞で紹介したものです。写真の並木は、夏は木陰となり秋は紅葉が美しく、そぞろ歩きに最適です。もう一枚の写真は、緑に囲まれた住宅入り口のひとつで、私のお気に入りの場所です。年々樹木も大きくなり、入居している方々も窓から見えるこの緑に、心癒され元気になると話されています。そして住民の中には、運動になるからと積極的に植木の手入れや花壇作りに励んでいる方も居られます。こんな緑のパワー溢れる筒井住宅の庭、一度ご覧になりませんか？

笑いあふれる住宅を目指して

神戸南本町住宅
LSA　川上　栄子

1号棟シルバーハウジング36戸、一般住宅12戸、2号棟コレクティブハウジング27戸の住宅です。

テレビを観るのも1人、食事も1人の生活パターンの中で、楽しい気分になってもらえたらと思い、コミュニティ事業として2カ月に1回映画会を開催しています。少しでも笑いのある生活をしていただけたらと思い、住民のみなさんの笑顔を思い浮かべて、悩みながら内容を考えています。

「男はつらいよ『寅次郎と殿様』」を上映した時、ある住民さんが「若かった頃、働いていた地域が出てきて、仲間と過ごした当時が思い出され、懐かしく、なかなか寝付かれなかった」と感慨深そうに話されていました。

また住宅敷地内の植木剪定は自治会長がボランティアで行い、いつもきれいに整えられています。足腰が弱くなった方は、遠くに行くことが難しいのではないでしょうか。そんな時、この住宅では散歩コースとして緑豊かな木々、花を眺めながらリハビリをしています。

入居者のみなさんに映画会の開催を呼びかけるチラシ

よく手入れされた住宅敷地内の植木や花壇の様子

楽しいことがある毎日

神戸大倉山住宅
LSA　田村雄吉・朝日治子・平井ひろみ・玉田和子

さわやかな朝。

「おはようございます」とLSAが声をかけると、「あっ、おはようございます」と1人の女性の声が返ってくる。生け垣に向かって雑草や落ち葉を掴み出しているその手を休めない。翌朝には少し離れた場所で掃除をされている。また、ある日は住宅内花壇でお見かけする。

どんぐり公園（LSA室がある公園）に昨年も今年も赤や白の色とりどりの花が咲いた。別の女性が植えて育ててくださったものだ。ある男性は水撒きや草を取ってお世話くださった。公園を訪れる人の心を癒している。「きれいに咲きました。ありがとう」。さわやかな朝だ。

ゴミ置き場から数人の男性の笑い声が響く。「ガチャガチャ」と別の音も聞こえる。管理委員会の方が空き缶を回収して処分のために踏んでいる音だ。「同じやるなら楽しく、ついでに日頃のウップンを晴らすか」と踏む。汗が飛ぶ。

大倉山住宅では、毎月1回映写会を行っている。映写会前日の午後、設営の準備が始まる。暗幕準備が大変だったが、前回からの工夫により手際よく進む。今日も住人ボランティアの方々が先頭に立ってくださる。LSAも汗を拭きながら準備を手伝う。出来上がると皆さん談笑しながらお茶を飲む。

大倉山住宅に　明日、また楽しい事があることを願って！

散歩を楽しむ入居者の皆さん

植木の剪定をしてくださる入居者の女性

環境にやさしく、入居者にやさしいリサイクルの輪

ＨＡＴ神戸脇の浜県営住宅
LSA　木倉　いつ子

シルバーハウジングでも、少しずつ世代交代が始まってきている。部屋を返還するにあたり、まだ使用できる物を捨てるにはもったいないと思われた家族さんが、相談に来られるケースが多くなった。

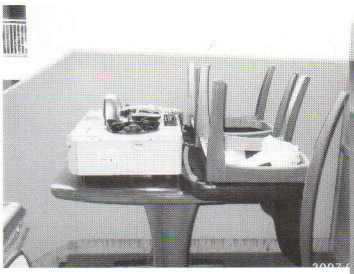
以前から、所属する施設のケアマネジャーや見守り推進員やヘルパーとの間では、例えば、『洗濯機があるけど、欲しいといっている人はいないの？』や『電話口まで出られなくなった人がいるから、子機付きの電話は無いの？』等の情報交換でリサイクルを行ってきた。

地域に、さりげなく他人を気遣ってくれる人がおられて、私たちともよく話しをするようになった。その方に声をかけたことがきっかけでリサイクルの輪が始まった。

日曜喫茶の日、会場の空きスペースに食器や衣類を陳列しておくと、皆さん、自由に選んで持って帰られるという。また残った物の後片付けもきっちりしてくださるので、LSAは家族さんから預かるだけでリサイクルに貢献した気になってしまう。

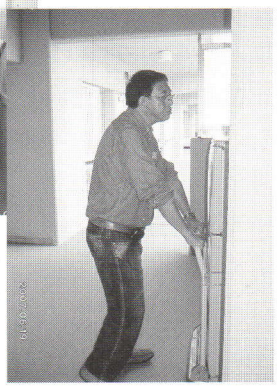
大型家電や家具については、支援者間（施設職員等）との連携の他にもう1つのルートができた。シルバーハウジングの入居者さんの中に、お世話好きな方がおられて、一声かけると大抵リサイクルができてしまう。

このような感じで、ＨＡＴ神戸脇の浜県営住宅の辺りではリサイクルの輪が広がっている。



角がないテーブルは、ひとり暮らしで杖歩行の方に。そしてその方が使っていたテーブルは、他の人へと住民さんが考えて段取りをしていました。

冷蔵庫を譲ってもらい自室に運ぶところ



安心して暮らせる街

ＨＡＴ神戸脇の浜市営住宅
LSA　春日　杏奈・三浦　順子

ＨＡＴ神戸脇の浜は県、市、公団18棟から成る災害復興住宅です。高齢者にも安心して歩行できるよう街全体がバリアフリーになっています。東へ徒歩10分の距離に災害や緊急時にも対応できる日赤病院があり、設備も整っていることから多くの方が利用されています。

住宅の中心には脇の浜高齢者介護支援センターがあり、地域見守り活動が活発に行われるようになって、独居生活の不安も軽減されています。また集会所では様々な行事の開催やサークル活動があり、更に自治会でも住宅周りの整備手入れは勿論住み良い環境づくりに力を入れ、安心して暮らせる活気あふれた街です。

地域での高齢化率も高く今後の担い手の問題も抱えてはいますが、老若男女問わず近隣同士の支え合いが住宅や地域へと拡大していくと、より一層安心して住み良い住宅へと発展していくことでしょう。

兵庫区

全国第１号のシルバーハウジング

シルバーハイツ菊水
LSA　大竹　憲司

平成元年８月に完成したシルバーハイツ菊水は、社会福祉法人海光園の運営する特別養護老人ホームミラホームの上にあります。６階建てで、１階には兵庫在宅福祉センターとデイサービスセンター、２階はミラホーム、３階から６階が住宅になっています。

総戸数は30戸。夫婦世帯（2DK）が14戸、単身世帯（1DK）が16戸あり、他にだんらん室とLSA室があります。

当時、厚生省のシルバーハウジングプランを受けて建設された全国第１号のシルバーハウジング住宅です。平成２年10月（もう随分前になりますが）には、ゆとりある住生活の実現に功績があったということで、「シルバーハイツ菊水」を完成させた神戸市住宅局は建設大臣から表彰を受けています。

入居当時の平均年齢は、63歳でしたが現在は77歳。男性11名、女性21名。お一人暮らしの方が多くなっていますが、みなさん会えば挨拶を交わし、穏やかに暮らして居られます。

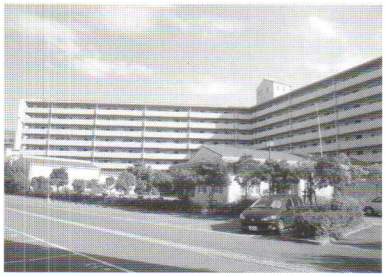
入居者がケガをされたり、体調を崩されたときなどは、LSAが訪問したり、時には階下の施設から看護師や介護職員に支援してもらうこともあります。

お花見や敬老の日などは、施設でお住まいの方と一緒に楽しくお食事をします。

これからも健やかに、安らかに入居者がお互いを支え合いながら自立生活を続けられるように、またシルバーハイツ菊水がいつまでも「良い住宅」であるように、LSAをはじめ施設職員、あんしんすこやかセンター、見守り推進員が暖かい見守りを続けていきます。

いつもありがとうございます

神戸明和住宅
LSA　村岡　政子



明和住宅では、LSA主催で毎月１回、催事「いきいきクラブ」を行っています。住民の親睦を図ることを目的に、助成金を利用して手芸ボランティアや出演ボランティアに依頼し、「手作り手芸」や「歌・演芸」を楽しんだり、「体操」をしたりしています。住民にも定着し、毎回15名前後の参加があります。その中に、毎回参加してくださるＡさんがいます。Ａさんは、かつて自治会の活動もされていたのですが、一時大病を患い、長期入院。その後は、身体も弱り、耳も遠くなり、足元も不安定になられました。しかし、「いきいきクラブ」には杖をつき、開始約１時間前に一番乗りで来られます。歩くのに時間がかかるからということもありますが、Ａさんには、「参加して他の住人のみなさんと楽しみたい」との強い思いがあるようです。催事によっては、細かな手作業や身体を動かさなければならない時もあり、参加することがかえって迷惑になっているんじゃないかとＡさんは思われる時もあります。でも、Ａさん、決してそう思わないでください。Ａさんが出来る範囲で、またLSAがお手伝いして、少しでも楽しんでいただけたらと思っています。私たちLSAは、Ａさんのコミュニティづくりに対する思いを大切にしたいと思っています。LSAは、Ａさんを含め、毎回参加してくださる方々のことを本当にありがたく思っています。皆さん、これからもいつまでもご参加ください！

歌の教室

シルバーハイツルゼフィール中道
LSA　岩本　貴博

うちのルゼフィール中道は、震災後の平成10年に併設施設と共に完成しました。戸数68戸。平成10年12月より入居が始まり、現在10年目を迎えており、入居者の平均年齢も高くなりつつあります。そんな中、コミュニティ活動の１つとして、平成13年より、入居者のみなさんが中心となって、団らん室にてカラオケ教室・詩吟教室を毎月２回行っています。参加者は入居者と地域住民の方を合わせ十数名で、詩吟教室では、詩吟の講師の資格を持つ入居者の方が先生となり、時には厳しく本格的に、また和気あいあいとした雰囲気で取り組まれています。

そして、年に一度行われる施設行事の夏祭りでは、みなさんで合唱ならぬ「合吟」を披露していただいています。夏祭りに向けてみなさん熱心に練習に励まれ、本番ではやぐらの上で生き生きとした元気な姿と歌で、毎年挑まれ続けています。

これからも夏祭りを盛り上げるためによろしくお願いします。

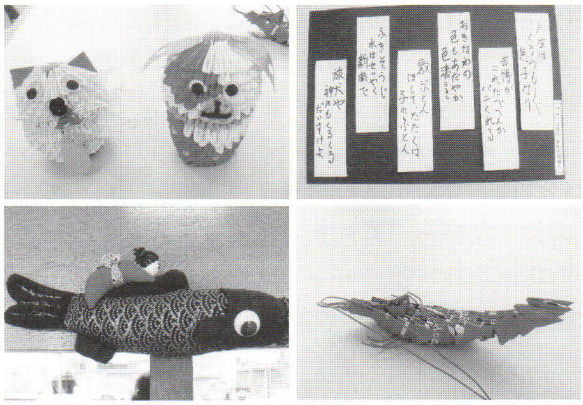
施設の壁を彩る作品

シルバーハイツフレール浜山
LSA　市川　政子

ホームズスタジアム神戸が見えるフレール浜山は、復興住宅として浜山小学校跡に高齢者施設とともに平成11年創立。当時はまだ、震災前から予定されていた区

画整理前の古い家屋もたくさん残っており、市電なきあとは市バスが頼りの交通事情でしたが、事業がどんどん進み地下鉄海岸線開通後は、近代建築の住宅が目立つようになってきました。歴史ある婦人会や自治会の活動は高齢化が目立つものの活発で、フレール浜山自治会もふれあい喫茶やカラオケ交流会を開いたことでコミュニティがますます広がり地域の心強い存在になりました。

また、手先が器用な人が当住宅には何人かおられ、ご自宅には紙人形、紙細工、パッチワークなどの手芸品を飾っておられます。川柳を作ったと持ってこられる方、お雛様やクリスマスデコレーションを作ったと持ってこられる方、施設の壁に装飾品が絶えることはありません。手作り世代がお元気なうちに色んなことを教えていただける機会を作っていきたいものです。



入居者の皆さんが作られた心のこもった作品のいろいろ

北　区

自然と文化に恵まれた住宅

シルバーハイツ鈴蘭台
LSA　新免　繁美

うちの住宅は駅から近く、周りにはスーパーはもちろん区役所、すずらんホール（区民ホール）などが有り、そこではいろいろなイベントが開催されます。入居者の皆さんには大変便利な場所であり、自然と文化に恵まれた環境の良い住宅だと思います。

シルバーハイツ鈴蘭台のある建物の1階には北在宅福祉センターがあり、そこではデイーホームすずらん（デイサービスセンター）、えがおの窓口（指定居宅介護支援事業所）、あんしんすこやかセンター（神戸市地域包括支援センター）など介護相談等の窓口として事業を運営しています。

２階から７階部分には、36世帯が入居するシルバーハウジングです。１階で介護保険の相談や医療、福祉の相談等、高齢者の総合相談窓口として即座に対応できることで、入居者のみなさんは安心して過ごされています。またLSAはセンターの職員と一緒に入居者の皆さんのお宅を訪問してお元気確認やお体の状態をお聞きするなどコミュニケーションを取るように心がけています。

入居者同士のコミュニティづくりの場として、毎月第２木曜日にはお茶会を開いています。お隣同士も顔を合わすことが少なく、おしゃべりする機会も

コミュニティづくりの場
入居者の方々が集うお茶会の様子

殆んどないので、この会に参加された時は、３時のお茶を飲みながら近況を語りあいワイワイ楽しい時間を過ごして親交を深めていただいています。

結束力の強さが自慢

シルバーハイツひよどり台
LSA　仲木　直子

北区の総合福祉ゾーン「しあわせの村」に隣接して建てられたシルバーハイツひよどり台は明石大橋を見下ろせる、自然に囲まれたとても静かな場所にあります。総戸数は99世帯で129名が入居でき、現在は93世帯112名の方が入居されています。

自治会主催で新年会・クリスマス会・忘年会などの行事が盛んで、毎週土曜日には有志の方々のお世話で「ふれあい喫茶」も行っておられます。その「ふれあい喫茶」には、多くの方が参加される「憩いの場」となっており、住民の方々同士の大切なコミュニケーションの場にもなっておられます。また、危機管理に対しての意識も高く、平成19年３月に小火があった際も住民の方々の見事な連係の消火活動、人命救助が行われ、それに対して消防署から感謝状を頂くほどの結束力の強さがこのシルバーハイツひよどり台にはあります。

このように、日頃よりお互いに気遣い、声を掛け合って生活されておられる住民の皆さんが、「ここに住んでよかった。」と思って頂けるよう、微力ながらLSAとして今後も側面的な支援をし続けていきたいと思います。

大切なのは、おもいやりの心

シルバーハイツ西大池
LSA　佐竹　廣哉

北区のほぼ中央部に位置し、六甲山の裏側にあたる緑豊富な地区、夏は涼しく、冬は六甲山から吹き降ろす風が冷たく厳しくも感じられる地域である。

こんな中で、生きがいを感じながら自立し、安全かつ快適な生活を営んで居られるご高齢者達。当住宅は平成13年11月に築され、入居。震災に遭われ、もともと当地域の市営住宅に住んで居られた方々が、建て替えにより入居されたのがほとんどで、それだけに地域の住民同士の面識やお付き合いもあり「今更コミュニケーションもないやろ」と言われる人もいらっしゃる。確かにそうである。天候の良い日には何となく中庭に集まり、談笑を始め、また数人の方が花壇の手入れから花植え、と思えば植木の刈り込みを数日掛けてやっておられる。ゴミ出しの日、歩行困難な方は玄関前にゴミを出しておくと誰となく持って行き、捨ててくださる。体調を崩されている方が居るとわかれば、ご近所の人が訪ねて様子を見ておられる。これこそ人間味ある自然のコミュニケーションと言えるのではないか。また、何よりも皆さん健康には気を使っていらっしゃる。殆どの方は掛かりつけ医を持ち、検診等欠かさずに行かれていることが安心につながっていると思う。

こんなに元気で明るく、思いやりの心を持つシルバーハイツの皆さんが頼もしく思え私は大好きです。

長田区

長田の町で、力強く

シルバーハイツ長田北
LSA　青柳　孝

このハイツの自慢は何と言っても「歴史の重み」と「住まいの便利さ」です。

まだ震災前の平成５年春に、ケアセンター長田に併設する一棟38戸の市営住宅が誕生しました。それは行政（区役所、警察署、消防署）と隣接する形で並び立っています。また、交通アクセスも山陽電車、阪急電車、阪神電車、市営地下鉄、市営バスと何処へ行くにも大変便利。買い物も、長田商店街がすぐ近くにあり、この秋には大型スーパーがさらに至近距離に建設されます。文字通り行政、交通、買い物、すべてに便利な立地です。

しかし、こんなハイツも12年前の阪神大震災では、道路一本隔てたところまで火の海だったのです。水が出ないので消すに消せない！！考えられない光景を住民の方全員が目の前にしたのです。風向きひとつで類焼していても何の不思議もない状況でした。入居者の方の中には、家の前の廊下からカメラを構えて記録のためにと火の海の熱さと非常な状況に耐えながら撮影した方もいたようです。そんな写真も海外メディアの人が「ください」と言って持ち帰ってしまったとか…。それからは「復興」「復興」の12年。

入居者の方が撮られた震災当時の住宅周辺の様子

ある人がこんなことを言われました。「震災前はゴム工場の粉塵で、リビングのフローリングが灰色になる程だったのが、今ではそれが懐かしく思える。あれだけのゴム工場がどこに行ったのかと思うとやっぱり寂しい。」と。

12年前には、入居者38世帯の平均年齢が60歳代でしたが、この秋には、何と平均年齢が80歳に到達します。皆さんがこの長田の町で力強く・力一杯生きてこられた。その過去を誇りとしながら、これからの一年一年を大切に、力強く、健康にお暮らしいただきたい。そんな気持ちで一杯です。

日本初のコレクティブハウジング

神戸片山住宅コレクティブハウジング
LSA　青柳　孝

神戸片山コレクティブ住宅の自慢は何と言っても、日本で最初の公営コレクティブハウス（協同居住型住宅）であるということです。「日本で最初」「震災復興」「神戸長田」この三つが重なって注目度も3倍。マスメディアも、ＮＨＫ、サンテレビ、久米宏のニュースステーションなどから取材を受け、取り上げられました。また、秋篠宮殿下ご夫妻の視察見学も神戸片山コレクティブ住宅の大きな歴史の1ページです。

この住宅の特徴は、ひとつ屋根の下、共用のリビングがあり、共用の廊下で、バリアフリーはもちろんのこと、２階建てにもかかわらずエレベーターまで完備されており、木造で木の温もり溢れた住まいであることです。

また、「共同生活」と「プライバシーの保護」といった相反する二つを「木の温もり」と「心の温もり」で101号室に住む近江弘子さんを中心に見事に調和達成しています。

「復興」それは「元」の姿に戻すことではありま

せん。「元」以上にすることです。それぞれ各人が別々に力強く・力一杯生きてこられた半生。「復興」は、それ以上なのです。LSA一人の力は微力ですが、入居者のみなさんと力を合わせ、「それ以上」を何としても達成できるよう、LSAの温もりも最大限発揮し、これからも支援していこうと思います。

ゆるやかな結びあいが心地いい

シルバーハイツ東尻池・浜添
LSA　山内　宣宏

私どもの住宅自慢としては、震災以降に建った住宅であり、入居されている方の中でも震災を経験された方や経験されていない方も一緒に生活されており、様々なコミュニティ活動が住民同士で行われていることです。シルバーハイツ東尻池においては、住民の交流の中から管理人をきめ、その方を中心に年４回程の懇親会を設け、共益費より食事代を出し、だんらん室で昼食会などを開催されている。

シルバーハイツ東尻池

シルバーハイツ浜添

真野ふれあい住宅（シルバーハイツ浜添）は、コレクティブハウジングで、１階に協同食堂と台所があり、そこで喫茶や茶話会を開き、住民同士の交流がとられている。また住宅の作りにしても一般的な公営住宅とは違い、昔の長屋のイメージがあり、玄関からの訪問で安否確認も出来るが、路地のような続きバルコニーが居室を囲うようにあり、そこを通れば、裏へ回ることもできる。そのため、訪問時玄関まで来る事が困難な入居者の方に対しては続きバルコニーを通り、ベランダ側より安否確認（お元気確認）することが出来る。また住民同士でも玄関を回り訪問するのではなく、この続きバルコニーを使ってベランダ側より訪問されることもある。そのことによって独居で生活されている方の孤独感や不安感を緩和し、また住民同士のふれあいの場となっている。

シルバーハウジング浜添（真野ふれあい住宅）の入居募集時に配布されていたパンフレット

LSAの願い

神戸西尻池住宅
LSA　冨田　信子・野橋　悦子

私たちの勤務する西尻池シルバーハウジングは長田区南部の工業地帯の中に位置し、一般住宅12世帯、高齢者世帯向特定目的住宅12世帯、シルバーハウジング92世帯を擁する住宅です。ＪＲ・地下鉄新長田駅が近く、交通やショッピングの便がよい恵まれた地域です。

入居者のほとんどが高齢者で、自治会も高齢者の方が多いため、大きな行事は計画できないようですが、毎日のラジオ体操と月に３回のカラオケ、月１回の食事会などをされています。同じ顔ぶれになりがちですが、毎回15名程度の参加があると聞いています。

LSA室は入居者の方がいつも利用されているエレベーターの前にあります。通院や外出の際、声をかけてくださる事から私たちとのしばしの会話が弾み、LSAへの信頼を感じるひとときでもあります。高齢化が進む中、孤独にならず共同住宅での交流と見守り合いを強め、入居者の方には少しでも楽しみを見つけてお元気に生活していただければと願っています。

須磨区

みなさん、元気はつらつです

シルバーハイツフレール離宮西町
LSA　伊藤　高志

こちらは、須磨区離宮西町にあるシルバーハウジング「フレール離宮西町」です。

地名にもありますように離宮公園のすぐ真横（道路を挟んで西隣）に立地している住宅です。この「フレール離宮西町」は特別養護老人ホーム「離宮しあわせ荘」の４階部分にあたり、全戸日当たりが良く、特に南側から望む須磨浦の風景は素晴らしいものです。（晴天日には淡路島がうっすらと見えます。）こちらの住宅は全６戸の小規模住宅ですが、平均年齢70代前半の心身共にお若い皆さんの集まりです。ホームヘルパーとして活躍されている方が２名、地域のシルバーボウリング大会で何度も入賞された（！！）Ｙさん等をはじめ、皆さんお元気に過ごされています。また入居者の皆さん同士とても仲が良く、２カ月に１度の共用部分の清掃日には色々な話題（お仕事や普段の生活の事）で盛り上がり、清掃後も皆さん残って談笑されています。

ほとんどの皆さんがお仕事等で忙しくされていますが、機会を作って皆さん揃ってゆっくりと、離宮公園に散歩に行きたいとLSAは考えています。

住宅のベランダからの須磨浦の景色

季節の行事をとり入れて

シルバーハイツ松風・松風第2
LSA　松島　幸彦・木下　圭子

シルバーハイツ松風

シルバーハイツ松風第２

LSA２名でシルバーハイツ松風とシルバーハイツ松風第２の２住宅を受け持ち、それぞれがだんらん室を拠点としてコミュニティグループを立ち上げ、日々の見守り活動と共にコミュニティ活動を実施しています。季節ごとの行事にちなんだ手芸工作品の製作や食事会、お茶会、映画鑑賞会等毎回10～20名が参加して、午後のひとときを楽しんでいただいています。

最高の盛り上がりを感じたのは、なんといっても昨年のクリスマスパーティーです。住宅ごとに実施したのですが、自治会長をはじめ、入居者の皆さんが事前準備から参画してくださり、飾り付け、プレゼント交換品の包装、ゲームの準備等たいへん賑やかな数日でした。

パーティー当日、ゲーム・プレゼント交換と進行して行くほどに盛り上がり、プレゼント交換の抽選に至っては最高潮でした。中身を見ては一喜一憂し、お気に入りの品物が当たった方はしっかりと確保され、そうでない方はお互いに好みの品物を交換し合

クリスマス会　たくさん準備されたプレゼント

ったりと、皆さんの顔が輝いていました。

私たちLSAにとっても有意義なイベントを実行できたと自己満足しています。これからも季節のイベント、新しいイベントをシルバーハイツの皆さんと共に考え、続けていきたいと思っています。

ペットと暮らす～癒し～

神戸白川台住宅
LSA　植田　公裕

県営白川台東高層住宅は白川台の高台に平成10年に建設された１～３号棟、全89世帯の比較的新しい住宅です。1号棟の上階からは天気のいい日には、明石海峡大橋が見える絶好のロケーション。また、住宅周辺には道路を挟んですぐに病院があり、「近くに病院があって助かる」と住民の方も安心して過ごしておられます。

また、こちらはシルバーハウジングと一般住宅の混合住宅になっており、毎月開催するふれあい喫茶には若い方の姿も見え活気があります。平日の午後には学校帰りの小学生とキャッチボールをするシルバーの方もおられ、子供もお母さんもシルバーの方も喜んでおられます。

そして、住宅最大の特徴は、ペットと住める住宅（２・３号棟に限る）があるところです。住宅敷地内にはペット広場もあり、広場内で首輪を外してもらい元気に走りまわるワンちゃんの姿にペットを飼っている方も、飼ってない方も心を癒されます。

住宅敷地内に設けられているペット広場

垂水区

明るく元気なみなさん

神戸小東山住宅
LSA　遠藤　智恵美

神戸市垂水区の高台にある県営小東山住宅は、10階建ての広々とした環境の中にあります。そのせいかシルバーハウジング入居者のみなさんは、明るくお元気です。

60歳代から90歳代のご夫婦世帯の方、単身世帯の方が、現在27名が生活しておられます。ヘルパーのお仕事に行っておられる方や月２回のふれあい給食のお手伝いをされている方。毎朝のラジオ体操に参加されている方。また、廊下でどの方と出会っても挨拶をお元気にされていますし、一般の方々とも仲良く暮らしておられます。意見の相違がある時は、団地内の自治会長さん、民生委員さんたちとも相談されます。積極的で明るい入居者の方々といつまでも一緒に過ごしていきたいと思っています。

住宅集会所の入り口にオープンするLSA室

美しい花々に囲まれて

シルバーハイツベルデ名谷
LSA　山口　婦美子・水田　幸江

私たちのシルバーハイツベルデ名谷には、周りにたくさんの花壇があります。皆さんが趣味の園芸を楽しまれ、四季折々のお花が花壇を彩り、目を楽しませていただいています。

今後も皆さんがお元気でお花を育てられ、いつまでも花に囲まれた美しい住宅であるように、LSAは見守りと支援をしていきたいと思います。

80歳で植えた月桂樹もこんなに大きくなりました

みなさんのお世話の甲斐あって、こんなにきれいに咲きました

元気の源　ここにあり

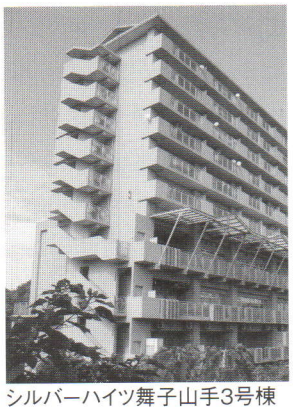
シルバーハイツ舞子山手２号棟・３号棟
LSA　石﨑　優実・國分　良政・戎谷　真里

たわわに実った美味しそうなトマト、なす、獅子唐。いい香りのするハーブ、色とりどりの花々。鉄筋高層住宅とアスファルトの地面に囲まれた一角に、四季折々、様々に姿を変える花壇がある。この住宅ができた頃は愛想のない、ただの砂地だった。

「土いじりは、年寄りの趣味」と侮るなかれ。貧弱な土地を耕し、腐葉土、肥料を入れての土作り。苗の植え付け、毎日の水やり。そして雑草との戦い。今では、緑が絶えることはない。一人が始めると一人、また一人と花壇に人が集まってくる。汗水流し、黙々と草引きをする人、豪快にホースで水撒きをする人。通りすがりの人とも会話が弾む。皆で力を合わせて、時にはけんかもしながら、小さな命を育てていく。皆の努力に応えるように、所狭しと根を張り、枝を伸ばす、個性豊かな野菜や花たち。

生きいきした草花は、住民の皆さんの元気さそのもの。

シルバーハイツ舞子山手2号棟



シルバーハイツ舞子山手3号棟

西　区

ワンちゃんと一緒

シルバーハイツベルデ玉津
LSA　田村　政治・滝田　紀恵子

ベルデ玉津２号棟は犬（ワンちゃん）を飼うことができる住宅です。

ワンちゃんが飼えるからこの住宅に入居を決めた方、入居してからペットを飼われた方。また、入居後、飼っていたワンちゃんが亡くなり、悲しい別れもありました。

特にワンちゃんは、毎日朝夕入居者とともに散歩に出てきます。LSA室に挨拶に来るワンちゃんもいます。LSAは、ワンちゃんを通じてより親しんでいます。皆さんは、ペットを子供のように可愛がっておられます。「私の方が先に死んだらどうしよう」とか、「体が弱ったら面倒見れないので誰か引き取ってくれる人おるやろか」と言われる方もいます。ワンちゃんのためにも元気で長生きしてください、とお話をします。

この住宅の周りは静かで東側は田んぼが広がり車もあまり走っていないので散歩にはとても適しています。１号棟の入居者はペットは飼えないので、２号棟の入居者にペットを預けて飼ってもらい交流されている方もおられます。LSA室は１号棟と２号棟の間にあり、LSA室から入居者のみなさんの外出される姿がよく見えます。ワンちゃんと元気に散歩されているみなさんの姿を見るとLSAも安心します。

ベルデ玉津の入居者のみなさんを元気づけているのは、LSAよりもワンちゃんです。これからも一緒に頑張ろうワンちゃん。（ワンちゃんも元気で長生きしてや）

入居者とペットのワンちゃん

自然体でいこう

神戸玉津今津住宅
LSA　佐古　満・前田　武廣

私達が担当させていただいている神戸玉津今津住宅（県営住宅）は、１棟112戸あり、そのうち28戸（単身世帯14戸、複数世帯14戸）をシルバーハウジングとして入居されています。当住宅は、平成10年４月７日より入居が始まりました。現在シルバーハウジングには26世帯36名の方が居住されています。入居者の方々は、比較的お元気で、各自がそれぞれ計画的に活動されて、シルバーハウジング以外の一般住宅の住民の方々とも仲良く活動されています。最近では、高齢にともない、グループ活動が少々低調になっていますが、自治会・老人会・グループ活動を絶やすことなく継続的に活動されています。

このように住民同士の関わりも多く、自宅に閉じこもるということはあまりなく、常に外へ出ておられることが多いです。また私達LSAも年齢的には、シルバーハウジング入居者とあまり変わりません。良いことかどうか分かりませんが、日頃会話をしていても、違和感がないのが良いところです。

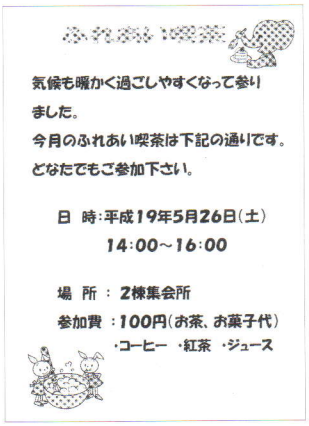
このようなシルバーハウジングの入居者ゆえに、私達の勤務時間のことをかなり気にかけてくださいます。終業時間近くになると「もう時間やで、気を付けて早よう帰りよ」とLSA室に声をかけてくださる方も多いです。改めて自慢できるものではありませんが、みんなが自然体でいることが“うちの住宅自慢”です。

ふれあい喫茶は交流の場

神戸伊川谷第二高層住宅
LSA　荒井　秀幸・門前　三枝子

わが県営伊川谷第二高層住宅では、コミュニティ活動として月１回（第４土曜日）のふれあい喫茶、月２回（第１、３日曜日）のモーニング喫茶、月1回（第４火曜日）の健康体操を行っている。ふれあい喫茶は昨年度に新しく立ち上げた行事でLSAの企画・立案で自治会、老人会が協賛という形をとっている。ふれあい喫茶は平成19年４、５月と現在のところ２回行っているが、初回が84名、２回目が50名程度の参加であった。近隣ボランティアと学生ボランティアの協力を得ながら、参加費100円でコーヒー、紅茶、ジュース、お菓子などを提供している。

入居者からは、以前あった喫茶がなくなり、住宅内で大勢の人たちが一堂に集える場所がなかったとの声もあった。そのため、今回ふれあい喫茶を始めたことで入居者にとっても、いろいろな人との交流の場にもなり、月に一回でも外出することで閉じこもりの防止にもつながるとの意見が出ている。



住民同士の見守りと気配り

シルバーハイツ西神井吹台
LSA　川端　由美・山下　千恵

この住宅は、平成10年に復興住宅として建てられた。全11棟690世帯。そのうちシルバーハウジングは１・２・３棟の中に112世帯ある。

新興住宅地の中に位置しており、住みやすく整えられた環境と社会資源（病院群・銀行・郵便局・生協・スーパー・ホームセンター等）がある。周りには広い公園も広がり、自然環境も整っている。地下鉄の駅までは歩いて10分足らず、巡回バスも出ている。

ボランティア主催による喫茶の様子

集会所では殆ど毎日何かの行事が行われている。NPO法人やボランティア主催の行事では給食会・リハビリ体操・ミニディ・書道教室・いきいき体操・週３回の喫茶などが行われている。住民同好会主催の行事では、新舞踊・手芸・将棋・週２回のカラオケなどの活動もある。ボランティアの中には住宅住民が多く参加している。集会所以外でも、公園で毎朝ラジオ体操やグラウンドゴルフが行われている。

老人会（会員70名）の活動も活発で、早朝清掃活動・日帰り旅の友会・一泊旅の友会・元気で歩こう会・グルメ倶楽部・温泉めぐりの会・花をめでる会・麻雀同好会・お手前の会など多彩な行事を楽しんでいる。先月から第５火曜日に茶話会とカラオケをドッキングしたサロンも新規活動を開始している。また、ちょっとした困り事（電球の取り換えなど）にも会員の枠を越えて対応してくれている。

いきいき体操の様子

LSA室には対象世帯以外にも一般住民の情報が寄せられる。住民同士の見守りや気配りの芽が育っていることが、当住宅の自慢である。

シルバーハウジングの未来像

「シルバーハウジングの今後のあり方に関する研究会」を振り返って

神戸市保健福祉局介護保険課

シルバーハウジングの今後のあり方に関する研究会（以下「研究会」と言う。）は、平成18年度に介護保険制度が改正されるなか、「シルバーハウジングの今後のあり方」について改めて検証を行うとともに、シルバーハウジングにおける見守りシステムを高齢化率の高い、大規模な復興住宅や一般公営住宅へも拡大できないか、その方法や仕組みを検討することを目的として実施しました。この研究会は、平成17年度に行ったシルバーハウジングの特定施設化に向けてのシルバーハウジング介護機能強化モデル事業（以下「モデル事業」と言う。）検討会を経て発足しました。

また、同じ平成18年度には㈶長寿社会開発センターが厚生労働省からの補助事業で「『高齢者向けの安心な住まい』のためのLSA等のあり方に関する調査研究委員会」を発足し、生活援助員派遣事業（以下「LSA事業」と言う。）の今後の方向性が示されました。また、この研究委員会によりLSA事業の地域への展開として高齢者住宅支援員の考え方が示され、平成19年度　高齢者住宅支援員研修等事業が厚生労働省の補助事業（都道府県事業）となりました。

そして、㈶阪神淡路大震災復興基金（兵庫県）からの委託を受け、LSAのような支援をシルバーハウジング以外の高齢化率の高い公営災害復興住宅等にも広げるという事業「高齢者自立支援拠点づくり事業（以下「拠点事業」と言う。）」に神戸市でも取り組み始めました。

この平成17・18年度の２年間のLSA事業に関係する動きを改めて振り返り、神戸市のシルバーハウジングのこれからを考察することにいたします。

1．2年間の経過

	神戸市	兵庫県	国
平成17年	○モデル事業検討会（４回）実施	○復興フォローアップ委員会（高齢者自立支援専門委員会）で高齢者自立支援拠点の開設が提言される	○介護保険制度のケア付き居住系サービスの見直し（特定施設入居者生活介護）
平成18年	○「シルバーハウジングの今後のあり方に関する研究会」 ○「シルバーハウジング住宅及び一般公営住宅の高齢者アンケート調査」実施 ○拠点事業開始（４カ所開設）	○高齢者自立支援ひろば事業の開始	○介護保険法改正　外部活用型特定施設入居者生活介護の創設 ○「『高齢者向けの安心な住まい』のためのLSA等のあり方に関する調査研究委員会」を発足
平成19年	○拠点事業継続	○高齢者自立支援ひろば事業継続	○高齢者住宅支援員研修等事業が補助事業（都道府県事業）となる

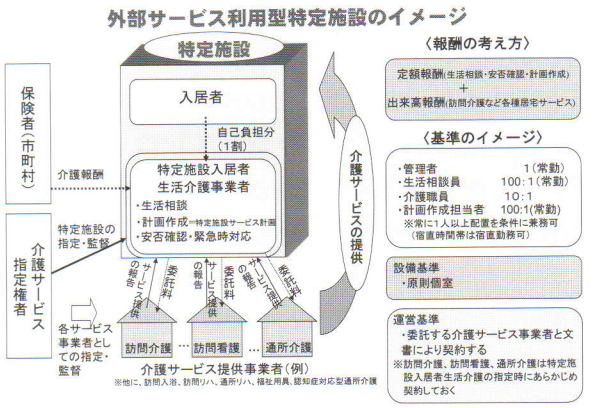
＊拠点事業の兵庫県の事業名は「高齢者自立支援ひろば事業」である。

2．平成17年度の動き

平成17年度になり介護保険制度のケア付き居住系サービスの見直しについての検討が国において進められていました。その検討の中では、住み替えニーズの拡大に対して高齢者が安心して住める住まいの普及が必要であり、「早めの住み替え」に対応するため特定施設の対象を一定の要件を満たす賃貸住宅にも拡大する方向が示されていました。

神戸市においてもシルバーハウジングの特定施設化をモデル事業実施施設にご協力をいただき検討会

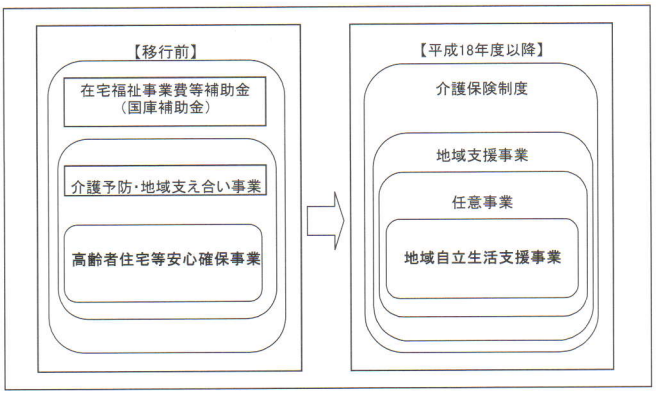
を開催し、また、ケアハウスを視察するなどにより議論を行いました。



平成 18 年度から特定施設には高齢者居住安定法に基づく高齢者専用住宅も対象となっている。高齢者専用住宅は、高齢者向け優良賃貸住宅やシルバーハウジングの他一般の賃貸住宅がその対象となるが、一定の居住水準を満たす必要があり、入浴、排せつ、食事等の介護その他日常生活上の世話の提供の有無も登録することになっている。

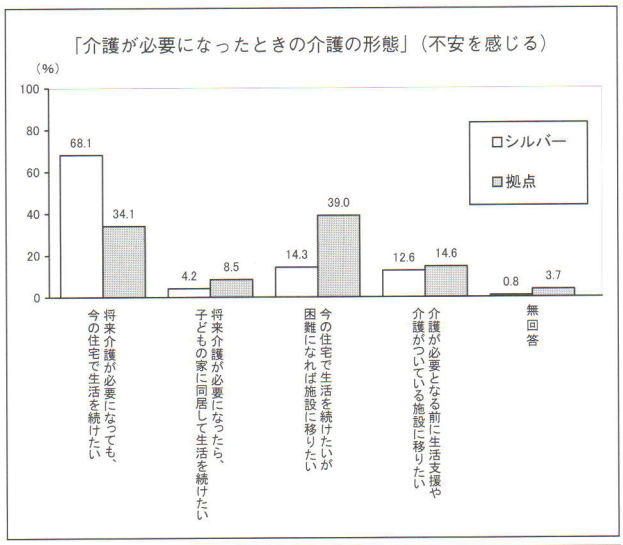
検討会を終えて、モデル事業については、①特定施設化に加えて、②新たな・独自の居宅サービスの展開、③介護予防サービス・地域支援の充実、そして、特定施設化については、ハード面・ソフト面において、例えば安全管理・リスク管理、重度介護者への支援、優先入居や住み替えの仕組みづくり、そして、入居者負担の増加対応―など、数多くの課題が出されました。特定施設化は具体案を示すまでには至りませんでしたが、今後も国や他の市町村の動きを見ながら、シルバーハウジングの今後の一つの方向として、単独住宅も視野に入れて検討していく必要があることが分かりました。（なお、シルバーハウジングの特定施設化については、平成18年度の第２回研究会で改めて課題と解決策の整理を行いました。）

３．平成１８年度の動き



平成18年度になり、LSA事業は、国の補助事業から介護保険制度の地域支援事業の任意事業に移行となりました。神戸市ではLSA事業費は、一般財源となり、モデル事業は地域支援事業の介護予防事業としました。

「シルバーハウジングの今後のあり方に関する研究会」は、LSA事業の地域支援事業への移行と高齢者専用賃貸住宅も含めた外部活用型特定施設入居者生活介護の創設という二つの流れを受け、高齢者が地域で生活していくのに必要なサービスを研究していくことにより、特定施設化も一つの方向としてシルバーハウジングの今後の方向性を見つけていくことを目的にLSA事業実施施設にご協力いただき発足いたしました。また、㈶阪神淡路大震災復興基金（兵庫県）から委託を受けた拠点事業の開始にあたり、シルバーハウジングにおける見守りシステムを高齢化率の高い、大規模な復興住宅や一般公営住宅へも拡大できないか、その方法や仕組みを検討することも目的に加え、具体的には、６回の研究会を開催するとともに、「シルバーハウジング住宅及び一般公営住宅の高齢者アンケート調査」を行い、それぞれの入居高齢者の生活満足度や意識を比較・検討する



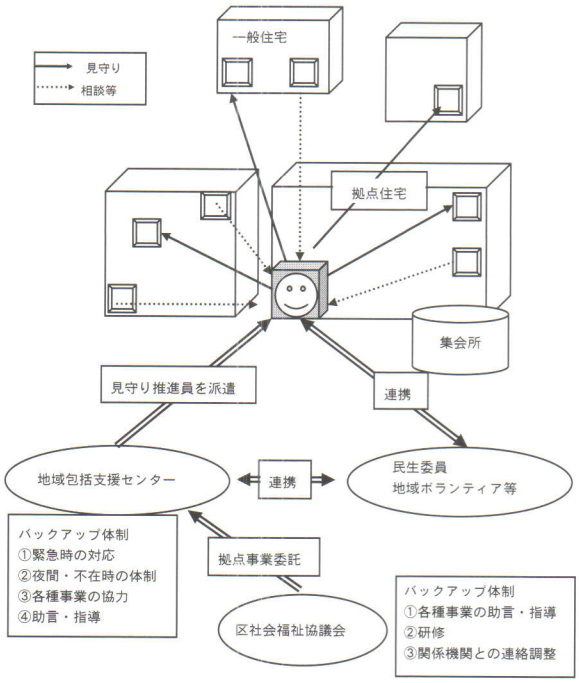
第6回研究会　意見交換から抜粋
「シルバー入居者は何故将来も住宅で住むことを望む率が高いのか」
○緊急通報システムの設置による安心感。
○専門職の LSA の派遣がある。
○LSA の派遣元は福祉施設
○周りの方も何とか生活していることから長く暮らせるイメージがもてる。
○シルバーハウジング入居者は既に住み替えたという意識の方が多いのではないか。

ことにより、今後の超高齢社会における有効な在宅支援サービスを明らかにしてきました。

研究会を終えて、LSAによる安否確認や生活支援などの「見守りサービス」、シルバーハウジングに設置されている「緊急通報システム」、モデル事業で実施している「食事提供サービス」が有効であること、また、モデル事業で実施している健康教室や栄養教室などの介護予防を意識した「介護予防サービス」への取り組みや平成16年度からLSAや見守り推進員が取り組んでいるコミュニティサポートグループ育成支援事業等による「コミュニティづくり」が重要であることが分かりました。

また、研究会であり方を検討した拠点事業は、地域包括支援センター（あんしんすこやかセンター）と連携したブランチ的な役割を担わせること、見守り推進員等が拠点住宅や周辺住宅等の高齢者の方への訪問や相談、緊急対応を行うこと、集会所を活用し、民生委員や自治会等の地域住民と協働して、仲間づくり交流や健康づくりなどのコミュニティづくりなどを展開することにより、効果的な見守りや介護予防の推進を図ることなど高齢者の自立を支援する機能を有することを目的としました。（平成18年度は、市内4カ所に開設）

【拠点事業活動イメージ】



4. まとめ

平成18年度末には、㈶長寿社会開発センターが厚生労働省からの補助事業で実施した「高齢者向けの安心な住まい」のためのLSA等のあり方に関する調査研究委員会から報告があり、LSAの今後の方向性も書かれています。その内容を追いながら「シルバーハウジングの今後のあり方に関する研究会」を振り返って―のまとめとします。

まず、LSA事業を取り巻く環境変化として、「LSA事業は『地域支援事業』として位置づけられ、自治体の主体的な計画において実施されることとなる。自治体は、住宅の形態や高齢者の生活面・健康面での不安に対応するための安否確認や生活相談等を実施することが求められている。LSAは、シルバーハウジング等の居住者に限定した役割だけを担う位置づけだけでなく、これからは一般団地内の居住高齢者等も支援する役割が求められてくると考えられる。そして、今後、LSA事業を介護保険事業の一環として実施する場合であっても、介護保険外事業として自治体が独自に取り組む場合であっても、その位置づけや役割について、地域における理解が必要である。」とあります。神戸市においても同様であり、今後の事業実施にあたっては、シルバーハウジング入居者のみならず地域住民への事業説明は常に必要なものと認識しています。

LSA事業の課題としては、「①LSA事業の内容に対する理解が自治体や介護事業者、地域包括支援センター等において必ずしも十分でない。②より高齢者の暮らしに密着したサービスであるが故に、業務の定義が容易ではなく、LSA業務が標準化されていない。③入居者の高齢化が進んでおり、意思疎通やニーズ把握等も困難さが増してきている。④LSA事業と他の関係機関との連携が①や②の問題から、また、介護保険制度の改正といった環境変化から必ずしも十分とはいえない状況にある。⑤LSAとしての資格認定や福祉・介護現場における発言力の強化といった地位向上に対する要望も多い。⑥コミュニティ活動との連携。⑦LSA事業は属人的な対応が多く、個人にノウハウ等が蓄積されている傾向が強く、人材育成について、体系的な研修体系の確立が求

められる。⑧LSAが個人で抱え込んで解決しようとする傾向が少なくなく、LSA事業に関わる成功事例や困難事例の共有等により、LSAに関わる体系的な情報収集・蓄積と、情報発信・共有の機能の整備が必要である。」が挙げられている。神戸市においても③の入居者の高齢化に伴い、重度介護者への支援が大きな課題となっています。特に夜間や休日は介護知識を持たない警備会社の隊員が緊急対応を行っており常に何名かの支援に苦慮しているところです。しかし、②LSA業務の標準化については、神戸市では、先輩LSAが悩み積み重ねた震災時の数々の支援経験を早くからLSA業務マニュアルとしてまとめ、LSA業務の標準化や継続性に取り組んできました。また、⑦の研修体系や⑧の情報収集や情報共有については、神戸市社会福祉協議会にLSA研修・会議の開催を委託し、必ず月1回実施しており平成19年度10月で76回となります。この様にLSA同士の情報共有や資質向上には積極的に取り組んでいるところであり、この体制は今後も維持し発展させて行くべきだと考えております。

今後の方向性としては、「**高齢化の進展や高齢世帯の増大が見込まれる中で、自立支援の実現を図るためには、LSA事業及びこれに類するサービスは今後とも必要である。今後の方向性としては、①現行のLSA事業の充実・活性化、②LSA事業の地域への展開の2つの方向性が考えられる。**」とされている。

LSA事業の充実・活性化に向けては、「**LSAの資質向上、LSAと地域資源との連携、LSAの情報交換・支援組織の創設の3つの柱が考えられる。**」となっている。

LSAの資質の向上では、「**今後のLSAの充実・活性化に向けては、これまでの住宅単位から地域単位への活動の場を広げていくことが必要であり、そのためには、介護等に関するノウハウだけではなく、接待能力・相談技術やコーディネート能力・合意形成能力等の能力が求められる。このようなスキルは、地域包括支援センターの職員に求められるもので、地域包括支援センターの職員はエリア単位で、LSAは住宅及びコミュニティ単位で、コーディネートの役割を担うことが期待される。**」とあります。

LSA事業の地域への展開に向けては、「**高齢者住宅支援員の創設**」が挙げられている。平成19年度在宅福祉事業費補助金の介護サービス適正実施指導事業に新たに高齢者住宅支援員研修等事業が実施主体を都道府県として創設されている。この事業には、①初任者研修（対象者は高齢者住宅の管理人または管理組合の代表者等）、②現任者研修（対象者は初任者研修を終了した者）、③ネットワーク形成推進事業があります。この制度は、これまで「高齢者向けの安心な住まい」の確保に向けては、LSAの派遣等を実施してきたが、地域支援事業の任意事業への位置付けることができることから、シルバーハウジング等以外で高齢者が多く居住する公営住宅等にもLSAを配置することが想定されるが、LSAの人件費等は公費負担であり、急速な充実を見込むことは困難で、新たに「高齢者住宅支援員」を創設するものである。そして、シルバーハウジング等以外で高齢者が多く居住する公営住宅等においても、LSA事業と同様のサービスを提供できるように必要な知識や技術を習得するための研修を実施し、また、地域包括支援センターや保健・医療関係者と連携し、各種資源を活用した高齢者支援ネットワークを構築し、高齢者が安心して、できる限り住み慣れた地域での生活が継続できるようにすることが目的となっている。

神戸市におけるシルバーハウジングの今後は、目の前には、LSA事業を地域支援事業として実施する、その実施にあたってシルバーハウジング以外の高齢者への支援のあり方の検討―があります。また、将来的には特定施設化の検討も考えておく必要があります。

神戸市は、多種多様な形態のシルバーハウジングを持つことを長所とし、18年間LSA事業を継続してきたことにより積み重ねてきた個別支援やコミュニティづくり支援のノウハウを財産と考え、その形態やノウハウを生かすことができるシルバーハウジングの今後と高齢者の見守りサービスの方向性を模索して行くべきだと考えます。

LSA事業、今まで・・・これから

社会福祉法人博由社　特別養護老人ホーム　ハピータウンKOBE　施設長　稲松　真人

＜はじめに＞

灘区摩耶海岸通２丁目３番、ＨＡＴ神戸灘の浜住宅は平成10年４月にオープンした震災の公営大規模復興住宅です。その中の９番館（ちょうど街の中心辺りの市営住宅で、特別養護老人ホーム・高齢者介護支援センターと合築）に99戸のシルバーハウジングがあります。（県営の５・６・７番館にも合計90戸のシルバーハウジングがある）そこは、バリアフリーの設計で緊急通報装置があり、LSAという生活援助員の定期訪問を軸に安否確認・生活相談および必要な機関への紹介と仲介・緊急時の対応等々、高齢者が少しでも長く在宅で生活できるようにハード・ソフトの両面で配慮された住宅です。

この度は、９年間LSA事業と関わってきた中から私なりの思いを紹介させていただくことでリポートとさせていただきます。

＜今までのLSA事業の意味＞

私は今までの関わりの中から、シルバーハウジングに住む住民にLSAが関わることの効果は大きく分けると２つあると感じています。

第１は「ニーズの発見」です。復興住宅の住民のほとんどが仮設住宅から移り住んだ方々で、もともと住んでいたコミュニティから震災を経て仮設に移り、そこで一からコミュニティ作りをしてきたのに（私は、５年もの仮設暮らしは、もはや仮設ではないと感じています）、復興住宅で再びコミュニティのない状況になりました。しかも仮設の時とは違って、一歩自宅に入ると隣近所の話し声が全く聞こえないために、世間話からの人間関係が作りにくい状況であったといえます。このような「半閉じこもり」のような状況の中で健康面・経済面・その他の生活面でさまざまな問題を抱えた住民が埋もれてしまい、中には危機的な状況に陥って発見されるケースもありました。LSAは定期的に訪問しますので訪問先での生活状況を生で感じます。そんな中から、「個々の住民が自宅で生活を維持して行くためのニーズは何なのか？」というソーシャルワークの起点でもある「ニーズの発見」にLSAが果たした役割は非常に大きいと思います。特に平成12年度、介護保険制度が始まってからはLSAが発見したケースをケアマネジャーが引き継ぎ、連携するといった肌理（きめ）の細かいチームアプローチが可能になったといえます。

第２は、先にも少しふれましたが「コミュニティ形成の支援」です。最初は隣にどんな人が住んでいるかもわからず、通院と買い物以外は自宅にいる方が多い中で、「将棋の相手」が欲しい人がいれば、同じようなことをぼやいている人との仲立ちをしたり、出かける場所がないとつぶやく人には、デイサービスを紹介してそこでの仲間作りもお手伝いしたり、数えればきりがないくらいの細かな対応を行ってきました。実際、コミュニティが出来上がっていく過程には時間がかかるものだし、その歴史の中でのいろいろな出来事がそのコミュニティの個性を形作るのだろうと思います。LSAは楽しい出来事だけでなく、難儀でおもしろくない出来事にも関わり、民生委員や自治会の役員さん、時にはおまわりさんとも連携しながら、住民の問題を住民主体で解決できるよう関わってきました。

もちろんその背景に、時間をかけて築いてきた住民との信頼関係があることはいうまでもありません。また、LSAと同じく一般住宅での高齢者の生活支援を行ってきた見守り推進員やSCSの働きも、今日の復興住宅の姿を語るうえで決して欠かすことはできません。

現状でも、地域住民のニーズ発見からケースワーク・グループワーク・コミュニティワークといったソーシャルワークそのものを実践してきたのがLSAだったと感じています。

＜これからのLSA事業＞

平成18年４月の介護保険制度の改正によって、地

域包括支援センターが創設され、地域（生活圏域）の高齢者の総合相談窓口が確保されました。それと時を同じくしてLSAの財源は国の特定財源から市の一般財源へ移行しました。

このことで私は、「LSA事業がシルバーハウジング入居者だけに特化されたサービスでは許されない時代がやってきた」と感じています。

地域包括支援センターのサービスは、シルバーハウジングに入居している高齢者も対象であるので、いろいろな「相談」から「ニーズの発見」、その後の「支援」まで担当します。（現状では介護予防業務が忙しく、実質的には継続してLSAが担っています）当たり前のことですがシルバーハウジングも生活圏域に含まれるケースであり、決して特別区的な場所ではないのです。

特別区的な場所でないとすれば、バリアフリーであったり緊急通報装置であったり、特定のハードを有する住宅をどのように捉えればいいのでしょうか。おそらく北欧などでいわれている「早めの住み替え施設」に視点を移して行くものと思われます。既に平成15年度から「シルバーハウジング介護機能強化モデル事業」として配食・給食サービスや健康・栄養相談を行っています。もともと「日常生活は基本的に自立した60歳以上の方」が入居の一つの条件であるにも関わらず、モデル事業で食事を提供するということは、ある種シルバーハウジングを特定施設的な機能として使えないかという試みであると考えられます。そうすることで、一般財源とは切り離して介護保険等の他の財源へ事業を移行することが可能だからです。

もしシルバーハウジングを特定施設であるとか、LSA事業を変化させて住宅の目的外使用による小規模多機能施設といったサービスに移行した場合、LSAはその施設の中のスタッフという形に変身してしまうのかなと思っています。ただ、シルバーハウジングに入居してきた段階で「終の住処」と思って入居してきた方々が多い中、どの程度「住み替えの施設（通過施設）」として認識できるかは、今後の入居者の選定や世代の交代による総体的な価値基準の変換に頼る部分が大きいと考えています。

そしてソーシャルワーカーとしてのLSAの機能は、今後どのような形で誰が担うのかということについては、前述のとおり地域包括支援センターが担う部分であると思います。しかし配置人数や業務範疇の関係から、現状のLSAのような肌理細やかな支援は望めないとも感じています。神戸市の場合はセンター自体の数が多いので想像しづらいのですが、他の保険者で展開されているブランチに配属されているスタッフにはLSAやSCSが積み重ねた実践経験が貴重なテキストになると思います。いずれにしても一般の地域において民生委員や自治会等と連携を強化しながら、専門的なソーシャルワークを展開できる担い手としてLSA・SCSに代わる生活援助員が必要になってくると感じています。そのことは非常に広範な対象地域を担っている、神戸市独自の地域包括支援センター配置職である見守り推進員が復興住宅以外の一般住宅で、多種多様なニーズを抱えて埋もれていたケースを発見し支援に結び付けている状況を見れば、その部分を拡充する必要があることは関係者の誰もが感じていると思います。

＜終わりに＞

私は長く「介護」の場面に関わってきたので「ケア」というと直接「介護」の部分に目が行ってしまいがちですが、今の「ケア」の目標が「利用者の望む暮らしの実現」ということを考える時、そのキーワードは「住む」ということだと思います。

「望む暮らし」とは、先ず「どこに住みたいか」ということだと思います。その場所にできる限り住み続けるためには、孤立していてはダメで地域につながる必要があります。そして地域の中で住むということは個々の住民が、「出来る部分」を出し合い「出来ない部分」を手伝うというコミュニティ作りが必要なのです。現在、昔ながらの自治組織機能（身内意識の中のタテ社会ではそれぞれの役割義務や支持系統が暗黙のうちに認識されていた）が弱まっている現状で、その「出来る部分」と「出来ない部分」をコーディネートする機能が地域の中に必要だと感じています。

今後行政責任として、その部分に専門的なソーシャルワークを担えるLSAやSCSを配置できるように、新しい制度作りに取り組んでいただけることを切望しております。

震災復興公営コレクティブ住宅の事業推進を応援して

石東・都市環境研究室／コレクティブ ハウジング事業推進応援団　石東　直子

はじめに

1995年１月17日未明に発生した阪神・淡路大震災は神戸市と阪神間の下町の被害がとくにひどかった。下町には長年住みつづけてきたひとり暮らし高齢者や高齢者のみの世帯が多く、隣人たちとふれあって、地域の中で暮らしてきた。住宅の外も住まいのつづき（日々の生活の場）であり、慣れ親しんで安心して動き回れるからこそ元気に過ごすことができ、下町の生活が精神面の健康も支えてきた。そのような生活展開の場が震災で一瞬に消失してしまった。震災後１週間ほどして仮設住宅の申し込みが始まったとき、私は西宮市役所でボランティアとして仮設住宅の申込用紙の配布を手伝っていた。用紙を取りに来られる人の多くがかなりの高齢で、問われた人には用紙の書き方などを説明した。入居者欄に書かれる名前はひとりや二人で、その中のひとりの女性が「わたしら地域から離れた仮設に当たっても、こおおてよう住まんわ」とつぶやかれた。このつぶやきが、私をコレクティブ住宅の提案、推進に駆り立てた原点だ。

その後、地域を離れて移り住んだ仮設住宅で誰にも看取られずに亡くなる人や、せっかく生きながらえた貴重な命なのに生きる気力を失って、自ら命を断ち切ってしまう人たちが出始めた。この後多くの人たちが仮設住宅から復興公営住宅に移り住むことになる。鉄筋コンクリートの復興住宅は閉鎖性が強く、鉄の扉ひとつ閉めると、外部とは全く孤立してしまう。仮設住宅で起きている悲劇（孤独死、閉じこもり、自殺など）が今後も永遠に続くことになるだろう。このような悲劇を食い止めるためには、安全で安心して住める下町長屋のような住宅の供給がどうしても必要であるという思いが、わたしの中にどんどん大きくなってきた。

１．コレクティブ住宅の発想

震災後１カ月を待たずして創刊された復興支援ニュースレター・「きんもくせい」（阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク・編集発行代表・小林郁雄）の第３号（95年３月３日発行）に、私は次のように寄稿している。

「進み始めた復興まちづくり―ハードな計画に偏りすぎているのでは」と題して、「まずは住宅再建が緊急課題である。どこに、どんな住宅を、どんな手法で建設していくのか、新たな発想が必要である。今までのまちづくりとは大きく視点が異なるはずである。…＜略＞…。ひとり暮らしのお年寄りや老夫婦が仲間同士集まって住めるような住宅が市場のそばにでもできないだろうか」と、提案している。

続いて「きんもくせい　第14号」（95年８月17日発行）に「生きる気力をとり戻すために高齢者たちがともに生きるコレクティブハウスの供給を（その１）」と題して寄稿している。「震災から半年が経ち、仮設住宅の生活で孤独に死んでいくひとり暮らしのお年寄りが後を絶たない。また、生きる気力を失って自ら命を断ち切ってしまう人もでている」「仮設住宅の建設は、入居者と立地場所、住戸形式のミスマッチという決定的な問題をもってしまった。今後仮設住宅から移り住むとき、同じミスマッチを繰り返さないためにもコレクティブハウスの供給を提案したい」「生きる気力が失せて将来の生活に不安をもつ高齢者たちには、とにかく毎日の人とのふれ合いとおしゃべりが必要であり、住み慣れた地域に戻って気心知れた人同士が一緒に住めるような住宅の供給が必要である。そのような住まい方のモデルのひとつであるコレクティブ住宅のイメージは、台所・浴室・便所等を備えた独立した住戸に、共同の大きめの台所と食堂兼だんらん室、洗濯室などがあればよい」と提案している。私は友人の小谷部育子さん（日本女子大教授）からスウェーデンのコレク

ティブハウスのスライドをかつて見せてもらったことがあったので、「そうそうコレクティブ住宅があるやんか」と、その発想に結びついた。

わたしのこのような提案に小林郁雄さん（都市プランナー）の賛同があって、彼の提案により95年夏に「コレクティブ ハウジング事業推進応援団」を組織し活動を始めた。

2. コレクティブ住宅をシルバーハウジングプロジェクトにのせる

95年９月中旬、コレクティブ応援団の本格的な活動開始、情報提供と普及のための公開ミーティングと軌を一にして始まった神戸市の「コレクティブハウジング研究会／住宅局住環境整備課長・鈴木三郎さん座長」には小林郁雄さんと私もメンバーとして参画した。第一回会合は、コレクティブ住宅のモデルプロジェクトの供給の可能性および設定基本方針の検討であり、その席でメンバーの一人、建設省住宅局整備課・伊藤明子さんから「高齢者住宅プロジェクトにのせないとコレクティブハウジングの実現性は難しい」という意見があった。同研究会は12月末までに数回開かれ、11月初めの第３回研究会では神戸市営住宅の「モデル事業」として供給することにし、次の３つの方針が確認された。

① 第一号のモデルの立地場所は従来から地域住民でまちづくりが進められているような地域が適切であろう。② 仮設住宅にいる仲よしが連れもって入居できるようなグループ入居が望ましい。③ シルバーハウジングプロジェクトの展開のひとつとして実地する。

これまで官民ともに事業化はおろか行政としては検討さえしていなかった全く新しい住まい方の住宅を公的住宅で事業化するには、震災後の非常時といえども大英断であり、コレクティブ住宅の実地は「モデル事業」にならざるを得ないが、モデル事業ならではの少し欲張った取り組みが可能であるという神戸市の意気込みがあった。しかし、研究会の結果を受けての事業化決定までには、協同居住稼動のためのサポート体制、協同スペースの家賃や管理費、住宅管理上の問題、補助事業対象化、空家発生時の入居者補充方法などなど、事業実施上の課題が山積みで庁内コンセンサスを得るために越えなければならないハードルは高く、鈴木さんは庁内で孤軍奮闘されていたようだ。

そこで、コレクティブ応援団は「きんもくせい」や新聞にコレクティブ住宅の必要性や外国事例なども紹介し、公開ミーティングやパネル展を開催し、行政職員にも情報や資料を提供したりして、事業の展開に沿ってさまざまな活動を続けた。

3. コレクティブハウジング事業推進応援団の活動―事業の展開にそった居住支援

コレクティブ応援団には都市プランナーや建築家、医師や福祉関係者、学者や行政職員のほかに多分野のボランティアたちが関心をもって参画し、復興住宅にコレクティブ住宅の建設を提案し、事業化に向けて各段階で必要とされるサポートを順次展開してきた（図-1参照）。

コレクティブ応援団の居住支援の内容を概括すると、「初期活動」は、コレクティブ住宅について被

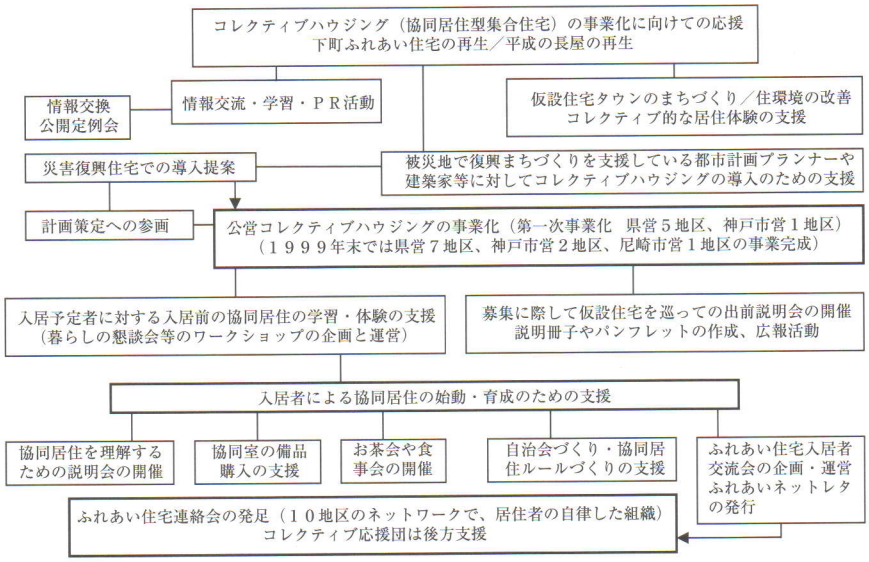


図-1　コレクティブ事業推進応援団の事業展開にそった居住サポート活動

シルバーハウジングの未来像

神戸のコレクティブハウジング

入居者募集を前に説明会

初のグループ応募

ボランティア団体 仮設住民ら聴き入る

コレクティブ応援団の居住支援活動／
仮設住宅への出前説明会

コレクティブ応援団の居住支援活動／
ふれあい住宅入居者交流会の企画・運営

災者との情報交流・学習・PR活動、行政への資料提供と計画策定への参画。「事業化決定から入居までの活動」は、情報活動、説明冊子・パンフレットの作成、仮設住宅を巡っての出前説明会、入居予定者を対象にした入居前協同居住の学習のためのワークショップの企画・運営。「入居後のサポート活動」は、協同室の備品購入支援、住まい方の説明会、自治会づくりや協同居住のルールづくりの相談、協同居住のきっかけづくりとしての食事会やお茶会の開催などを各ふれあい住宅を巡って行ってきた。数カ所のふれあい住宅が入居してからは入居住宅をネットワークして「ふれあい住宅入居者交流会」を組織し、その企画・運営を行い、ネットレターの発行・配布を始めた。入居後しばらくすると住人たちの自主的なふれあい生活運営がなされるようになり、住宅によって多少のちがいはあるが後述するような食事会、お茶会やモーニングサービス、雛まつりや七夕さんなどの節季行事を行い、ふれあい生活を楽しむようになった。10地区のふれあい住宅は97年夏から99年春にかけて入居が始まり、それぞれのふれあい住宅の生活が少しずつ落ちついてきた2001年1月に、居住者の自律した組織である「ふれあい住宅連絡会」を発足させ、これまでのコレクティブ応援団の先導的なサポートから自立して10地区の住宅がネットワークを組み、下記のふれあい住宅連絡会会則の目的に沿った活動をしている。

1．本会は1995年の阪神・淡路大震災の復興事業として建設された、全国初の公営コレクティブハウジング（以下「ふれあい住宅」と称す）の居住者たちが相互に交流し、親睦を深め、共通の課題の対応策を考えたり、時には共にイベントを開催するなどして、安心して楽しく暮らせる協同居住を育んでいくことを目的とする。

2．本会は、歳月の経過によって生じてくるであろうさまざまな協同居住の問題、とりわけふれあい住宅の居住者だけでは解決が難しいような問題に対して、関係機関や支援者などに対応策やアドバイスを求めるときに、居住者を代表した組織となることを目的とする。（「ふれあい住宅連絡会会則」より）

コレクティブ応援団は震災後12年目を迎える現在も「ふれあい住宅連絡会」の後方支援をしているが、入居から10年前後が経ち居住者の加齢によるさまざまな生活上の課題、入居者の入れ替わりによる新旧居住者のふれあい住宅に対する認識の違いからくる人間関係の課題などが深刻化し、公営住宅としての行政による抜本的な居住施策が必要となってきている。

4. 事業化された10地区の復興公営コレクティブ住宅（ふれあい住宅）

「ふれあい住宅」はコレクティブハウジングという呼称を使ってしまったが、被災地のコレクティブハウジングは本来のコレクティブハウジングの住まい方（＝食事や育児など家事作業の一部の合理化を図るために生活を協同化し、共に住まう楽しさを育むライフスタイル）ではなくて、次のような住まい方のイメージをもつ。

「いつでも誰かに会えるし、いつでもひとりになれる」「ひとりで食事をするよりは、たまには大家族のように集まって食べよう」という、日常生活の中で自然な形で隣人たちがふれあって暮らす住まい方で、下町暮らしの再生である。住戸は少しコンパクトになるが独立した住宅で、台所、便所、風呂などが備わっており、各住戸の面積を少しずつ出し合って住人が自由に使える協同室（協同リビング）をもつ。バルコニーの仕切り板が無くてバルコニーが長屋の路地のようにつながっている住宅もある。協同室には少し大きめの厨房コーナーがあり、食堂兼だんらん室や和室があって、協同室の光熱・水道費の負担や維持管理は住人たちが行う。従来の公営住宅にはない新しい住まい方の住宅として、住宅供給主体からは「ふれあい住宅」とネーミングされて10地区341戸が1997年夏から1999年春にかけて入居した（表-1参照）。

10地区のうち神戸市営住宅は２地区、兵庫県営住宅が７地区、尼崎市営住宅が１地区で、６地区は全戸がシルバーハウジング（国の制度の高齢者世話付住宅）で、３地区はシルバーハウジングと一般住宅が併設した多世代居住の集合住宅で、神戸市営久二塚西ふれあい住宅だけは全戸シルバーハウジングの適用はない。

しかし、住宅（＝器）を供給しただけでは、器にそった新しい住まい方は始動しない。新しい器に合った住まい方、たとえば、協同室はみんなの居間で、そこではいつでも誰かがおしゃべりを楽しんでいる... というような住まい方を育てていくための居住支援が必要だ。

住人は入居直後、協同室の使い方のイメージが描けず戸惑いが少なくなかった。コレクティブ応援団をはじめとするボランティアグループや自治体が、住人たちによる協同室の備品の調達、協同居住のルールづくり、お茶会や食事会の開催などをサポートしたので、次第に自治会長をリーダーとして住人

表-1　復興公営コレクティブ住宅（ふれあい住宅）の事業化一覧／10地区　341戸

ふれあい住宅	住宅型別戸数			合計戸数	協同スペースの面積	計画特性等
	S型 1DK	M型 2DK	L型 3DK			
県営片山　97.8.　入居 全戸シルバーハウジング	6			6	53 ㎡	単独棟　木造２階
県営南本町　98.2.　入居 全戸シルバーハウジング	19	8		27	173	単独棟鉄筋５階と一般棟併設　１階にメインの協同スペースと各階にサブ協同スペース
県営岩屋北町　98.2.　入居 全戸シルバーハウジング	16	8		22	100	単独棟鉄筋３階と一般棟併設、１階にメインの協同スペースと各階にサブ協同スペース
県営大倉山　98.4.　入居 全戸シルバーハウジング	32			32	222	一般棟鉄筋14階の１～４階がコレクティブ住戸。複数の一般棟併設の大規模団地、コレクティブは階毎の８戸単位で、それぞれの協同スペースを持つ
県営脇浜　99.3.　入居 全戸シルバーハウジング	32	12		44	280	単独棟鉄筋６階と複数の一般棟併設の大規模団地。２層でひとつのコレクティブ単位で、メインとサブの協同スペースを持つ
県営金楽寺　98.4.　入居 S／シルバーハウジング M／高齢者特目住宅	32	22	17	71	478	単独棟鉄筋４階と一般棟併設。階毎の14～19戸でひとつのコレクティブ単位で、メインとサブの協同スペースをもち、更に1階にコミュニティプラザがある。
県営福井　98.4.　入居 SとMがシルバーハウジング	14	9	7	30	209	単独棟鉄筋3階。1階にメインの協同スペースと各階にサブ協同スペース
神戸市営真野　98.1.　入居 Sの全戸とMの６戸がシルバーハウジング	15	12	2	29	193	単独棟鉄筋3階。1階に協同スペースと屋上に協同菜園、各階はつづきバルコニーでたまり場がある。
神戸市営久二塚西　98.12.　入居 再開発受皿住宅 シルバーハウジングはない	45	13		58	193	単独棟２棟は鉄筋５階と７階／１階は店舗　更に一般棟併設。コレクティブ棟の２階室内に協同スペースと屋外に協同路地広場
尼崎市営久々知　99.5.　入居 全戸シルバーハウジング	19	3		22	約200	単独棟鉄筋４階と一般棟併設。１階にメインの協同スペースとLSA室。3、４階に談話室

・金楽寺住宅（尼崎市内）久々知住宅（尼崎市内）福井住宅（宝塚市内）以外の住宅は神戸市内に立地
・片山、真野、久二塚西、福井ふれあい住宅以外は団地内に、団地全体を対象としたコミュニティプラザが併設されている。
・単独棟はコレクティブ住宅だけの住棟、一般棟併設は同じ敷地内にコレクティブ住宅以外の住棟がある。

たちによるお茶会、食事会、多様な集いなどが企画・運営されるようになった。

5. 神戸市営真野ふれあい住宅と久二塚西ふれあい住宅の入居前協同居住ワークショップ

10地区のふれあい住宅のうち神戸市営真野ふれあい住宅と久二塚西ふれあい住宅は、入居前に入居予定者が参画して新しい住まい方の勉強会（ワークショップ）を行った。筆者はこの２住宅の居住サポートの企画・運営に携った。県営ふれあい住宅は入居前協同居住ワークショップの機会はなく、ただ県営大倉山ふれあい住宅だけは県の入居説明会にコレクティブ応援団が出かけて行き、ワークショップの必要性を話したところ、入居予定者からの要望があったので、１回のワークショップを行った。

◆真野ふれあい住宅は長田区の下町、真野地区に建設された29戸・多世代居住の住宅で、「入居前協同居住の学習・体験＝暮らしのこん談会」は市職員やコレクティブ応援団、研究者、ボランティアなどがサポートし、まだ建物が建設中の97年７月から始め、入居（98年１月）までの半年間に７回行った。お互いに顔見知りになる会、住宅のつくり（設計内容）を知る会、入居部屋を決めるについての意見交流会、入居部屋位置の希望と協同室備品の調達方法についての意見交流会、電磁調理器の体験会とお茶会、入居部屋の決定会、住宅お披露目会の７回で、この他に入居者から名乗り出た世話役の会合を２、３回もった。

入居予定者は当初、このような暮らしの懇談会に戸惑いがあったようだが、回数を重ねるにしたがって住まい方のイメージができ、お互いが気軽に親しく話が弾んできた。

真野ふれあい住宅の第一期の入居者は、29戸のうち28戸が入居（28世帯43人）で、ひとり暮らし高齢者住宅（１DK）／15人：平均年齢78歳、世帯用高齢者住宅（２DK）５世帯10人：平均年齢67歳、一般住宅（２DK）／６世帯９人、一般住宅（３DK）／２世帯９人。高齢者住宅の22戸がシルバーハウジング適用だが、一般住宅の居住者にも高齢者が多く、30代と40代の若い世帯は２世帯である。また、公営住宅としては新しい試みの「グループ入居制度」が採用され、２カ所の仮設住宅から２グループが連れもって入居された。

入居後しばらくはみんな仲良く、助け合いの暮らしが続いたが、入居者の中のトラブルメーカーが人間関係をこじらせる事態をしばしば起こすようになり、シルバーハウジングのLSAさんも新しい住まい方を理解されながらも苦労されたようだ。

なお、従来のLSA業務は居住者との個人対応であったが、震災を契機としてLSA任務も居住者の個人対応に加えて居住者たちのコミュニティづくりのコーディネーターの役割が必要とされるようになった。

◆久二塚西ふれあい住宅はＪＲ新長田駅の南にあり、神戸市震災復興再開発事業の従前居住者用賃貸住宅（受皿住宅／再開発住宅）で、神戸市営住宅58戸は全戸がシルバーハウジングの適用はない。

震災の年の12月半ばに久二塚６丁目まちづくり協議会・住宅部会の「ひとり暮らし高齢者のすまいを考える集い」が、仮設住宅にいる独り暮らしのお年

真野ふれあい住宅の「入居前協同居住の学習・体験＝暮らしのこん談会」

久二塚西ふれあい住宅の「ふれあい住宅の集い・入居前協同居住の学習・体験ワークショップ」

久二塚西ふれあい住宅／食事会風景

寄りたちに寄ってもらって長田区二葉老人いこいの家で開かれ、私はそこで初めてコレクティブ住宅の話をした。そのとき参加者のひとりが「そんな住宅、理想的や、そやけどわたしら５年も待たれへん！」と言われたのがとても心に残った。再開発住宅へのコレクティブ住宅の導入はこの地域の再開発事業の設計・監理を担当していた建築家の森崎輝行さんの提案で、96年４月から私も参画して同まちづくり協議会はコレクティブ住宅の勉強会を始め、97年２月からこの再開発住宅への入居希望者たちに集まってもらって、「ふれあい住宅の集い・入居前協同居住の学習・体験ワークショップ」を始め、98年末の入居までの長い期間いろいろな体験ワークショップを続けた。

従前居住者用住宅として震災前まで何十年も同じ近隣地区に住んでいた人たちが入居予定なので、ワークショップの期間から和気あいあいの雰囲気があった。98年12月の入居から１年が経過した99年12月の入居者は58戸のうち50世帯で、２人世帯が13、１人世帯が37で、63人の入居者のうち女性45人、男性18人で、その年齢構成はなかなか壮観だ。65歳以上の割合が74％、75歳以上でみると33％で、40歳以下は３人、40代と50代で６人、60代が20人、70代が22人、80代が12人、最高齢者は89歳、最年少者は18歳だ。下町がこんなに超高齢社会とは改めて認識した。

6. 居住者の動態

97年８月から99年５月にかけて入居が始まった10地区のふれあい住宅の「入居時の居住者属性のデータ（入居後のサポート活動の中で居住者の協力を得て把握）」、入居後２年半から４年経った2001年７月実地の「第一次ふれあい住宅カルテ」、及びそれからほぼ３年後の04年５月実地の「第二次ふれあい住

表- 2　ふれあい住宅の居住者動態　（2004年５月末調査のふれあい住宅カルテ）

ふれあい住宅カルテ（居住者の動態）　2004.05末診断　（1）

住宅名　●多世代型　○高齢者向け	●久二塚西	○片山	●真野	○大倉山	○南本町	○岩屋北	●福井	●金楽寺	○久々知	○脇浜
第一次の入居時期	1998年12月	1997年8月	1998年1月	1998年4月	1998年2月	1998年2月	1998年4月	1998年4月	1999年3月	1999年3月
全住戸数（うち空家数）	58(5)	6(0)	29(2)	32(0)	27(2)	22(1)	30(1)	71(3)	22(2)	
住戸型・1DK（うち空家）	45(3)	6(0)	15(2)	32(0)	19(1)	16(1)	14(1)	32(1)	19(2)	
2DK（うち空家）	13(2)	—	12(0)	—	8(1)	6(0)	9(0)	22(1)	3(0)	
3DK（うち空家）	—	—	2(0)	—	—	—	7(0)	17(1)	—	
現在の居住者数（うち女）	58(40)	6(5)	37(24)	32(18)	31(20)	28(14)	48(29)	111(61)	22(13)	
第一次入居時からの居住者と率　％	42人58％	4人67％	24人65％	27人84％	?	?	37人77％	104人94％	21人95％	
入居後に亡くなった人	19人	1人	8人	5人	5人	3人	4人	4人	1人	
04年の平均年齢	67	75	65	74	75	71	61	59	74	
04年の平均年齢　男・女	65・72	70・76	63・66	70・77	79・71	72・69	61・61	59・58	72・76	
入居直後の平均年齢　男・女	68・70	72・69	?	66・73	71・71	70・69	50・50	55・52	?	
(＊)15歳以下を除く平均年齢推移 01/04年	68／67	72／75	69／65	74／74	74／75	72／71	64／64	63／64	71／74	
高齢化率推移　01/04年	70／82	100／100	64／70	97／100	94／100	63／85	54／65	65／67	88／95	
後期高齢化率推移　01/04年	36／36	25／33	39／24	34／34	41／58	30／36	33／25	23／46	36／36	
04年の後期高齢者率　男・女	11・50	0・46	8・30	14・50	100・35	43・31	32・21	64・31	0・67	
04年の75歳以上数（うち女）	21(19)	2(2)	9(8)	11(9)	18(7)	10(4)	12(6)	51(19)	8(8)	
04年の85歳以上数（うち女）	4(4)	1(1)	4(4)	1(1)	0	0	3(1)	11(3)	0	
15歳以下の人数　01年—04年	0—0	—	1—0	—	—	—	2—2	5—9	—	

高齢化率とは65歳以上　後期高齢化率とは75歳以上（＊）の平均年齢の推移は01年データーが15歳以下を除いていたので、04年も揃えた
脇浜住宅は02年度からふれあい住宅連絡会を脱会したので04年５月の調査はできなかった

宅カルテ」から居住者動態をまとめた（表- 2参照）。

これによると入居後亡くなった人が多い住宅が目立つ。神戸市営住宅の入居者の年間平均死亡率は1.5～2.0％だそうだが、久二塚西ふれあい住宅は入居から5年半の経過で19名が亡くなり死亡率は6.0％／年であり、真野ふれあい住宅は8名が亡くなり死亡率は3.3％／年である。この2住宅は多世代居住であるが共に神戸市長田区の下町にあり、入居時に既に70歳代後半から80歳代の人が多かったからであろう。

また、加齢によって自立生活ができなくなり、特別養護老人ホームやケアハウスへ移った人もおられ、第一次入居当時から住んでいる人の割合は住宅により差が大きい。亡くなった人が多い久二塚西ふれあい住宅と真野ふれあい住宅は、第一次入居時からのほぼ5年半経過したときの第一次居住者率はそれぞれ58％と65％で、居住者の入れ替わりが他の住宅に比べて特に大きい。ふれあい住宅では1DKは単身者、2DKは2人家族、3DKは3人以上家族の入居条件であるが、2DKで一人が亡くなってひとり住まいになっている住戸（2DK入居戸数に対するひとり住まい率）が32％ある。今後このような状況は増えるし、3DKでも同様な状況になり、1住宅ごとの家族人数が減ると計画人口に対応して設けられた協同スペースの維持運営も難しくなる。同一住宅内で家族人数に見合った住戸の住み替えや仲良しの隣人との同居（シェア居住）ができれば、新規入居世帯によって居住人数が増え協同居住の活性化に繋がるだろう。なお、新しい入居者を迎えた時には各住宅ではふれあい生活に速く溶けこむようにと、食事会やお茶会などをして歓迎している。（上述の内容は2004年5月の状況で、2007年8月現在では、多くのふれあい住宅でも入居者の入れ替わりが多くなり、入居が開始された当初からの居住者が1／3ぐらいになったという住宅もある。しかも新しく入居される人がかなりの高齢で、ふれあい住宅のふれあい活動はますます困難を極めている）。

7. 居住者のふれあい活動の変化

ふれあい住宅の財産は、豊かな協同室と協同室を核にした住人の日常的なふれあい活動にあると言えるが、これらが住人の加齢によってその輝きを失いつつある。

震災の辛い体験をした人たちは入居当初は、新しい住まい方に戸惑いながらも自治会役員の奮闘やコレクティブ応援団等の外部サポーターの協力を得て、希望を膨らませて和やかに食事会やお茶会をスタートさせた。幾つかの住宅では住人たちのトラブルも発生したが、しばらくすると住人たちの自主的なふれあい生活の運営がなされるようになり、月ごとの食事会、週ごとのお茶会やモーニングサービス（朝食会）などがあり、クリスマス会、忘年会、お餅つき、新年会、雛まつり等々の節季行事が行われていた。これらのふれあい活動を通して短期間のうちに住人たちは親しくなり、信頼関係を育んできた。「誰かのお葬式を重ねるごとに皆の気持ちが寄り添っていくわ」という声も聞かれた。

その後、住人の加齢とともに少しずつ定例の行事は減少したが、それでも2001年の時点では表- 3のようなふれあい活動が続けられていた。それが2004年5月実施の第二次ふれあい住宅カルテをみると、様相はかなりちがっている。一部の住宅を除いて多くの住宅が定例的な食事会やお茶会はやめており、節季の行事も少なくなっている。ゴミステーションや共用廊下の清掃を人材センターに外注した住宅もある。また、ふれあい住宅独自の活動をやめて地元の自治会や老人会の行事に参加するようにしている住宅もある。一方、そんな中で外部サポートの協力でお茶会を継続している、または再開した住宅もある。元気な住人がボランティア登録をして活動助成金を得て友愛訪問や安否確認をしたり、同一敷地内に隣接の住宅と一緒にお茶会を続けている住宅がある。

住人の自律したふれあい活動の減少の要因は、何と言っても住人の加齢によって活動エネルギーがなくなってきたことや自室にこもりがちな人が出てきたこと、新しく入居してきた人がふれあい住宅の住まい方を知らないことなどがあげられる。なお、住人の中には定例の食事会を楽しみにしていたと言う人は多く、また行事は減ったがこれまでの行事を通して住人同士の信頼が深まり、人間関係は良いとい

表- 3　ふれあい住宅の主なふれあい活動　（「第一次ふれあい住宅カルテ」2001. 7.診断より）

久二塚西　58戸	・総会と新年会、役員選出（年１回） ・協同スペースの大掃除、モーニングサービス、役員会（月１回） ・雛祭り食事会、端午の節句食事会、忘年会、臨時集会
片　山　6戸	・食事会（月１回）　・地域の人たちとの食事会（３ヶ月に１回） ・忘年会、新年会、雛祭り、クリスマス会、夏休み地域の子どもたちとの交流
真　野　29戸	・モーニングサービス（月２回）　・役員選出（年１回）
大倉山　32戸	・各階食事会、１～４階の合同食事会、協同スペースの大掃除（月１回） ・朝食会（週１回）　・保健衛生講習会（年２回） ・夏祭り、敬老会、クリスマス会、餅つき大会　・有志のボランティア活動（友愛訪問、安否確認）
脇　浜　44戸	・全員集会（年２回）　・役員会（２ヶ月に１回）　・協同スペースの大掃除、お茶会（月１回）
南本町　27戸	・総会と役員選挙（年１回）　・食事会、協同スペースの大掃除（月１回） ・ぜんざい会、節分豆まき、雛祭り、端午の節句、素麺大会、敬老会、クリスマス会、 ・有志のボランティア活動で1号棟と2号棟合同のお茶会（月３回）
岩屋北町　22戸	・モーニング喫茶、デイサービス食事会、お茶会（週１回） ・新年会、地域の盆祭り、ビンゴゲーム、餅つき大会、地域の敬老会
福　井　30戸	・お茶会（月１回） ・ぜんざい会、雛祭り、七夕祭り、敬老会、クリスマス会
金楽時　71戸	・各階食事会（年６回）　・喫茶（週１回） ・ふれあいコンサート、盆踊り大会、秋祭り、消防訓練、秋のクリーン運動、餅つき大会
久々知　22戸	・総会、年期末臨時会合、１､2号棟合同会議（年１回）　・食事会（年３回） ・定例会、お茶会、手芸会、囲碁将棋会、健康相談会、カラオケ（月１回） ・新年会、春祭り、夏花火大会、敬老会、餅つき大会

う声も少なくない。ひとつ屋根の下に暮らしているという連帯感があり、ふれあい住宅では今まで孤独死はなく、夜中に誰かが救急車で運ばれていくような事態が生じたときには隣人が付き添って行く。また、自分たちだけでやるエネルギーはないが何とかして住民同士のふれあいの場を持ちたいという願いをもっている人は少なくない。住人が自分たちでふれあい活動を行うエネルギーがなくなった時、継続した外部サポートの導入が望まれている。例えば、県営岩屋北町ふれあい住宅と隣接の県営シルバーハウジングでは、入居から継続して神戸大学のボランティアサークル「灘地域活動センター」が毎週土曜日の午後「お茶屋いわや」を開いており、今や周辺地区の住民も含めて毎週50人ぐらいの参加があるという。県営福井ふれあい住宅では、協同室を地元で宅老所を運営しているNPOに貸し、地域の人も参加できる食事会、映画会などをしてもらっている。さらにLSA相談室を使って市社協、SCS（高齢世帯サポーター）、看護師が月２回来て健康相談を行い、地域の人も参加している。

筆者が考えているアイデアのひとつに公的介護保険制度の活用がある。現行の介護保険制度ではホー

神戸大学のボランティアサークル「灘地域活動センター」が開く県営岩屋北町住宅の「お茶屋いわや」

ムヘルパーの利用は個人契約であるが、利用者がグループで契約して、家事援助の集約化ができないだろうか。例えば、家事ヘルパーの食事づくりを依頼している人たちが集まって協同室で食事を３、４人分まとめて作ってもらって一緒にいただく。これはふれあい住宅なら実現できそうである。元気な居住者たちも一緒になって作れば定例の食事会が再開されたことになる。こんな提案をある地域の福祉のまちづくり会合で話をしたら、介護保険事業者からは一笑に付されたが、ひとりのヘルパーが「私も常々そう感じている。一人分の食事づくりは難しい。２、

３人分まとめてつくった方が食材の買い物もしやすく、調理もしやすく、味も良くなる。利用者さんもひとりぼっちで食べるより、みんなで一緒に食べると楽しく美味しく食べられる」と発言してくれた。現行の制度上では難しくても、まず運用面で工夫をしてできそうな住宅で試してみたいと思っている。あるいは、希望者たちが食事づくりの有償ヘルパーを共同で雇うことも一法であるし、それを元気な人が有償で行うことも考えられる。

これはふれあい住宅に限った提案でなく、町中にお住まいの高齢者、近隣の２、３人のヘルパー利用者がまとまってグループとして契約し食事を一緒に作ってもらって、どこかのお宅でおしゃべりしながら一緒に食事タイムをもつ。ケアマネジャーやヘルパーが近隣に住む要支援者や要介護者のネットワーク化を図り，介護保険制度を利用していない人に対しても目配りをして、地域のふれあいづくりのコーディネーターとなるような制度改善が望まれる。介護保険制度のケアマネジャーやヘルパーの新しい役割として希望したい。

余談になるが、昨年のふれあい住宅連絡会でこんな報告がなされた。

「介護保険制度のヘルパーが高齢者の閉じこもりを促進しているのよ」「えっ、なんのこと？」。つづいて説明された話はこうである。

「ふれあい住宅」の住人は人恋しくなると協同室や廊下に出てきて、隣人とおしゃべりをしていた。そこで今日のスーパーのお買い得品などの情報を得て今晩の食事について思いをめぐらし、買い物に行こうという気力をだす。しかし、ホームヘルパーに来てもらうようになって、無理して買い物に行かなくてもよい、食事は自分で作らなくてもよく、体はずい分と楽になったが、今までのように隣人と顔を合わせることもなく、一日中、誰とも話をしないで自室でテレビを眺めてすごすようになり、鬱状態になる人がでてきた。さらに認知症を誘発した人もあり、早朝や夜中に協同室をうろつくようになった。また、整理整頓が苦手で自室の掃除ができない人もおり、ゴミが共用廊下まであふれ出していたが、ホームヘルパーが入ってくると今まで見えていたそのような問題も見えなくなる。より一層、自室から出てこないで全く「閉じこもり」状態になりがちである。隣人がヘルパーにその人の様子を尋ねても個人情報保護法で言えないと言う。やがて鬱病や認知症の症状がすすみ、「ふれあい住宅」に住めなくなって移って行った人もいるというショッキングな話だ。介護保険制度の功罪、個人情報保護法の功罪について考えさせられた。

8. 接続した安定居住のための居住支援に向けて

被災地から発信した高齢者コレクティブ住宅は、本来のコレクティブ居住とは異なるが、高齢社会の安心居住のひとつのモデルとしていくつかの自治体（例えば、長崎県営本原すこやか住宅、大阪府営門真御堂ふれあいシルバーハウジング、埼玉県営蕨ふれあい住宅、豊橋市営旭本町高齢者住宅と池上住宅等）でも事業化された。いずれの事業も計画段階や入居募集前から入居後に至るまで、新しい住まい方の周知のための説明会やワークショップを行い、建物建設に加えて、入居前後の協同居住の学習や継続した居住支援など、ソフト面の住宅供給の大切さが認識されたようだ。

全国に先駆けて事業化された高齢者協同居住のふれあい住宅は10年近くの居住を経て記述したような新たな展開の時期を迎えている。また、震災直後の計画段階では具体像として予測できなかった今後の展開も見えてきた。今までの過程はハードな住宅建設（筆者はこれを第１段階の住宅供給と呼んでいる）とモデル居住の模索・試行のための居住支援の過程であり、今後は将来とも安定した居住が持続できるためのシステムづくりと住人ニーズに応じた居住サポートを提供する段階（持続したソフトな住宅供給）に入る。筆者はこれを２段階住宅供給方式と呼び、その必要性を強く感じている。

〈参考図書〉

「コレクティブハウジングただいま奮闘中」石東直子＋コレクティブ応援団著、学芸出版社　2000年８月

「在宅最前線住宅」としてのシルバーハウジング
ーデンマークの高齢者住宅と比較してー

関西学院大学大学院研究員　松岡　洋子

Aging in place（エージング・イン・プレース：地域居住）という言葉をお聞きになったことがあると思います。これは、「老いの過程で障害があらわれたり虚弱化しても自宅・地域で住み続け、これまでどおりの暮らしを継続する」という居住のあり方を指しています。日本流に言えば「住み慣れた地域でその人らしく最期まで」と言われているものであり、施設入所を遅らせたり、避けたりするのに効果的な、施設の対極にある概念です（Callahan,1993）。

本稿では、地域居住についてのデンマークの特徴をまとめた上で、日本との比較を行い、シルバーハウジングの意義とこれからの展望について私なりの所感を述べてみたいと思います。

1．日本でも始まった「地域居住」の取り組み

1）世界の潮流とデンマーク

地域居住という言葉で表される「施設から地域へ」という動きは、1970年代から世界的な潮流として発展してきました。イギリスのシェルタード・ハウジング（保護住宅）、スウェーデンのサービスハウスなど、施設に代わる住まいの形態は各国でさまざまな試みがなされました。アメリカにおいては当初、地域の高齢者向け住宅が健康な高齢者のみを対象に造られたため、住人の虚弱化に対応して（在宅ケアを利用するのではなく）住宅に介護スタッフを常駐させることで手厚いケアが提供できるようにしました。これは「不適切な施設化」と表現され、「純粋な高齢者住宅の発展や地域に基盤をもつケアサービスの成長を阻んだ」とネガティブに評価されています（Tilson & Fahey, 1990）。

これに対して「住まいとケアを分離する」という考え方によって脱施設をはかり、ケアスタッフが常駐しないバリアフリー住宅「エルダーボーリ（高齢者住宅）」を地域にきめ細かく整備し、在宅24時間ケアによって施設と変わらないケアを地域で提供できるようにしたのがデンマークです（松岡、2005）。私は日本の皆さんにわかりやすく鮮明に理解していただくために「素ッピン住宅」と称していますが、日本のシルバーハウジングは制度上の位置づけは異なるにしろ、介護スタッフが常駐せず在宅ケアを利用して自立的な生活を支援する完全独立住宅であるという点で、デンマークの素ッピン住宅と同等のポジションにあります。

2）日本における「地域居住」の取り組み

日本でも、「2015年の高齢者介護」（2003年）において「施設か在宅かの二元論から脱却」する方針が打ち出され、介護保険改正法（2006年４月）では「住み慣れた生活圏域内での365日24時間ケア」を目指した地域密着型サービスが制度化され、高齢者居住安定法（2001年）、住生活基本法（2006年）の制定によって「ケア」「住まい」共に地域居住を可能にするための制度が整えられつつあります。

こうした動きを見ると、日本でも施設のみに依存する時代は過去のものとなり、地域居住に向けて本格的な取り組みが進められていることがわかります。車椅子生活になったとしても、自分のもてる能力を徹底して活用して生活ができるような自立型バリアフリー住宅を地域に整備し、在宅24時間ケアで支えていく‥‥こうしたことから、シルバーハウジングとその取り組みは、これからの地域居住の進展に重要な意味をもち、多くの示唆を与えるものとなります。

2．デンマークの高齢者住宅

1）「住まいとケアの分離」の概念

1988年の脱施設にあたって、デンマークでは「高齢者は介護の対象ではなく、生きる主体である」というテーマを確認し、施設の問題点を「住まいとケアがパッケージ化されている」点に求めました。「ケ

アが住まい（施設）にくっついているから、より多くのケアが必要になった時にケアを求めて引っ越ししなければならない」。しかし、引っ越しのたびにリロケーション・ダメージを受け、しかも施設のケアは高齢者を「介護の対象」として見る人間観に基づいていますから過剰になりがちで住む人の生命力さえ奪ってしまう大規模集団ケアです。ならば「住まいとケアを分離」して、その資源（施設ケア）を地域で共有できるようにしてはどうか、つまり在宅ケアという形で地域に住む市民が共に使えるようにしました。「ケアは、住まいではなく人に付くべき」というわけです。

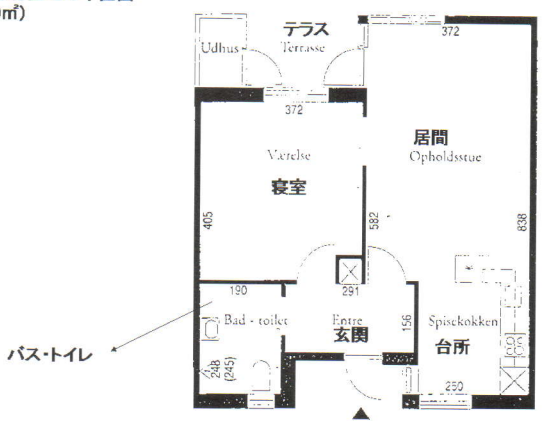
現在、デンマークには高齢者住宅（素ッピン住宅）が高齢者人口の６％レベルで整備され、十分に自立生活できるように早めの引っ越しをしています（松岡、2001）。1995年残存する施設が劣悪な居住環境にあることがわかり、これらを建て替える形で「介護型住宅＝プライエボーリ」が建築され始めました。介護スタッフが常駐し食事も共にとりますが、プライエボーリも高齢者人口の６％あります。素ッピン型と介護型の住まいを加えれば、12％の整備率となります。在宅24時間ケアはすべての市において完璧なまでに整い、在宅でも施設と変わらないケアが受けられますので、自宅、高齢者住宅、施設・・・どこに住もうが、同じケアが受けられる安心が保障されています。

２）「生きる主体としての高齢者」観に基づく高齢者住宅

素ッピン住宅（高齢者住宅）は平均60㎡の広さがあり、商店や駅、郵便局、医院への近さを考慮して建設されます（図-１）。家賃は12万円前後と安くはありませんが、所得に応じて家賃補助が市から支給されますので、すべての市民に門戸が開かれた公営賃貸住宅となっています。各市がその供給に責任を持つことが法律で定められており、その特徴は次のようにまとめられます。

① バリアフリーの完全独立住宅（各戸に、リビング、寝室、台所、トイレ・バスがある）
② 小規模で市内に分散（30戸前後の規模が多く、人口1万に対して2-3個所）しているので、生活圏域内での住み替えが可能
③ 多くが隣に地域に開放されたレストラン付きアクティビティ・ハウス（活動センター）があり、まさに「地域の気軽な溜まり場」（毎日気軽に食事ができ、ビリヤード、ブリッジなどが楽しめる）
④ 比較的元気なうちから住め、必要に応じて在宅ケアを利用（介護スタッフは常駐しない）
⑤ 在宅ケアを利用することで介護が必要になっても住め、最期まで住める「終いの住みか」（認知症の場合を除いて、介護の必要度が高くなったからと言って施設入所を余儀なくされることはない）

高齢者住宅の平面図
(60㎡)



【図-1】一般的高齢者住宅住人（１戸）の平面図

３）高齢者住宅で最期まで --イェンセンさんの例--

高齢者住宅（25戸）に約13年間住み、そこで亡くなられたイェンセンさん(93歳)の例を見てみましょ

【写真-１】高齢者住宅で最期まですごしたイェンセンさん

う（写真１、写真２）。彼は60歳代の時の事故がきっかけで義足をつけていました。80歳の時にそれまで利用していた活動センターの横にある高齢者住宅に引っ越し、89歳の時、車椅子を利用するようになら

【写真 - 2】高齢者住宅（25 戸）の町並み

【写真 - 3】活動センターでの「男の料理教室」

【写真 - 4】活動センターでのビンゴ大会（月に２回）

れました。高齢者住宅はトイレが広く車椅子ごと入れるため、自分で移乗して用を足すことができます。ヘルパーが朝８時にやってきて整容を手伝い、横の活動センターまで送ってくれます。彼は、センターにやってくる人と話をしたり手芸・機織りをするのが好きで、話し相手のいない人には声をかけるという役割をもっていたので、毎日ここで食事をとって時間を過ごしていました（写真３）。他にも、男の料理教室、木工、機織り、コーラス、ビンゴ大会などが利用者の手で企画されています（写真４）。元気な高齢者だけでなく、失語症クリニックも開かれているのでさまざまな利用者が集まってきます。夕方家に帰ると、夜間ケアのヘルパーがやってきて簡単な夕食づくりを手伝い、９時前に就寝介護に再度やってきます。ペンダント式のアラームを首に下げているのでボタンを押せばコールセンターにつながり、深夜でも巡回の看護師がやってきます。

残念ながら93歳を過ぎるころ咽頭に腫瘍ができて、入退院を繰り返すようになりました。急性期の治療が終わり病状が安定すれば、高齢者といえども退院となります。ショートステイを利用しつつ再入院し、発病から２カ月を過ぎるころ、最期は我が家である高齢者住宅に帰って最期の時を迎えました。

デンマークではすべての市民に家庭医がついていて、家庭医を通さなければ専門病院にもいけません。家庭医はゲートキーパーの役割を果たし、ターミナル期においては在宅での看取りのキーパーソンとして、在宅ケアスタッフと連携して働きます。イェンセンさんは、これまで世話になってきた同じメンバーからケアを受けながら、息子さんやお孫さんも頻繁にやってくる中で高齢者住宅において最期の時を迎えました。

このように、高齢者住宅は障害があっても今ある能力を徹底して使い、人々との交流を楽しみながら生活することを可能にする住まいであり、最期まで住むことができる「終いの住みか」なのです。

４）高齢者住宅で最期まで

ではデンマークの高齢者住宅の一般的な住人像はどのようなものでしょうか。

シルバーハウジングの未来像

表１は両国における住人の比較ですが、補助器具の利用率や在宅サービスの利用率（80％）、平均年齢（デンマーク人の平均寿命は男女ともに約５歳若いので、５歳という差は実質的には10歳と考えられます）から誤解を恐れずに推測するならば、その中心的な状態像は要支援１-２から要介護１-２レベルで、３-５レベルも10％程度いることになります。

また、高齢者住宅では１年間に約15％の住人が退去をしますが（松岡､2005)、その約70％が高齢者住宅での死亡、約30％が認知症などの理由による施設への住み替えです。このことは、高齢者住宅が介護が必要になっても十分に住め、最期まで住める住宅であることを如実に示しています。そしてそのためには、ハコモノの整備とともに、制度としての在宅ケアや在宅医療、リハビリ、また地域における「気軽な溜まり場」の創造や家族を含めた地域に暮らす人々の交流といったインフォーマルな要素も重要であることがわかります。

【表-１】 高齢者住宅住人の平均年齢・補助器具利用・在宅ケア利用

		デンマーク（高齢者住宅268人対象）	日本（シルバーハウジング242人対象）
高齢者住宅住人の平均年齢		79.8歳	74.2歳
補助器具利用	杖	38.4%	17.9%
	歩行器	47.4%	16.0%（買物カート）
	車椅子	14.9%	3.4%
	電動ベッド	9.3%	1.9%
	移乗用リフト	1.9%	0.4%
在宅ケア利用		77.2%	20.1%

（調査2007年6-8月：松岡洋子）

３．日本のシルバーハウジングの意義と課題

シルバーハウジングは、デンマーク流「住まいとケアの分離」の考え方に基づく純然たる高齢者住宅（素ッピン住宅）です。重野妙実さん（神戸市社会福祉協議会）は「在宅最前線住宅」と称しておられます。

現在日本では、高齢者施設（３大施設、グループホーム、特定施設など）が103万人分あり、高齢者人口の約3.8％に相当します（厚生労働省介護給付実態調査月報　H19年５月)。これに対して素ッピン住宅は、シルバーハウジング2.1万戸、高齢者向け優良賃貸住宅2.8万戸しかなく、有料老人ホーム（住宅型）1.5万、高齢者円滑入居賃貸住宅8.8万戸を含めても１％にも達していません。高齢社会における高齢者居住の目安は施設系５％+住宅系５％と言われていることからも、日本における素ッピン住宅の整備は火急の課題であり、これからこの領域の整備が進められると予想されます。高度経済成長期に建てられた団地（オールド・ニュータウン）の再生についてもこれからの重要な課題ですが、ハコモノ発想だけでは、安心と活力の両者を備えた人間味あふれる再生は可能です。

その際、LSA業務をはじめとするシルバーハウジングの取り組みが、実践面での情報提供という形で大いに役立つと思います。この点についてはみなさん書かれると思いますので、以上述べましたデンマークの知見から気づいたことを述べたいと思います。

１）高齢者住宅に不可欠なLSA

高齢者住宅の整備にあたっては、とくに在宅ケアの整備が遅れている日本では、高齢者住宅の基本サービスとしてLSA付帯が不可欠となります。神戸のシルバーハウジングは阪神・淡路大震災の被災者の方々の恒久住宅としても重要な意味を持っていますが、これまでに蓄積されたノウハウや課題を全国レベルで発信し、来るべき地域居住の時代に活用していただきたいと思います。

また同時に、かつてケアが施設から分離されたように、LSA業務が住まいから分離され、地域全体の見守りサービスとして発展する可能性もあり得ます。その時、この費用を誰が負担するのか？地域住民が自分たちの問題として立ち上がるのか？新しい課題がさまざまに生まれるでしょう。

２）食事と社会交流

シルバーハウジングには、LSAや住人の方によって趣味の会やふれあい喫茶などさまざまな交流の場が用意されています。今後はこれらにプラスして、近くに特別養護老人ホームなどがある所では、施設資源を開放して近くに住む高齢者が自由に利用できるようなシステム設計をしてはどうでしょうか。い

つでも行く場所がある、自分の居場所がある場にいつでも行けるというのは究極の介護予防です。とくに食べることは人間の基本行動であり毎日のことですから、施設食堂の地域への開放によって「気軽な溜まり場」づくりがスムーズに進むのではないでしょうか。こうした取り組みはシルバーハウジング介護力強化モデル事業として始められているようですので、モデル事業が一般事業へと発展していくことを望みます。

3）在宅24時間ケアによる「最期まで住める住宅」化

最後に「在宅最前線住宅」「素ッピン住宅」としてのシルバーハウジングに今最も強く求められる課題は、行政・関係機関を巻き込んだ在宅24時間ケアの整備による「介護が必要になっても（独居でも）住める住宅」化、「最期まで住める住宅（ターミナル型住宅）」化だと考えます。

というのも表1に明らかなように、歩行器・車椅子利用者は少なく、現時点では神戸のシルバーハウジング住人は今後多くの介護を必要とされるであろう方々が中心となっています。今後の介護ニーズの高まりに対して、「住宅の施設化」というアメリカの轍を踏むのではなく、在宅ケアの整備・提供によって「最期まで住める住宅」化の取り組みを目指していただきたいと思います。

その理由は、アンケート調査では、回答者のうち約85％が「最期までここで暮らしたい」という希望を持っておられ、同時に「継続が可能かどうか不安」という方が76％と多く、にも関わらず「施設には行きたくない」という拒否組が67％もおられたことが明らかになったからです。この思いをしっかり受け止めて実現するためにも、ターミナル住宅化は最重要の課題だと考えます。

デンマークの歴史は、高齢者住宅が施設入居への「つなぎの住宅」ではなく、基本的に「最期まで住める住宅」でなければならないことを教えてくれています。そのためにも日本のこれからの地域居住の推進に向けて、基本サービスとしてのLSA業務や社会交流の促進、さらなる在宅ケア・在宅医療の整備と連携の重要性を、貴重な実践から情報発信していけるのはシルバーハウジングに他ならないと考えます。今後の取り組みに期待を寄せ、これからも学ばせてください。

2007年夏、神戸市内4カ所のシルバーハウジングにお住まいの方にアンケート調査をさせていただきました。LSAの方には配布を中心とするさまざまなお手伝いをいただきましたが、住人の方との絆の強さを身をもって教えていただきました。この場を借りまして、住人の方、LSAの方、神戸市社会福祉協議会福祉部地域福祉課、神戸市介護保険課の皆様方に御礼を申し上げます。ありがとうございました。

【参考文献】
・Callahan, J. J., Jr. Eds, (1993). Aging in Place. Baywood Publishing Company, Inc., Amityville, New York
・Tilson, D., (1990) *Aging in Place: Suppporting the Frail Elderly in Residential Environments*, Professional Books on Aging, Scott, Foresman and Company; Glenview, Illinois London
・松岡洋子（2001）「老人ホームを超えて」（かもがわ出版）
・松岡洋子（2005）「デンマークの高齢者福祉と地域居住～最期まで住み切る住宅力・ケア力・地域力～」（新評論）

資　料

資　料

シルバーハウジング入居者調査（1999年と2006年の比較）

神戸市保健福祉局・神戸市社会福祉協議会・神戸親和女子大学福祉臨床学科 講師　重野　妙実

1．調査目的

阪神・淡路大震災後、神戸市では高齢者向け復興住宅としてシルバーハウジングを平成10（1998）年、11（1999）年に大量に建設した。シルバーハウジング開所当初はアルコール依存、心の病、認知症等で体調を崩す入居者も多く、震災により地縁血縁を絶たれ、緊急連絡先のない人も多く、ニーズを客観的に把握して施策に繋ぐことや課題をLSAの研修に入れるために実施したのが平成11（1999）年の調査である。

平成18（2006）年の調査は同項目で実施した。現状のニーズ把握と、今後の研修や施策計画のために実施するとともに、平成11（1999）年と平成18（2006）年を比較することによりシルバーハウジングに住むことの効果測定をした。

2．調査時期

平成11（1999）年11月
平成18（2006）年 4月

3．調査対象

シルバーハウジング入居者

平成11（1999）年　在宅 2,289名　この時期入院入居等で不在101名は含まない。

平成18（2006）年　在宅 2,657名　この時期入院入居等で不在170名は含まない。

4．調査方法

シルバーハウジング生活援助員が日常の訪問活動で入手した情報による。

5．調査内容

（1）年齢別入居者
（2）就労状況
（3）外出の回数
（4）行事参加
（5）家事について
（6）かかりつけ医の有無
（7）最近3ヶ月間に利用したサービス
（8）障害老人の日常生活自立度（寝たきり度）判定基準による
（9）痴呆性（認知症）老人の日常生活自立度判定基準による
（10）身体障害者手帳の有無
（11）療育手帳の有無
（12）精神障害者保健福祉手帳の有無
（13）緊急連絡先の有無
（14）公的サービス以外の援助の有無
　①日常的援助
　②緊急時援助
（15）生活援助員から見て心配していますか。
　①アルコール依存症
　②心の病
（16）介護保険認定…平成11（1999）年は介護保険実施前で調査していない。
（17）介護保険認定申請…平成11（1999）年は介護保険実施前で調査していない。

6．実施主体

平成11（1999）年11月　神戸市保健福祉局・（財）こうべ市民福祉振興協会
平成18（2006）年 4月　神戸市保健福祉局・神戸市社会福祉協議会

（1）年齢別入居者

1999年の人数・平均年齢

	人　数	平均年齢
男性	908人	71.2歳
女性	1,381人	73.3歳
全体	2,289人	72.6歳

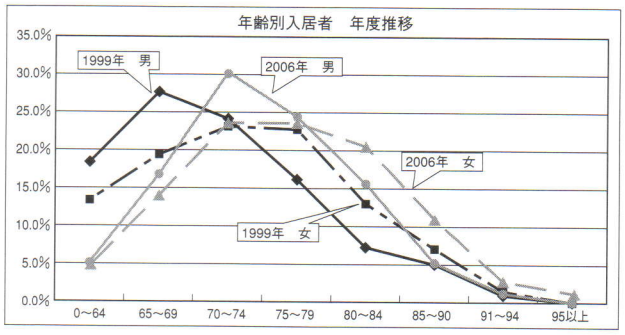
	人　数	平均年齢
高齢単身	1,402人	73.6歳
高齢のみ	826人	71.0歳
その他の世帯	57人	65.6歳
不明	4人	73.5歳

2006年の人数・平均年齢

	人　数	平均年齢
男性	942人	74.5歳
女性	1,546人	76.4歳
全体	2,488人	75.7歳

	人　数	平均年齢
高齢単身	1,575人	76.7歳
高齢のみ	829人	74.4歳
その他の世帯	56人	67.0歳
不明	28人	71.7歳

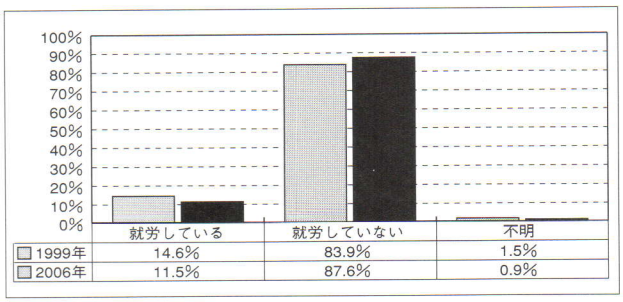
年齢別入居者（1999年・2006年比較）



平均年齢は、男性が3.3歳増えて74.5歳に、女性が3.1歳増えて76.4歳になっている。男女平均では3.1歳増えて75.7歳である。平成18（2006）年を見ると、男性が70

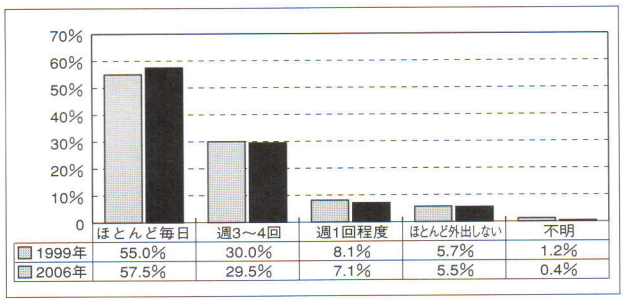
～74歳をピークにした鋭角な山形に対して、女性は70～84歳の後期高齢者が多い緩やかな山形になっている。男女を含めてではあるが入居者2,488人中1,575人・1,575世帯である63.3％は単身世帯である。単身世帯以外の913人の複数世帯を二人世帯として換算すると456世帯が複数世帯である。世帯合計から単身世帯を割り出すと77.5％は単身世帯である。高齢単身者が元気に安心して安全に暮らすことがシルバーハウジングでは求められている。

（2）就労状況



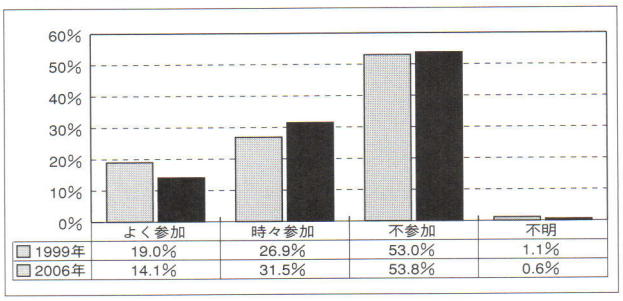
就労している人は、14.6％から2.9％減って11.5％となっている。１割強の人が就労している。

（3）外出の回数



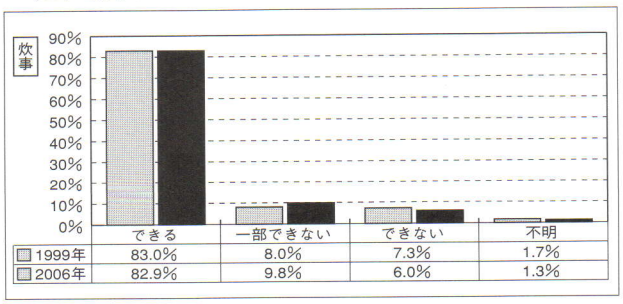
外出の回数は、行事参加と並んで、閉じこもることなく元気に生活をしている指標になると考えてこの統計を取っている。ほとんど毎日外出している人が、2.5％増えて57.5％になっていることは喜ばしいことである。週３～４回程度でかける人は約３割で、87％の人が外出可である。反対に週１回程度やほとんど外出しない人が１割以上になっている。

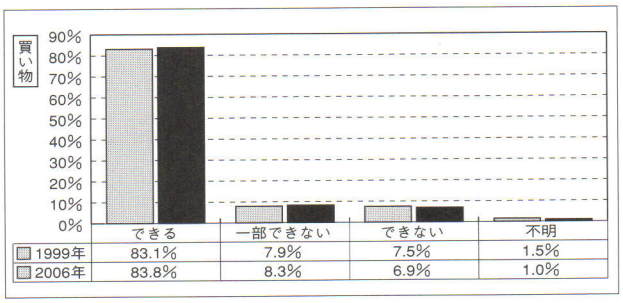
（4）行事参加

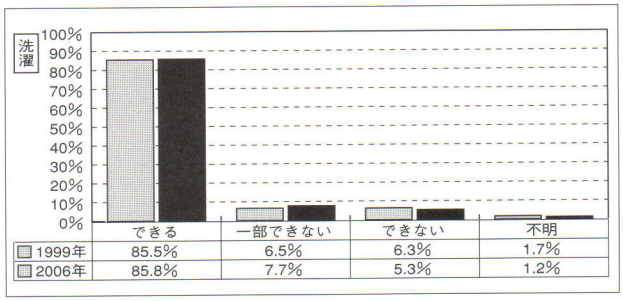


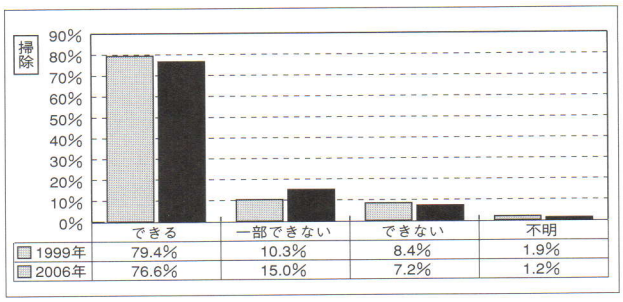
行事参加のよく参加は4.9％減り14.1％であった。時々参加は4.6％増えている。不参加は53.8％であった。行事には半数弱が参加しているが、半数強は不参加である。不参加の理由は就労している、寝たきりに近い状況で外出できない、自分の好みの会がない、人と付き合うのが苦手など数々あるが、ご近所同士の支えあいのためにも楽しい会で馴染みの関係がつくれるようにLSA や支援者は行事企画をしている。半数近くが行事参加していることは一般住宅と比較すると非常に高い参加率である。

（5）家事について

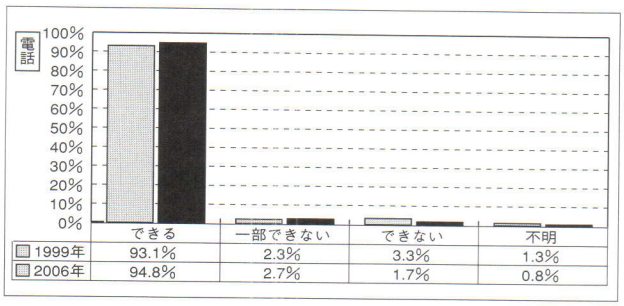






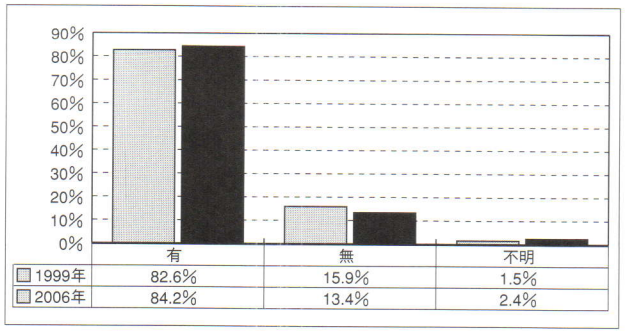


資　料



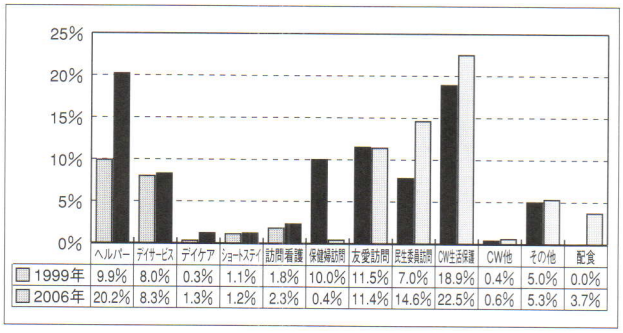
家事については、自立度を見る指標になる。炊事・買い物・洗濯についてはほとんど変化がない。８割以上の人ができ一部できないを入れると９割以上の人が家事はしている。掃除については、できる人が2.9%増えているが、一部できない人は増えており、これも９割以上の人が掃除をしている現状がわかる。電話については、95%弱の人が自分で利用できている。

（６）かかりつけ医の有無



かかりつけ医のある人は1.6%増え、84.2%がかかりつけ医を持っている。

（７）最近３ヶ月間に利用したサービス



介護保険は平成12（2000）年４月に開始しており、平成11(1999）年は介護保険開始前年、平成18(2006）年は介護保険が定着した時期である。ヘルパー利用は２倍近く増え全体の２割がヘルパー利用している。生活保護のワーカー訪問は22.2%の人が受けている。

（８）障害老人の日常生活自立度（寝たきり度）判定基準による

	自立	J1	J2	A1	A2	B1	B2	C1	C2	不明	合計
1999年	74.4%	11.3%	6.5%	2.3%	1.8%	0.7%	0.3%	0.1%	0.2%	2.3%	100.0%
2006年	74.1%	9.6%	6.4%	3.5%	2.3%	1.1%	0.2%	0.2%	0.2%	2.5%	100.0%

障害老人自立度から見ると、何ら障害のない人は0.3%下がっているが、ほとんど差がない。軽度の障害があるが日常生活は自立している人はJ1が1.7%増えJ2は0.1%減っている。屋内では自立しているが、介助なしでは外出できない準寝たきりの人は、A1が1.2%、A2が0.5%増え5.8%の人が準寝たきりである。屋内でも何らかの介助が必要なB1，B2の人も微増して1.3%である。一日中ベッドですごし排泄、食事など介助が必要なC1（自力で寝返りをうつ）、C2（自力で寝返りもうたない）の人が0.2%づつで計0.4%である。

障害老人の日常生活自立度（寝たきり度）から入居者を見ると7年間で大差はないが、徐々に寝たきりの人が増えてきている。

（９）痴呆性（認知症）老人の日常生活自立度判定基準による

	自立	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱa	Ⅱb	Ⅲ	Ⅲa	Ⅲb	Ⅳ	Ⅴ	不明	合計
1999年	87.7%	5.5%	1.7%	1.0%	0.7%	0.2%	0.1%	0.1%	0.4%	0.0%	2.4%	100.0%
2006年	88.6%	4.5%	1.2%	0.6%	1.3%	0.0%	0.4%	0.0%	0.4%	0.0%	2.9%	100.0%

認知症に関しては、認知症を有していない人が0.9%増えて9割弱の人は認知症の症状はない。認知症があっても軽度な人はⅠ・Ⅱともに0.5%減り、5.7%の人が軽度の認知症である。中度重度の認知症Ⅱa～Ⅴの人は合計して0.2%の微増で2.7%となっている。

痴呆症（認知症）老人の日常生活自立度から見ると7年間でほとんど変わっていない。

（10）身体障害者手帳の有無

	有	無	不明	合計
1999年	9.0%	86.5%	4.5%	100.0%
2006年	10.1%	84.4%	5.4%	100.0%

身体障害者手帳を持っている人は1.1増えており、1割強の人が身体障害者手帳を持っている。

（11）療育手帳の有無

	A	B1	B2	無	不明	合計
1999年	0.3%	0.0%	0.0%	95.5%	4.2%	100.0%
2006年	0.2%	0.0%	0.1%	94.0%	5.8%	100.0%

知的障害者の療育手帳を持っている人は、A、B1、B2を足すと、平成11（1999）年、平成18（2006）年はともに0.3%でほとんど変わっていない。

(12) 精神障害者保健福祉手帳の有無

	1	2	3	無	不明	合計
1999年	0.4%	0.0%	0.0%	95.2%	4.4%	100.0%
2006年	0.4%	0.2%	0.1%	86.6%	13.8%	100.0%

精神障害者保健手帳については、不明が多く比較しにくいが平成18(2006)年には、合計0.6%で少し増えている。

(13) 緊急連絡先の有無

	有	無	不明	合計
1999年	93.9%	3.9%	2.1%	100.0%
2006年	95.1%	4.0%	0.9%	100.0%

緊急連絡先ありは1.8%増えて95.1%になっている。シルバーハウジングの緊急通報は緊急連絡先にも通報されること、緊急時には緊急連絡先に連絡をとるためにLSAは最新の緊急連絡先把握に努めていることを考慮すると、4%の人は親族がなく緊急連絡先がないことに関して緊急時の対応方法をその人とともに考えておくことが必要である。

(14) 公的サービス以外の援助の有無

①日常的援助

	有	無	不明	合計
1999年	37.8%	48.9%	13.3%	100.0%
2006年	38.5%	50.4%	11.1%	100.0%

公的サービス以外の親戚や友人から日常的な援助を受けている人は、少し増えて4割弱の人が援助を受けている。

②緊急時援助

	有	無	不明	合計
1999年	61.9%	18.3%	19.9%	100.0%
2006年	64.5%	19.4%	16.1%	100.0%

緊急時の援助を受けている人は2.6%増えて64.5%の人が、緊急時に援助を受けることができるが、公的サービスのみの人が2割弱いる。

(15) 生活援助員から見て心配していますか

①アルコール依存症

	有	無	不明	合計
1999年	3.4%	92.8%	3.8%	100.0%
2006年	2.8%	94.7%	2.5%	100.0%

震災後寂しさを紛らわすためか、アルコールに依存する人に対してLSAは心痛めていたが、平成18(2006)年には、少し減って2.8%となっている。

②心の病

	有	無	不明	合計
1999年	5.6%	86.7%	7.7%	100.0%
2006年	10.2%	86.4%	3.4%	100.0%

心の病は統合失調症や鬱病は減り、認知症が増えている。約1割の人に心の病が見られ今後は、認知症の人に対する個別ケアとともに、元気であるが外出したら戻れない認知症の人を地域で支えることも地域の課題となってくる。

(16) 介護保険認定

	要支援	1	2	3	4	5	非該当	不明	無回答	合計
1999年	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
2006年	10.4%	12.0%	3.1%	1.3%	0.8%	0.2%	2.0%	0.1%	70.1%	100.0%

介護保険は平成12(2000)年からの制度で平成11(1999)年には適応がない。(17)の介護保険認定申請は有が30.3%であった。認定該当者は軽度な要支援〜重度な要介護5まで加えて27.8%であった。

(17) 介護保険認定申請

	有	無	無回答	合計
1999年	−	−	−	−
2006年	30.3%	68.5%	1.2%	100.0%

まとめ

平成11(1999)年11月と平成18(2006)年4月の間には6年5ヶ月の年月を経ている。震災後大規模団地が続々建設される中に被災高齢者のために、高齢者専用のシルバーハウジングが建設された。開所当初の混乱は落ち着いてきている。平成18(2006)年の男女合わせての平均年齢は75.7歳であり、平成11(1999)年の平均年齢72.6歳より3.1歳加齢している。平成18(2006)年には単身高齢者世帯は77.5%で8割弱である。

単身高齢者が多く、年齢を重ねているのに、生活家事能力をはじめ外出・イベント参加等各項目において低下がほとんど見られないのは喜ばしいことである。

シルバーハウジングの入居者自身・LSA・派遣施設・自治会・ボランティア・地域包括支援センター・民生児童委員・神戸市社会福祉協議会、神戸市等関係者が支えあって、「ご近所どうしの支えあい」を目指した今日のシルバーハウジングの生活を作り出しているのである。

資　料

シルバーハウジングの入居世帯状況と生活援助員（LSA）の業務内容（平成19年8月報告内容）

神戸市保健福祉局・神戸市社会福祉協議会

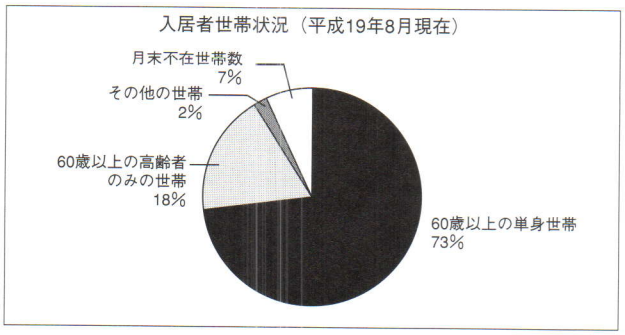
神戸市では、シルバーハウジング生活援助員業務の日々の記録として、「日報」と「月報」の提出を各LSAに依頼している。

ここでは、平成19年８月の「月報」よりシルバーハウジングの入居世帯状況とLSAの業務内容について紹介する。

１．シルバーハウジング入居世帯状況

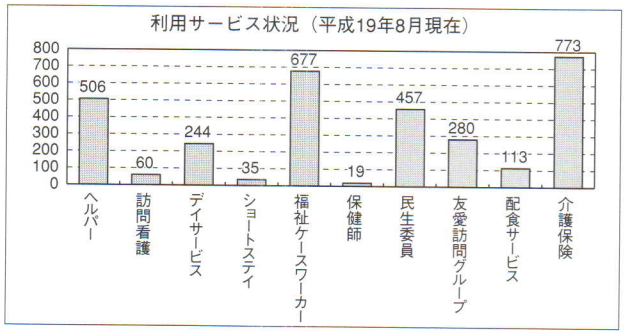
平成19年８月現在の入居世帯数は、2,226世帯。

うち、60歳以上の単身世帯数は1,649世帯で全体の73％、60歳以上の高齢者のみの世帯は395世帯で18％、親族宅で一時的に生活したり、入院や福祉施設へのショートステイ等で自宅を不在にしている月末不在世帯は148世帯で７％、その他の世帯は34世帯2％である。60歳以上の単身世帯が最も多い。



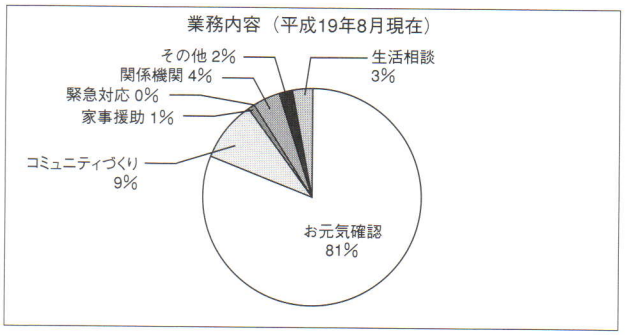
２．入居者のサービス利用状況

介護保険の利用が一番多く、次いで福祉（生活保護）ケースワーカー、ヘルパーとなっている。



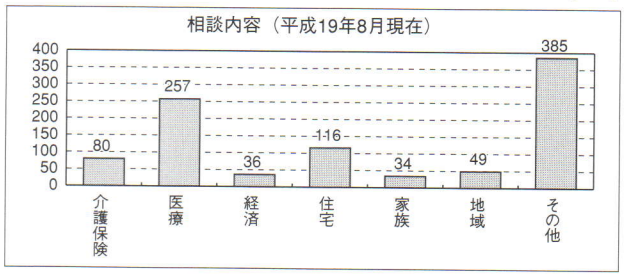
３．LSAの業務内容（入居者個人に関する支援）

LSAの業務内容割合の報告によると、お元気確認（安否確認）業務は81％と業務の大半を占め、ついでコミュニティづくりに関わる支援が９％、関係機関への連絡が４％、生活相談が３％、家事支援は１％である。



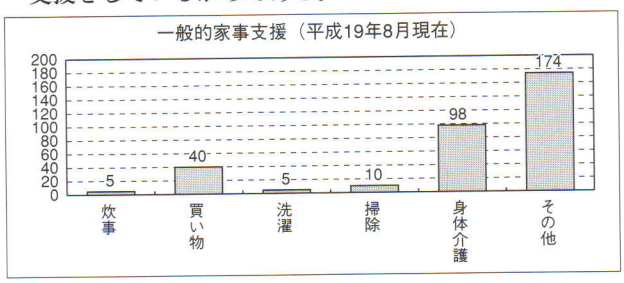
４．LSAの生活相談内容件数（入居者個人に関する支援）（957件）

３．のLSA業務内容のうち、生活相談は３％であるがその内訳を見ると、医療に関する相談が多く、住宅、介護保険と続いている。その他が多いのは、６項目に分けられないさまざまな相談を受けているからである。



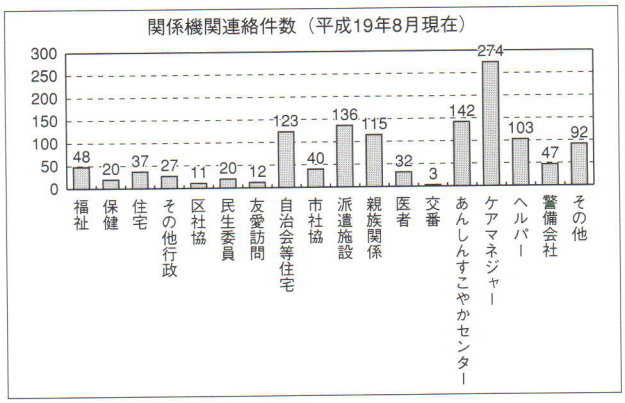
5．LSAの一時家事支援内容件数（入居者個人に関する支援）（332件）

3．のLSA業務内訳のうち、一時的家事支援は1％であるが、その内訳を見ると通院介助も含む身体介護を多く支援しており、次いで買い物となっている。その他が多いのは、電球の球替えや、代筆等さまざまな支援をしているからである。



6．LSAの関係機関連絡件数内訳（入居者個人に関する支援）（1,282件）

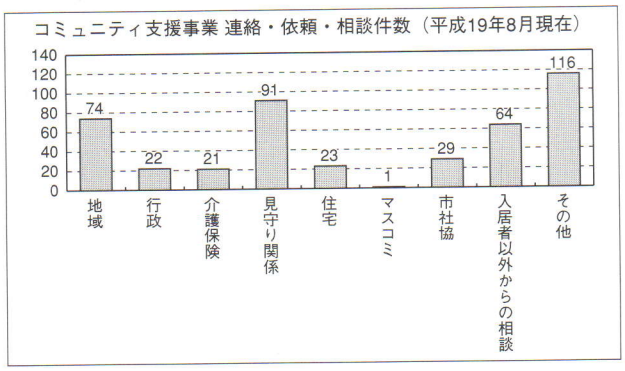
3．のLSA業務内訳のうち、関係機関連絡業務は4％であるが、その内訳を見ると最も多いのはケアマネジャーで全体の5分の1を占める。次いであんしんすこやかセンター（地域包括支援センター）、派遣施設、自治会等住民、親族関係、ヘルパーとなっている。



7．コミュニティ支援に関する連絡・依頼・相談件数（入居者個人以外に関する支援）（441件）

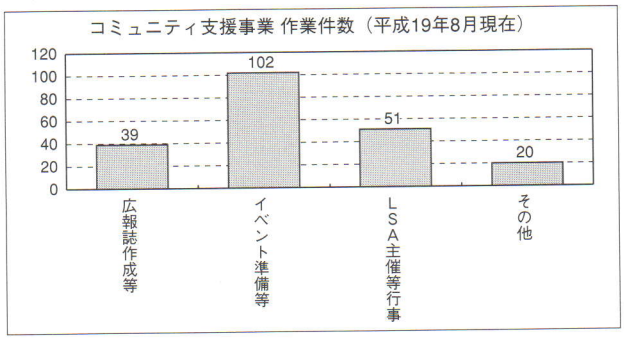
神戸市のシルバーハウジングは、一般住宅との混合住宅も多く、また周辺地域とのコミュニティづくりにも力を入れていることから、シルバーハウジング入居者個人以外からの相談や連絡を受けることが多い。

見守り関係者（区社協、地域福祉活動コーディネーター、見守り推進員、友愛訪問ボランティアグループ等）との相談・連絡・依頼件数が多く、次いで地域（自治会関係者、民生委員、老人クラブ、婦人会、子ども会等）との関わりが多い。



8．コミュニティ支援に関する作業件数（212件）

イベント準備件数（102件）には事業に向けての打ち合わせ会議や作業を含み、39住宅で割ると1住宅あたり月2.6回の会を持っている。広報誌作成（39件）にはLSA便りや行事等のポスター作成を含み、1住宅平均1回の広報誌作成をしている。また、LSA主催等行事（LSAが中心になって企画している会）は51件で、1住宅当たり月1.3回実施したことになる。



資　料

平成18・19年度シルバーハウジング生活援助員会議・研修

平成18年度シルバーハウジング生活援助員会議および地域見守り全市研修内容

	開催日	会議名	内容等	講師等	その他配布物等
H18 ・ 4月	27日(木) 14:00～17:00	第64回 LSA会議	1.講義 ①高齢者虐待防止のための対策について ②あんしんすこやかプランについて 2.情報交換 ①生活援助員派遣事業について ②緊急発報以外の緊急対応の流れ ③ゴールデンウィークの対応 ④日報、月報の記入	1ー①神戸市保健福祉局介護保険課 介護予防推進係 主査 松原雅子氏 ②神戸市保健福祉局高齢福祉部 介護保険課　塩田泉氏	・平成17年度シルバーハウジングにおけるコミュニティサポートグループ育成支援事業の記録(内部資料) ・出前トークテーマ集平成18年度版 ・家族が認知症でないかと心配しているあなたへ ・高齢者の消費者トラブル見守りガイドブック
5月	25日(木) 14:00～17:00	第65回 LSA会議	コミュニティサポートグループ育成支援事業に向けて 1.講義 ①「口腔ケアについて」 ②報告会 「平成17年度コミュニティサポートグループ育成支援事業実施報告とこれからについて」 2.情報交換 ①平成18年度コミュニティサポートグループ育成支援事業について ②シルバーハウジング入居者報告書および入居者名簿について ③シルバーハウジング生活援助員業務における文書保存期間の基準について	1ー①神戸市保健福祉局地域保健課 歯科衛生士　久保田和美氏 ②魚崎南LSA　生和房雄氏 灘の浜(県)LSA 井上かすみ氏　松井淑子氏 広瀬月子氏 ひよどり台LSA 藤田智子氏　壷井信二郎氏	・シルバーハウジング生活援助員マニュアル ・神戸市の介護保険のあらまし ・くらしのかわら版
6月	27日(火) 13:30～17:00	平成18年度 第1回地域見守り 支援者全市研修会	1.行政説明I「神戸市の介護予防施策」 2.講義 ①「まだ間に合う!健康な体づくり」 ②「笑顔で楽しいコミュニティづくり ～ユーモアの介護予防～」 3.行政説明II 「高齢者虐待防止のための対応について」	1.神戸市保健福祉局介護保険課 介護予防推進係　係長　岡本和久氏 2ー①神戸市保健福祉局健康部 地域保健課　成人保健係 理学療法士　山本克己氏 ②ユーモアセラピスト 耕笑園てつや氏 3.神戸市保健福祉局介護保険課 介護予防推進係 主査　松原雅子氏	・これが新たな悪質商法 「見守り新鮮情報」メールマガジン
7月	27日(木) 14:00～17:00	第66回 LSA会議	1.行政説明　「神戸市が目指すコミュニティづくりとは」 2.講義　　「認知症になっても暮らせる町を目指して」 3.情報交換　シルバーハウジング入居前面接について	1.神戸市保健福祉局介護保険課 介護予防推進係 係長　岡本和久氏 2.神戸市社会福祉協議会地域福祉課 LSAアドバイザー　重野妙実	・神戸発!阪神淡路大震災後の高齢者の住まいと暮らしそして、支援(財団ニュース抜粋) ・魚崎南コミュニティ支援事業取材記事(神戸新聞抜粋)
8月	24･31日(木) (いずれか選択) 14:00～17:00	第67回 LSA会議	1.調理実習 「美味しく楽しく食事をするために」 2.情報交換 悪徳訪問販売　最近の事例	1.KOBEまなびすとネット 生涯学習市民講師 沖縄料理　柴田真理子氏	・NPO法人　ユーモアらいふHyogo　活動紹介チラ
9月	27日(水) 13:30～16:30	平成18年度 第2回地域見守り 支援者全市研修会	1.実践報告 「楽しく地域づくりを進めるために」 「楽しく地域でふれあいづくり!」 2.講義 「楽しい地域づくりに必要なこと」	1.見守り推進員　2名 魚崎南LSA　生和房雄氏 地域活動者　1名 2.NPO法人JPCom　代表 桑原英文氏	
10月	19日(木) 14:00～17:00	第68回 LSA会議	1.講義 「老後を賢く生きる法律と知恵」 2.一芸教室 「川柳を楽しもう」 3.情報交換 ①第1回LSA研修会報告 ②「あんしんすこやかプラン　配食サービスについて」 ③「シルバーハウジングの今後について研究会」の報告	1.海岸通法律事務所 弁護士　鎌田哲夫氏 2.南本町LSA　川上栄子氏 3ー①伊川谷LSA　荒井秀幸氏 大倉山LSA　玉田和子氏 ②③神戸市介護保険課 塩田　泉氏	・あんしんすこやかガイドブック(H18.9月発行分) ・高齢者虐待を防ぎましょう ・神戸市くらしのダイヤル(H18年度版) ・神戸発!阪神淡路大震災後の高齢者の住まいと暮らしそして、支援(財団ニュース抜粋) ・見守り新鮮情報第3.4.5号
11月		第69回 LSA会議 相互交流訪問の 実施	11月1日～30日のうち1日 (希望場所・希望日)を選択し、各住宅(LSA室)を訪問。 主にコミュニティに関する情報交換、LSAの日常業務について意見交換を行う。		
12月	11日(月) 14日(木) 20日(水) 10:00～17:00 (いずれか選択)	平成18年度 第3回地域見守り 支援者全市研修会	1.講演、演習 「私とみんなが元気になるために」	1.株式会社 日本経営協会総合研究所 講師　櫻井　悦子氏	
1月	25日(木) 13:30～16:30	第70回 LSA会議	1.ケーススタディ 「対応困難事例　グループワーク」 2.一芸教室 「LSAが行う健康体操」	1.神戸市社会福祉協議会福祉部 地域福祉課LSA事業 アドバイザー　重野妙実 2.HAT神戸灘の浜(県)LSA 井上かすみ氏、松井淑子氏、広瀬月子氏	・障害者福祉のあらまし 2006 ・障害福祉サービス制度のご案内
2月	22日(木) 14:00～17:00	第71回 LSA会議	1.講義 「あんしんすこやかセンターについて ～センターの仕事、役割、LSAとの関わり～」 2.一芸教室　寸劇 「LSAってどんな仕事? ～緊急通報システムについて～」 3.情報交換　第2回LSA研修会の報告	1.特別養護老人ホーム 長田ケアホーム 施設長　山内賢治氏 2.大石東LSA　岡田章代氏 灘北LSA　中塚美代子氏、今西純氏 岩屋北LSA　清水英子氏 3.白川台LSA　植田公裕氏	・神戸発!阪神淡路大震災後の高齢者の住まいと暮らしそして、支援(財団ニュース抜粋) ・コミュニティサポートグループ育成支援事業 実施報告書記入例 ・情報提供:新手のヤミ金横行
3月	12日(月) 13:30～16:30	平成18年度 第4回地域見守り支援者全市研修会	1.講演「法テラス事業について」 2.報告 「地域見守り支援者アンケートについて」 ～見守り推進員活動状況調査～ 3.行政説明 「地域見守りの今後の展開について」 4.活動報告 「あんしんすこやかルームの開設にあたって」	1.日本司法支援センター 兵庫地方事務所 所長　麻田光広氏 2.関西福祉科学大学 助教授　斎藤千鶴氏 大阪人間科学大学 教授　峯本佳世子氏 3.神戸市保健福祉局高齢福祉部 高齢福祉課 係長　岡本和久氏 4.須磨在宅見守り推進員　清原幸代氏 協同の苑見守り推進員 上甲千恵子氏、上田利男氏	

平成19年度シルバーハウジング生活援助員会議および地域見守り全市研修内容

	開催日	会議名	内容等	講師等	その他配布物等
H19・4月	26日（木） 14:00～17:00	第72回 LSA会議	1. 事例学習 対応困難事例について 事故等報告書の書き方について 2. 平成19年度コミュニティサポートグループ育成支援事業に向けて ①グループワーク ②平成19年度事業計画について 3. 一芸教室 カレンダーで遊ぼう 4. あんしんすこやかプランおよびサービスについて	1. 神戸市社会福祉協議会事務局 2－①神戸市社会福祉協議会 LSAアドバイザー　重野妙実 2－②神戸市社会福祉協議会事務局 3. 神戸市社会福祉協議会 LSAアドバイザー　重野妙実 LSAのみなさん 4. 神戸市介護保険課　塩田泉氏	・「シルバーハウジングの今後のあり方に関する研究会」の研究報告書 ・兵庫県ボランティア活動等行事用保健　パンフレット
5月	24日（木） 14:00～17:00	第73回 LSA会議	1. 講義およびビデオ上映 「高齢者の体調管理」 2.LSA業務の再確認 業務マニュアルの再確認と記録の書き方 3. 事例学習	1. 神戸市保健福祉局地域保健課 成人保健係長　渋谷光代氏 2. 神戸市社会福祉協議会地域福祉課 LSAアドバイザー　重野妙実 3. 神戸市社会福祉協議会事務局	・第72回LSA会議カレンダーで遊ぼう作品集 ・神戸発!阪神淡路大震災後の高齢者の住まいと暮らしそして、支援（財団ニュース抜粋） ・神戸市の介護保険のあらまし（平19年3月31日発行分） ・高齢者・障害者を悪質商法から守るために ・出前トークテーマ集（平成19年度版）
7月	3日（火） 13:30～16:30	平成19年度 第1回地域見守り支援者全市研修会	1. 行政説明 ①「地域見守りの今後の方向性について」 ②「民生委員制度とその役割」 ③「ふれあいのまちづくり協議会の組織とその役割」 ④「特定高齢者の基準について」 2 講演 「コミュニティづくりのい・ろ・は」 ～職場、地域での人間関係づくり～	1－①神戸市保健福祉局介護保険課 介護予防推進係　係長　南誠二氏 ②神戸市保健福祉局総務部 計画調整課　主査　木下雅洋氏 ③神戸市保健福祉局総務部 計画調整課　地域福祉係 係長　渡邊智明氏 ④神戸市保健福祉局介護保険課 主査　山崎初美氏 2.mottoひょうご 栗木剛氏	
7月	26日（木） 14:00～17:00	第74回 LSA会議	1. 講義、演習 「会議の持ち方　～ソーシャルワークスキルアップ～」 2. 事例学習 「緊急通報システムについて」	1. コミュニケーションスキルセンター 地域活動研究所 代表　藤田敬一郎氏 2. 神戸市社会福祉協議会事務局	・神戸発!阪神淡路大震災後の高齢者の住まいと暮らしそして、支援（財団ニュース抜粋） ・人権に関わりの深い相談窓口のご案内
8月	30日（木） 14:00～17:00	第75回 LSA会議	1. 講義 「精神的な病気と認知症　Part1 ～一人暮らしの認知症入居者の支え方～」 2. 講義、演習 「地域を知る　～エコマップを作ってみよう～」	1. 神戸親和女子大学 非常勤講師　多田トモ子氏 2. 神戸市社会福祉協議会地域福祉課 LSAアドバイザー　重野妙実	・神戸市くらしのダイヤル（H19年度版） ・「世界アルツハイマーデー記念講演会」チラシ ・「認知症 正しい理解と よりそう心」パンフレット配布
9月	25日（火） 13:30～16:30	平成19年度 第2回地域見守り支援者全市研修会	1. 講演、事例発表 ①「コミュニティづくりに必要な新たな視点　～気づき～」 ②コミュニティサポートグループ育成支援事業 事例報告　3事例 2. コミュニティサポートグループ育成支援事業 困難ケース検討 3. 総括、まとめ	1－①、2、3 NPO法人JPCom代表　桑原英文氏 2. 見守り推進員 HAT神戸灘の浜LSA　西川明美氏	
10月	24日（木） 31日（木） 14:00～17:00 （いずれか選択）	第76回 LSA会議	1. 施設見学と講義 ①「精神的な病気と認知症　Part2 ～一人暮らしの認知症入居者の支え方～」 アネックス湊川ホスピタル見学 ②「社会資源を知る シルバーカレッジから学ぶ・グループわの活動」 神戸市シルバーカレッジ見学	1－①アネックス湊川ホスピタル 職員のみなさま ②神戸市シルバーカレッジ 教務リーダー　松本容子氏 NPO法人 社会還元センターグループわ 理事長　郷肥三氏 副理事長　上田市夫氏	
11月	29日（木） 14:00～17:00	第77回 LSA会議	1. 講義 「生きることを支えるターミナルケア」 2. 一芸教室 「お元気体操（歌体操）をしましょう」 3. 事例学習 「悪質商法について」	1.（社）神戸市医師会立 兵庫区医師会訪問看護ステーション 所長　武市和子氏 2. 東部高齢者介護支援センター派遣のLSAのみなさん 3. 神戸市社会福祉協議会事務局	・あんしんすこやかガイドブック 高齢者保健福祉施策のあらまし ・ホスピスってなあに?（NHK厚生文化事業団発行） ・神戸発!阪神淡路大震災後の高齢者の住まいと暮らしそして、支援（財団ニュース抜粋）
12月	12日（水） 13日（木） 14日（金） 9:25～16:30 （いずれか選択）	平成19年度 第3回地域見守り支援者全市研修会	1. 講演、演習 「傾聴を学ぶ　～信頼関係を築くために～」	1. 聖マーガレット生涯教育研修所 主任研究員　長尾文雄氏	
1月予定	25日（金） 14:00～17:00	第78回 LSA会議	1. 講演 「こうべ安心サポートセンターの役割り ～権利擁護事業等について学ぶ～」 2. グループワーク 「わたしの安心　わたしの老後」	1. こうべ安心サポートセンター 所長　藤林安穂 2. 神戸市社会福祉協議会地域福祉課 LSAアドバイザー　重野妙実	
2月予定	28日（木） 13:00～17:00	第79回 LSA会議	調整中	調整中	
3月予定	調整中	平成19年度 第4回地域見守り支援者全市研修会	調整中	調整中	

資　料

平成18年度シルバーハウジング生活援助員新任研修および地域見守り関係者新任研修内容

	開　催　日	研修名（主催者）	内　容　等	講　師　等	その他配布物等
LSA新任研修のプログラム	4月25日（木） 10:00～12:00	平成18年度4月 LSA新任研修	1.研修 シルバーハウジング生活援助員業務について 「シルバーハウジング生活援助員マニュアルの説明」 2.神戸市のシルバーハウジングと生活援助員派遣事業について	1.神戸市社会福祉協議会福祉部 地域福祉課LSA事業 アドバイザー　重野妙実 2.神戸市保健福祉局高齢福祉部 介護保険課　塩田泉氏	・神戸発３つのLSA事業 ・シルバーハウジング入居者の皆様へ（パンフレット） ・名札
地域見守り関係者新任研修のプログラム	5月8日（月） 9:50～16:15	平成18年度 第1回 地域見守り関係者 新任者研修	1.研修 ①地域見守りの全市展開について （あんしんすこやかプラン含む） ②生活保護制度の概要 ③介護保険制度の概要 ④先輩支援者からのひと言 「日頃の見守り支援活動から思うこと～新任の方に向けて～」	①神戸市保健福祉局高齢福祉部 介護保険課 係長 岡本和久氏 ②神戸市保健福祉局保護課 保護係　係長　八乙女悦範氏 ③神戸市保健福祉局高齢福祉部 介護保険課管理係 係長 林秀和氏 ④推進員、SCS、 ひよどり台LSA　壷井信二郎氏 (5月8日担当) 明和LSA　石井厳貞氏 (10月30日担当)	・あんしんすこやかガイドブック ～高齢者保健福祉施策のあらまし～ ・神戸市介護保険のあらまし ・生活保護のあらまし

※ 同じプログラムで10月19日（木）（10月ＬＳＡ新任研修）と10月30日（火）（第２回地域見守り関係者新任研修）に開催。
※ 毎年同じプログラムで年２回開催し、新しく着任したＬＳＡはこの研修を必ず受講するようにしている。

平成19年度シルバーハウジング生活援助員新任研修および地域見守り関係者新任研修内容

	開　催　日	研修名（主催者）	内　容　等	講　師　等	その他配布物等
LSA新任研修のプログラム	4月26日（木） 10:00～12:00	平成19年度4月 LSA新任研修	1.研修 シルバーハウジング生活援助員業務について 「シルバーハウジング生活援助員マニュアルの説明」 2.対人援助技術 3.神戸市のシルバーハウジングと生活援助員派遣事業について	1,2.神戸市社会福祉協議会 福祉部地域福祉課LSA事業 アドバイザー　重野妙実 3.神戸市保健福祉局高齢福祉部 介護保険課　　塩田泉氏	・神戸発３つのLSA事業 ・シルバーハウジング入居者の皆様へ（パンフレット） ・名札
地域見守り関係者新任研修のプログラム	5月10日（木） 9:50～16:15	平成19年度 第1回 地域見守り関係者 新任者研修	1.研修 ①地域見守りの全市展開について （あんしんすこやかプラン含む） ②生活保護制度の概要 ③介護保険制度の概要 ④先輩支援者からのひと言 「日頃の見守り支援活動から思うこと～新任の方に向けて～ 」	①神戸市保健福祉局高齢福祉部 介護予防推進係 係長　南誠二氏 ②神戸市保健福祉局保護課 保護係 係長　八乙女悦範氏 ③神戸市保健福祉局高齢福祉部 介護保険課管理係 係長　林秀和氏 ④推進員、SCS、 大倉山LSA　玉田和子氏 （5月10日担当） 六甲アイランド LSA 佐藤厚子氏 （11月1日担当）	・あんしんすこやかガイドブック ～高齢者保健福祉施策のあらまし～ ・神戸市介護保険のあらまし ・生活保護のあらまし

※ 同じプログラムで10月18日（木）（10月ＬＳＡ新任研修）と11月1日（木）（第２回地域見守り関係者新任研修）に開催。
※ 毎年同じプログラムで年２回開催し、新しく着任したＬＳＡはこの研修を必ず受講するようにしている。

シルバーハウジングとLSA室

	設置者	団地等の名称	シルバー戸数	LSA室の電話	LSA派遣施設名	派遣法人名
東灘区	市	シルバーハイツ　六甲アイランド	30	857-5088	特別養護老人ホーム 協同の苑　六甲アイランド	協同の苑
	県	神戸魚崎南	30	412-4513		
	市	シルバーハイツ　北青木	45	431-0001	特別養護老人ホームおおぎの郷	千種会
	市	シルバーハイツ　魚崎中町	9	435-6688	特別養護老人ホームサンライフ魚崎	ささゆり会
灘区	市	シルバーハイツ　大石東	31	821-3838	大石高齢者介護支援センター	鶯園
	市	シルバーハイツ　灘北	90	801-2290		
	県	神戸岩屋北町	50	882-2829		
	市	HAT神戸灘の浜　9番館	99	803-3619	特別養護老人ホーム ハピータウンKOBE	博由社
	県	HAT神戸灘の浜　6番館	90	802-4388		
中央区	市	シルバーハイツ　日暮	20	251-8801	東部高齢者介護支援センター	イエス団
	市	シルバーハイツ　筒井	60	251-4718		
	県	神戸南本町	63	261-8416		
	県	神戸大倉山	222	341-7850 341-8523		
	県	HAT神戸脇の浜（県）	117	252-5709	脇の浜高齢者介護支援センター	やすらぎ福祉会
	市	HAT神戸脇の浜（市）	100	221-1661		
兵庫区	市	シルバーハイツ　菊水	30	511-7767	特別養護老人ホーム海光園ミラホーム	海光園
	県	神戸明和	92	672-6031	特別養護老人ホーム モーツァルト兵庫駅前	フジの会
	市	シルバーハイツ　中道	68	575-2500	特別養護老人ホーム パーマリィ・イン中道	報恩会
	市	シルバーハイツ　浜山	28	682-8731	浜山高齢者介護支援センター	神戸千ヶ峰会
北区	市	シルバーハイツ　鈴蘭台	36	592-5984	北在宅福祉センター	神戸市社会福祉協議会
	市	シルバーハイツ　ひよどり台	99	742-3357	特別養護老人ホーム 神港園しあわせの家	神港園
	市	シルバーハイツ　西大池	37	583-7150	特別養護老人ホーム 大池サンホーム	盛雲会
長田区	市	シルバーハイツ　長田北	38	575-8777	特別養護老人ホーム 長田ケアホーム	神戸福生会
	県	神戸片山	6			
	市	シルバーハイツ　東尻池	20	685-3341	特別養護老人ホーム 故郷の家・神戸	こころの家族
	市	シルバーハイツ　浜添（真野ふれあい住宅）	21			
	県	神戸西尻池	92	643-0206	ひょうご高齢者 デイサービスセンター	神戸聖隷福祉事業団
須磨区	市	シルバーハイツ　離宮西町	6	739-5750	離宮高齢者介護支援センター	きたはりま福祉会
	市	シルバーハイツ　松風	44	737-2525	特別養護老人ホーム あいハート須磨	全電通 近畿社会福祉事業団
	市	シルバーハイツ　松風第2	46			
	県	神戸白川台	27	795-1090	特別養護老人ホーム 神港園しあわせの家	神港園
垂水区	県	神戸小東山	28	792-3023	特別養護老人ホーム オービーホーム	丸
	市	シルバーハイツ　ベルデ名谷	122	794-0857	特別養護老人ホーム桃山台ホーム	恵生会
	市	シルバーハイツ　舞子山手住宅2号棟	104	783-5001	本多聞高齢者介護支援センター	報恩感謝会
	市	シルバーハイツ　舞子山手住宅3号棟	50			
西区	市	シルバーハイツ　ベルデ玉津	92	911-4462	特別養護老人ホーム 大慈弥勒園	大慈厚生事業団
	県	神戸玉津今津	28	917-6016	特別養護老人ホーム 花園ホーム	慶明会
	県	伊川谷第2	96	976-2593	特別養護老人ホーム 永栄園	神戸福生会
	市	シルバーハイツ　西神井吹台	112	992-9894		
		計39住宅			25施設	24法人

神戸からの発信

シルバーハウジング報告書

平成20年２月

発行　社会福祉法人 **神戸市社会福祉協議会**
〒651-0086　神戸市中央区磯上通3丁目1-32
こうべ市民福祉交流センター4階
TEL. 078-271-8240　FAX. 078-271-1172